

川柳塔

昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
平成十六年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九二二号



● 日川協加盟

No. 921

二月号

川柳塔創刊八十周年記念

合同句集 『川柳塔』

「川柳塔」は、大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成十六年で八十周年を迎えます。これを記念して、同人・誌友を中心とする合同句集『川柳塔』を発刊いたします。合同句集は昭和四十九年以来、十年毎の刊行で平成六年の誌寿古希記念につづく第四集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎いたします。一人でも多くの御申込みを心からお願い申し上げます。

- ★刊行 七月七日 ★締切 四月二十日（火）
- ★体裁 B6判・約五百ページ・上製本
- ★参加費 五千円（句集一冊呈）
- ★掲載句 一人十五句（自選）
- ★申込 所定用紙に掲載句（平成六年以降の発表句または未発表句）を記入し、参加費を添えて川柳塔社事務所へ。なお、参加費は同封の払込用紙でお願いします。

〒545-0005

大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第二ビル二〇二号室

川柳塔社

電話 〇六一六六二九一六九一四

医療法人社団

ISO 9001 : 2000 認証取得

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)

<http://www.yukawa.or.jp>

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2
JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分

川柳塔社八十年

河内 天笑

川柳の社会化、初心者指導、古句研究を柱に大正十三年二月、麻生路郎が「川柳雑誌」を発刊して今年で八十年を迎えます。この二月はちょうどその記念すべき月にあたります。昭和十一年七月に川柳職業人を宣言した路郎は、川柳雑誌社を個人経営としました。第二次世界大戦の戦局が悪化した昭和十八年十二月「雑誌奉還」で終刊号となりませんが、昭和二十一年八月に「川柳雑誌」が再刊。「いのちある句を創れ」「二句を残せ」を標榜した路郎は五百人を越す門下生を育て、昭和四十年七月七日肝臓障害のため帰らぬ人と

なりました（七十六歳）。同年十月号より「川柳雑誌」は「川柳塔」に改題され同人制の「川柳塔社」として再出発して現在に至りました。

初光 八十年の塔の艶

みつ子

副主幹からもらった年賀の句です。しかし、八十年は目出度い節目の年といっても無限への一つの通過点に過ぎません。わたしたち一人一人は「川柳塔」という大きな生きものの細胞です。元気で活発な細胞こそが塔の艶を輝かせるのです。生きものは時代と共に進化を重ね、細胞は常に新陳代謝をくり返し、無限に挑戦してゆきます。そのためにも先ず一人一人が元気な細胞で活躍出来るように認識して、九十年、百年を目指してほしいと願っています。

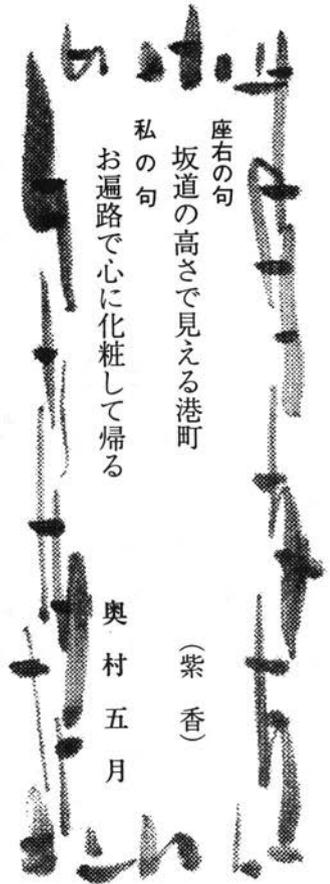
初場所が終わりました。高見盛の人氣は絶頂です。花道を歩いてくる時は何を考えているのか、それとも何も考えまいとしているのか。平常心をどうして保つかはその人その人の方法があるでしょう。そしていざ本番の土俵に上がった時の高見盛がたまらない。自分を奮い立たせるためのパフォーマンスは天下一品です。そして相撲に勝てば胸を張って、負ければいかにもしょんぼりとしているあの銜いの無さが何とも言えません。ペーソスの原点を教えられていくようで、とても勉強になります。

一月七日の満月やはり赤かった（月齢二四・七）
鳥たちを杜に帰して月のぼる

点滴の枕並べるのもご縁

あてられて猫が散歩に出ていった

十階の窓から鬼は外の豆



座右の句

坂道の高さで見える港町

(紫香)

私の句

お通路で心に化粧して帰る

奥村 五月

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原王青

■巻頭言 川柳塔社八十年

河内天笑……(1)

古い殻

川上大輪……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選……(4)

自選集

(51)

水煙抄

板尾岳人選……(56)

■特集 心に残る一冊

(76)

川端一歩・福士慕情・山口光久・大内朝子・田岡九好
 小川注湖・富田蘭水・穴吹尚士・出口セツ子・山本蛙城
 松本文子・堂上泰女・新家完司・丹後屋肇・園山多賀子
 井上桂作・早川盛夫・田中正坊・早川棲世

麻生路郎物語(26)

東野 大八……(87)

愛染帖

波多野五楽庵選……(90)

誹風柳多留一四篇研究 63

(94)

古い殻

川上大輪

富湖が亡くなってからもう四年になる。月日の経つのは早いものだと思う。

この四年間私は何をしていたのだろうか、今振り返ってみると何もしないで思いつきだけで引きずってきたような気がする。

人生って何だろう。私はあまり物事を真剣に考える方ではないし、考えようともしない方である。しかし、この先どうなるのだろうか。このままだと食べて寝るだけの繰り返しの人生でしかないのは目に見えている。

たまに孫の顔を見て、そして句会に参加して、のほほんと毎日を過ごす。まあそれもつと歳をとればいいのかもしれないが、今の私にはまだ早過ぎるような気がする。

悲しい事や辛い事はたくさんあったが嬉しい事は一度もなかった。川柳でいろんな賞を貰っても、子どもたちが結婚しても、初孫が生まれても……、富湖がいたらどんなにか喜ぶ事だろうと、喜んでくれる人がいない淋しさで悲しさがいつも頭の中にあっただ。

川柳でその淋しさを紛らわそうとする自分がいつもそこにあり、いつも川柳に助けられている自分があった。狂ってしまったらどんな

茴香の花

「つじつま」

藤田泰子選 … (96)

一路集「巻く」

吉川寿美選 … (98)

「具合」

江原秀夫選 … (98)

初歩教室「雪」

奥谷彩子選 … (99)

秀句鑑賞

「同人吟」

三宅保州 … (100)

水煙抄

前たもつ … (102)

■エッセー 言靈考

鈴木公弘 … (104)

一月本社句会

山本蛙城 … (105)

各地柳壇 (佳句地十選 / 池内かおり)

… (110)

柳界展望

… (126)

二月各地句会案内

… (128)

■編集後記

楓葉・義子 … (130)

座右の句

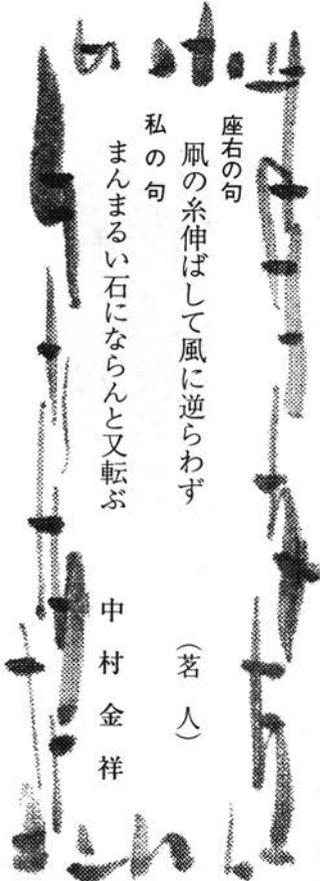
風の糸伸ばして風に逆らわず

(茗人)

私の句

まんまるい石にならんと又転ぶ

中村金祥



にか楽になるだろうと思つた時もあったが、結局は狂う事が出来なかつた。しかし、いつまでもこんな日々を過ごす訳にもいかない。何の目的もなく、楽しみもない時をこの先何十年と過ごす、それはあまりにも自分自身が惨めで生きて行く価値すら見いだせない。

思い出は思い出として大切にしなければいけないが、それにしがみついているは前進どころか後退の一端を辿るばかりである。悲しみや苦しみをバネにして、進む事を考えなければ本当に生きる事にはならない。

川柳もまた同じだろう。単なる暇潰しの代わり映えのしない句、例えばどこかで見かけたような句に少し言葉や表現を変えただけで何の個性もないような句を、だらだらと情性で作っているようでは何の進歩もないであろうし、ましてや生命ある句など出来るはずもない。いつまでも古い句にしがみついているとはいけない。時には思い切った発想の転換も必要で、冒険も必要であろう。古い殻を破ることはそう簡単には出来ないかもしれないが、まず一步を踏み出すことだろう。などいつも思っているのだが、なかなか前に進む事ができず、相変わらず古い殻に閉じこもつたままの句を作っている。人生も川柳も答が無いから難しく楽しいのかもしれない。

伸びて縮んでまだまだ長い道である 大輪



河内天笑選

佐倉市 岡井やすお

連休へ建国の日は変えられず

五輪年 一日多く楽しもう

卒寿過ぎこともニュースを見て学ぶ

体中部品修繕御長命

深海の動物園は檻に人

トライアンドエラー衛星物にせん

竹原市 小島蘭幸

五百羅漢の中に紛れて眠りたし

竹の子の絵はそのままだ娘は嫁ぐ

男はいつも黙して風を読んでる

妻に勇気を貰うことなどあるものか

病院の廊下を急ぐ人ばかり

一月一日という一本の竹の節

弘前市 福士慕情

アルプスへ青春賭ける親不幸

あの山の記憶を残す足の裏

老いてなお深田久弥の山を行く

神々の峰までゴミがやって来る

津軽残照 岩木お山が燃えている

山あいに窮屈そうに日が沈む

大阪市 西出楓楽

本当の嘘をとときには吐いておく

世渡りの免疫力が不足する

六十路まだデッサンを繰返す

光ってる人ほとんどは未亡人

そのうちに罪人になる喫煙者

野心家の手は冷たくてあぶら性

鳥取県 新家完司

褒め言葉ばかりじゃ骨が弱くなる

心臓に苔ありふれた病気です

憎しみは憎しみ蛇は蛇を産む

頭から蒲団被ると秘密基地

余生とか晩年だとかいう明日

もう少しこの星にいて月を見る

宇部市 平田実男

七度目の申を励ます万歩計
争いは絶えぬ一人になるまでは
混浴で隅へ寄っているのはお・と・こ
一を聞き十を悟っている不幸
久方の下駄を喜ぶ土踏まず
一本の杭を隣とにらめっこ

弘前市 高橋岳水

三猿になってゆく日の寒い背な
時雨れば目立ちはじめの泣き黒子
寝袋で見る大胆な夢がある
吹雪く夜の三味は臍に沁みて来る
採尿のコップがあばく私生活
逡巡の男にかけるエンドラン

河内長野市 加島由一

一目惚れ相性までは考えず
除夜の鐘夫婦けんかは持ち越さず
差し向いあなたひとりの大宇宙
イヤリング男は揺れるものが好き
惚れ葉かけたいひととすれ違ふ
ああ親子共に歌えるものがない

愛知県 早川盛夫

負けたんだなユニホームがまっ白だ
いつ時の辛抱雲は切れてきた
入選をしたからきつと良い絵だろう

十年の月日を埋めるナベの湯気
家までの道に飲み屋が二軒ある
平凡に生きることって難しい

高石市 浅野房子

一夜干しゆっくり焼けてきた昼餉
最後まで翔べず残ったのはわたし
健康に自信があつて死が見えぬ
乗り替えて地獄に落ちた女がいる
あの角を曲がると犬に吠えられる
皺寄せは君にもきつと来るだろう

出雲市 伊藤玲子

若水に心嗽いで歩きだす
寒の月折れそう温めてあげる
家からは五分飛び立つ駅がある
メンバーに医者も坊主もいて跳べる
空っぽの壺に入りたいものがある
きれいな骨だ正直な母だった

横浜市 保田絹子

日蝕のコロナ テレビにかぶり付き
下町の迷った路地に江戸情緒
変貌に今浦島の六本木
討ち入りの大義譚々十二月
待たされて足を引き摺る秘宝展
竹とんぼ親子の絆天に舞う

神戸市 山口 光久

エプロンの似合う男と褒められる
頭から食べる目刺しの力瘤

手抜きした仕事にしつぺ返される
どっこいしょ老いの体に発破かけ
人情が欲しくて演歌口遊ぶ

尼崎市 春 城 武庫坊

もう歳はとりたくないが師走来る

足腰に冬が一番先に来る

侵略の歴史を語る兵の墓

逃げ道を確かめてから考える

余生なお夢を描いて日々生きる

尼崎市 春 城 年 代

黒い電話でちゃんと留守番足りてます

噛んだ上また噛んで暮れ口内炎

鉛筆のチビを手放せないでいる

やわらかい孫のホッペを待っている

小川の鯉よ達者か医者者のゆき帰り

尼崎市 長 浜 美 籠

自信ないことには触れず語尾濁す

うとうとと至福にひたる足のツボ

ニニロツツ聴いた日もあるイヴ二人

環状線走るBGMを友にして

他人様の歳を気にする暇がない

尼崎市 内 田 美也子

パソコンと無縁のままにまた一年

ちゃん付けで昔へ戻るクラス会

乗り換えるたびに近づく冬銀河

冬帽子一度被ると離されず

三猿になれず反省くり返し

尼崎市 田 辺 鹿 太

この歳でいつまで虹を追っかける

ほんまもんらしい根っこに土がある

たくあんに茶漬けサラサラ自然食

パソコンを習うと古希の妻がいう

田舎では一膳めしは嫌われる

伊丹市 山 崎 君 子

おめでとう留学生のアクセント

手足の痛みひとりいたわる終い風呂

薄化粧若くありたい逝くまでは

信心も師走迎える風の中

欲張った母のお祈り亡父の部屋

川西市 西 内 朋 月

天高く飛行機雲が伸びている

煙突の上を流れるちぎれ雲

瘦身を冷え冷えさせる冬の雨

二三回使っただけの餅搗機

休日のお昼に食べる朝御飯

川西市 米原雪子

西宮市 西口いわゑ

年忘れ持ち続けている夢に生き
介護して習慣ついた日記書く
好奇心ちよつとくすぐり手伝わす
時間だけ豊かになつて物足りず
水路行くのどかに遊ぶカイツブリ

三田市 久保田千代

窓たたく風と話をしています
ジングルベルに押されケーキを二つ買う
本場から蟹が届いて大さわざ
頭では承知しててもうなすけぬ
五十年組んだあなたに二重丸

西宮市 山本義子

落日の赤は明日の吉とする
いい夢を見たい布団に陽を貰う
自信ない時は小さい声になる
非常口確かめ入る旅の宿
意思疎通取れない母に逢いに行く

三田市 北野哲男

合掌のかたちでゴクリ岩清水
ほんやりと出来るひととき大事にし
隠し味にウソもすこうし入れておく
ペランダで野心から乾涸びる
あしたつく嘘をとると煮ています

西宮市 緒方美津子

無礼講だから黙って呑んでいる
日日変わる野山に絵の具追いつかず
ルミナリエもう季語になる九年目
飛行機の本音地上へ戻りたい
真ん中に据えているのはお金だろ

宝塚市 嵯峨根保子

地球儀はテロという字に破られる
五時四十六分帽子握ってレクイエム
なんでだろうお茶買う主婦になつて
鯛焼きの温みじわりとかん袋
おほほほ夕日恥ずかし露天風呂

西宮市 亀岡哲子

火を抱いて雪を降らすか津軽三味
犬の耳動いてセコムがわりかな
ケーキ屋とマンシヨンの名はすぐ忘れ
体調が良くてふんわり字が書ける
煩惱の消炎剤を飲んで

地下街の松茸うどん秋終る
ひじき切干し命を繋ぐ粗食煮る
マスカットのみどりに秋の風邪癒す
かくれんぼする場所もなく2DK
静電気パチパチ今日も脱ぎ捨てる

西宮市 坪井孝一

ライブルに饒別貰い考える

順不同なんで私が前に出る

角砂糖とシャンソンのない喫茶店

妻とけんか敬語の会話もう十日

しおらしい態度で父はずぐ折れる

西宮市 長谷川 淳

踏み台の要らぬ便利な孫が来る

まだ一句浮かんで来ない風呂の中

骨揚げの姿に吾れを嵌めてみる

時報待ち秒まで合わす新時計

柘と鱒の頭拝む祖母

西宮市 門谷 たず子

よりかかる大樹も枯れて冬さ中

して上げることがないので経を読む

何のために生きているのか飯茶碗

失ったものの大きさあたたかさ

返せない恩を背負って枯野行く

奈良県 渡辺 富子

新書二冊錆落しする冬に入る

あるだけの宝石つけてディナーショー

札束を積まれ歪んでくる正義

小骨多い妻の小言が胃に溜まる

地上の星もつとあるはず捜そうよ

奈良市 米田 恭昌

少子高齢重い荷物を背負う子等

鉛筆の便り嬉しい仮名の文

松茸を買った記念に写真撮る

子は受験せめて家族のテレビ断ち

連れもうて夢分かちあうジャンボくじ

奈良市 天正 千梢

ひとつずつ罪消すように除夜の鐘

山寺の鐘のひびきは物憂げに

お昼時十二鐘打つ興福寺

炮烙ばうらくを割って今年の厄落とし

一本足で立ってる男多すぎる

生駒市 飛永 ふりこ

くちコミで患者増えてるプチ整形

洪皮を剥がす母の手弾んでる

一つ役終って絆深くなる

地域での掃除顔触れ決まってる

油断したところを風邪の狙い撃ち

香芝市 大内 朝子

お芝居がだんだん剥げる酒の酔い

のほせたらあかんブレイキ踏む心

母親の馬鹿を演じて悔いはなし

威勢良い啖呵を切った後始末

越冬の覚悟静かに野の仏

檀原市 安土理恵

散る日など思いもしないバラである
咲き切つてドライフラワーにもなれず
風船が破れて振り出しに戻る
潮騒の島へ漕ぎ出すフルムーン
舞い終えて母は幽かに笑み給う

檀原市 居谷 真理子

井の中で空の深さは知っている
深い傷いつかは文字にして癒す
砂時計真似て逆立ちしてみよか
豊饒の海へ私の灰を撒く
君は母 幸せになる義務がある

和歌山市 山口 三千子

外見で分からねぬ温みない器
子は巢立ち年のサイクル早くなる
生涯は刹那 狭間に運不運
ミリオーネ惚け予防にとクイズ解く
クロスワードパズルが時を忘れさず

和歌山市 松尾 和香

友好のバージンロード文化目(中国南充市)
通訳に託して話す五七五
指を折リスキンスリップの五七五
歴史の国大仏様も山ひとつ
亡母の根に継り一輪花咲かす

和歌山市 細川 稚代

カレンダー後一枚が威張つてる
人影が怖くて夜道歩けない
あたたかい笑顔残してゆき給う(故垂井千寿子さんへ 2句)
葵水さん待ちかねているお浄土へ
整理してすてるものない写真帳

和歌山市 上地 登美代

これほどに金たまればとゴミ袋
静寂は嫌い耳鳴り強くなる
三猿になろうなどは所詮無理
年甲斐もなく心が燃えるまだ女
青天へ翼広げる好奇心

和歌山市 吉村 さち子

逃げ足の早い師走の空財布
カレンダー人それぞれの物語
生かされて今年も雑煮胃にとどく
お神酒からワインに代わる三が日
歩ける内が花と誘いにのつた旅

和歌山市 木村 初子

百態の雲が追い越す車椅子
童唄歌う窓辺に雲一つ
哀楽を越え終章は波静か
健康を感謝八十路の日向ぼこ
人生の旅も傘寿の雪月花

和歌山市 堀 畑 靖 子

本人がもう時効やと言う浮気
番犬に言う犯罪の増えたこと

怒鳴られてひるんだ雑魚が立ちあがる
ラブラブでいたいと思うベアルック
夕日背に散歩の町も老いてくる

和歌山市 古久保 和 子

パン皿の上に二人の暴風雨

まだ頭下げているから下げ直す

冗談が的を射すぎて寒くなる

シクラメンもポインセチアも騒ぎすぎ

落ち葉掃くシャンソンどころではないぞ

和歌山市 楠 見 章 子

やいのやいのこれから靴を履くところ

情報に囲まれ身動きがとれぬ

絵皿からどつと流れてくる第九

脱がされるマネキン少し横を向く

チャップリンの杖バス停に忘れられ

和歌山市 松 原 寿 子

絵手紙の雪山ひびき合う木霊

福の神のがした扉さしみ出す

運のよい流れ掴んだ命抱く

寒風へ心のリズム満ちてくる

欠けてから本物と知る鑑定書

和歌山市 牛 尾 緑 良

ご近所と挨拶をする定年後
回り道ゆつくり人間を磨く
境界線今日は夫婦の間にも
につこりと笑って心届いたの

父の帽子に時だけが溜まりだす

和歌山市 青 枝 鉄 治

少し雪あれば絵になるぼたん鍋

リストラへ先ず孫請けがかぶる泥

ダルマに目入れて政治家ぶつた顔

側で寝る妻にすまない寝言言う

器量では負けてダイヤの数で勝つ

和歌山市 田 中 み ね

CTの結果へ祝う御赤飯

異常なし告げる主治医の男前

家事万端腰の御機嫌とりながら(腰痛)

シナリオに無かったはずの医者通い

人生のゴールは視野に入れてない

和歌山市 福 井 桂 香

メロンパン齧ったように残り月

疑似家族そして分裂する絆

目を瞑った魚を食べたことがない

温めた卵やがてはライバルに

ほがらかは不老長寿という薬

和歌山市 西山 幸

海南市 三宅保州

剥げてきた勲章たちもさむかろう
占いを見て宝くじ買いいに行く
不器用を蓄えてきた古曆

見とどけたくて局所麻酔してもらう
花活けたほかは変わらぬ事故現場
被害者にとつては時効などはない
舞ってさえいれば誰かが見てくれる

ポケットの拳も負けを悟ったか
テロ続く柿も蜜柑も熟れたのに

ヘルパーが帰ると機嫌悪い母

和歌山市 木本朱夏

海南市 堂上泰女

どっこいしょと鬼立ち上がる年の暮れ
坊さんが年末ジャンボ買うたはる
ハンカチで拭いてりんごの丸齧り
素通りができぬ花屋も古書店も
亀の背に揺られて夢を買いに行く

優等生なんて十字架負わされる
ぎりぎりの苦勞が生んだ思いやり
子の下宿へ押し売りに行く母の愛
天国か抹茶をすすする紅葉溪
息子の恋知らぬふりしてする援助

和歌山市 桜井千秀

和歌山県 中後清史

下積みに耐えて煌めく星を恋う
ほどほどの我慢泣いたり笑つたり
忙中閑並び替える植木鉢
大根畑声かけ歪み貰うて来る
便宜さを求めて自然遠ざける

泥舟と知らずに乗った勇み足
どっちにも取れる説教聞かされる
道草をさせない妻が居てくれる
その由来知らぬ祠がある麓
落武者の里も蔓の屋根となる

和歌山市 福本英子

鳥取市 植田一京

誘い水ぐらいで乗らぬ重い腰
観覧車年齢制限ないように
箱で来るみかん時どき裏返す
若いねと言われ気になりだした皺
大掃除せんでも新春はきてくれる

古里の秋に民謡湧いて出る
しいの実を拾った山が懐かしい
古里の柱時計を見に帰る
女は謎男はとても適わない
人生は謎解くためにあるのかな

鳥取市 岸 本 宏 章

六甲おろしひとりで歌うものでなし

悪いことしていいのに叱られる

本人の顔より確か証明書

ことさらに詩人の肩へ枯葉舞い

喜びを隠すけいこもする土俵

鳥取市 岸 本 孝 子

根底にあるのはいつも金のこと

通帳はまさかのときの金ばかり

骨のある男白旗など持たぬ

私を元気にさせる空財布

老いた身にジングルベルはやかましい

鳥取市 美 田 旋 風

ほめてから少し叱って子を諭す

脱線すると真顔で聴く生徒

思い出がいっぱい家も古くなる

刑務所の大入り満員いただけぬ

後篇の人生草書で伸びのびと

鳥取市 中 村 金 祥

失言も当選すればセーフかい

旅ひとり隣の客が亡父に似る

旅ひとり携帯電話持たされる

食い過ぎた蟹に食われる夢を見る

消しゴムが使えぬイラク支援法

鳥取市 西 村 黙 光

合格の報せに酒が馳けてくる

年金が誘ってくれるネオンの灯

風呂上り天女が酌をしてくれる

酒の味健康診断してくれる

酔い回りタイムトンネルくぐらせる

鳥取市 夏 目 一 粹

風が変わると緊張が走りだす

ちよっとした恋の台詞に若返る

人事には酔ったふりして耳を立て

争いが嫌いで一人酒をのむ

かっときた若さが詫びを入れてくる

鳥取市 春 木 圭 一 郎

変わらない思い支えに生きている

現実を受け入れ進む道探す

いつだって一人じゃないと言いつ聞かず

ものさしはいつも自分のもの使う

人はみな好きに自由に生きていい

鳥取市 有 沢 せつ子

いち早く門松の立つ百貨店

誕生日商魂だけに祝われる

一人の夜耳が過敏になつてくる

留守がちな家に宅配よく止まる

長電話大事なことを言つてない

鳥取市 録 沢 風 花

木枯らしに小さな秋がくしゃみする
落ち葉カサカサ命は軽い音になる
バッグにはお薬手帳診察券
ぬけ殻にならないように辞書を繰る
世の中の荒れをペットに癒される

鳥取市 武 田 帆 雀

蟹味噌は甲羅に詰めたのが旨い
役員に推されて野次れなくされた
腰回り計る色気のあるメジャー
甲斐性はないが一人前は食う
屈従はしないカウンターにひとり

鳥取市 福 島 庸 二

激励にほろりさせられ力湧く
争いは些細なことの積み重ね
親しいが聞いてはダメな事も知る
年の瀬はカレンダーにも追われる日
信頼がことば一つで軋み出す

鳥取市 倉 益 一 瑤

前頭部にわたしの海を持つている
スキップでポストに種を蒔きにゆく
白鷺にヤキモチ焼いているカラス
ダイエット食べる欲望には負ける
諸行無常母さんつれてゆかないで

鳥取市 徳 田 ひろこ

I Tの駅にボツンと佇つひとり
神棚をストンと落ちた欲ふたつ
寒月も雲をしとねに眠りたい
木枯しに負けてはいないあばら骨
ケータイの根っこが伸びた請求書

鳥取市 杉 本 孝 男

虫けらにも天下とりたい意地がある
答弁も玉虫色の先送り
好き合うて仲人要らぬ美男美女
シーズンもお構いなしの蟹送れ
この次はこんな嘘にはだまされぬ

鳥取県 土 橋 睦 子

歳月が私を許す田の叫び
恰好よく田舎を出たがフリーター
雑草の中で育てた子も五十
窓際の座り心地を知っている
自然薯のねばりに肌も艶を増す

鳥取県 村 上 信 子

わらべ唄ときどき唄って若返る
弱虫な犬で小屋から出たがらぬ
高速道路できて寝不足続いている
スランプの間ひたすら寝るとする
遺産放棄ころのんびり湯にひたる

鳥取県 垆 寛子

征つて来ます母を説得出来ぬまま

テロ次は東京という どうします

散る命憎く悲しい自爆テロ

丸い地球戦争好きが凸凹に

ゴール近く新車月賦で買いました

鳥取県 乾 喜与志

卒寿坂やっぱり骨が細くなり

空っぱの頭を花の季が揺らし

根の深いほどたのもししい芋の性

ガラス戸の向こうが白い雲になる

曾孫と手つないで散歩にも出てる

鳥取県 奥谷 彩子

冬帽子温い情けが欲しくなる

妻がいて子もいて晩酌がうまい

先に行く影も時どき自己主張

風向きにあわせた仮面あつらえる

旅先に葉袋がお伴する

鳥取県 原 みさを

世に媚びてむずかゆくなる尾軀骨

銃後の民そんな言葉が生きかえる

どこを掘っても父の根っこにつきあたる

幸せに馴れて根腐れしてしまふ

幸せも不幸も駄を降りてきた

鳥取県 西原 艶子

てのひらを返してひとり出て行つた

姑といつて骨にこたえた日も流れ

子の夢に骨身惜しまぬ母の椅子

骨になるまで手の焼ける夫だった

あと少しこの世で骨を折ってみる

鳥取県 田村 きみ子

落ちそうな椿とつても可哀そう

振り子時計動き安心してしまふ

自我はまだ捨てぬ咲きたい恋したい

雪抱いた椿燃えてる火を抱いて

行く先を言わずに出たい時もある

鳥取県 山本 正光

明日逢う君への笑みをためて寝る

消すだけになって淋しい住所録

雑巾の乾きが亡妻を恋しがる

野良猫よ花壇に肥料ありがとう

知られたら困るお金を持っている

鳥取県 澤 裕子

雑魚なりに煌めく夢を抱いている

ライバルに偶然触れた手が温い

言いすぎて胃がきりきりと疼きたす

先細りしてます僕も通帳も

跳ぶ前に着地の位置を確かめる

鳥取県 鳥羽直市

立ち話ポストがみんな聞いている
お湯の宿下駄で散歩がしたくなる
お祭りが終って闇とごみ残る
記念日は浮世離れてごろ寝する
近すぎて妻への感謝忘れてる

鳥取県 鳥羽玲子

語尾あがり訛ぬけないまま老いる
眠ってる夫の健康音を聞く
老いてゆく速度のこわさ感じ出す
家並みの懐かしさから動けない
指の魔女ピアノの鍵の上に舞う

鳥取県 林露杖

米寿春免許更新深呼吸
この道に遠き思い出枇杷の花
冬の街見たくてバスの前座席
ラーメンの屋台の湯気に誘われ
扇風機化けてストروب首を振る

倉吉市 淡路ゆり子

煩惱の袋の口が締らない
時々夫にも杭を打っている
百年の梅干保つ陰の技
雨模様下山の勇氣子に貰う
テロリスト神の死角で血の海に

倉吉市 牧野芳光

寒の水いよいよまくなつていく
うす墨の桜の色が丁度よい
何匹も鬼を殺した酒を飲む
目と耳を洗って鳥の声を聞く
梅の香を運ぶ八十円切手

倉吉市 山中康子

イルミネーション月もしんみり仲間入り
根が枯れぬ内にカンフル頼みます
全没の作り笑いとげがある
おふくろの弱みを悟り足になる
他人の気にさわる小言は通せんぼ

倉吉市 山本玲子

お互いがおだて上手に乗り上手
真実は黙っていても認められ
平凡でいられる幸をかみしめる
団子鼻ご先祖さまの譲り物
古伊万里の皿でふく刺し菊の花

倉吉市 松本よしえ

山を出た赤いリングがよく歌う
いい天気筵の小豆叩かれる
図書館でまんがの源氏物語
月しんしん淋しがり屋のミルクティー
ぎっしりと書き込み暮れのカレンダー

倉吉市 米田幸子

空っぱの壺を毎日拝んどる
前後左右どっち向いても敵あまた
骨埋める場所は故郷の森と決め
かさかさと落葉ささやく音がする
痛む膝なだめすかしてこき使う

倉吉市 野口節子

輝きたいと頑張っている黒子
謎めいた話になると耳が立つ
方向転換楽々出来るフリーター
百も承知の嘘に合鍵打っている
よろめいて見ようか風は今ピンク

米子市 政岡日枝子

月煌煌急に電話魔に化ける
空になる手前の音に意味がある
空っぱの頭叩いて確かめる
終着駅大人同士の恋だった
愛という根がある家で崩れない

米子市 野坂なみ

明けまして今木版に猿を彫る
鯛の粗味とその煮こごりのなつかしさ
三日月よわたしも歳をとりました
悔しさの数だけ根性つけてくる
空っぱの頭に欲が住みついた

米子市 木村春枝

噂千里思わぬ友の見舞来る
賽ころの裏と表にある定め
携帯が行く先さきを追って来る
好奇心焼けほつくいが燃え始め
傷心を癒してくれる月明かり

米子市 木村富美子

根回しを三年前にして置いた
草の根を分け逢わせたや拉致家族
農民を一途に生きた父の墓
三国志まさか漫画で読もうとは
此の家をまさかの時は売りなさい

米子市 林瑞枝

お世辞にもほろ酔う私ナルシスト
輪郭の不思議な星がははに似る
成る程と仰ぐ神話の大鳥居
駈け登る若さを験す登山道
雪の日も介護のつづく傘を干す

米子市 青戸田鶴

冬の日の点描大山かくれんば
今日もリュック背負ってなんとなく歩く
気分転換いらぬものも買ってくる
大根をここと寒いひと日なり
下町に根をはったまま生きている

米子市 永井三津子

メールする百歳だとは知らないで
一匹の蚊が友になる淋しい夜
なんでもかな青い鳥また逃げちゃった
迂回など知らずに走る反抗期
いつの世も政治家さんは金持ちだ

米子市 澤田千春

忘れてはならぬ根の恩根の情け
民芸の藍染使うほどに味
根っこから命生れる音がする
空っぽの広口びんにほっとする
ときめいた駅も今では他人めく

松江市 銭山昌枝

濡れ落葉でも構わない居て欲しい
生活のリズムに溶けた癖と住む
飽くまでもマイペースです頑固です
逃げているつもりは無いが速回り
信長も家康も居る孫五人

松江市 佐野木みえ

日が暮れて試行錯誤を繰り返す
絵に画いた蟹を眺めてビール飲む
鏡掛け母の袖が蘇る
蘭の花今の私に御褒美を
友の噂伝え聞く夜の初あられ

松江市 松本知恵子

ライブルが教えてくれた僕の癖
派手なシャツ選んで軽い旅に出る
お隣のやんぴいの癖知っている
鎧着るように時には化粧する
マスクして少し世間と遠くなり

松江市 津川紫晃

浮き雲の地図に故郷の駅がある
海も冬なんの色気もなく騒ぐ
友達になろうなろうと来る雀
足音がだんだん小さくなって冬
たくましさ秘めて冬木立は無言

松江市 川本畔

笹舟に危うさなるか人の駅
多数決呑めば斑に骨がある
空きかんを蹴って私はがらんどろ
夕暮の月 神様に近くなる
爺さまの民話にゆるむ膝がしら

出雲市 園山多賀子

忘れ癖もう責められぬ花茗荷
癖字まで似てくる仲のいい夫婦
笑い癖皺を刻んで生き延びる
臍の緒につながる七癖持っている
自分史に衣着せたがる不遜癖

出雲市 佐藤 治代

お陽さんがのぞいてくれる窓を拭く

川柳はへんな生き物おもしろい

侘び寂びの壺を探しに右ひだり

恰好いい松茸女の目でえらぶ

何となく寄りたくなった母の駅

出雲市 小玉 満江

紅ひいて可愛げのないおばあちゃん

何もする事のない日は寝るタヌキ

合併の名で主導権あらそわれ

早足で帰ろう皆に良い知らせ

財布とは別のお金が見当らぬ

出雲市 岸 桂子

のほほんと貧しいなりに今日終る

意地を張り余分なものをまた背負う

俄雨花の色香を盗りに来る

鈍行に乗って記憶が甦る

道草の背に付いて来る陽の匂い

出雲市 小白金 房子

牛飼って戻る畜舎へ星が降る

搾乳へ励む師走の夫婦独楽

市出しの子牛別れの背が淋し

北風へ切干し晒す老母の味

大根の乾き漬けこむ田舎味(三〇キロ二種)

出雲市 多久和 敬子

妥協してゆつくり回す夫婦独楽

おしゃべりが好きでマスクが邪魔になる

六十路坂どこでもいつでもどっこいしょ

幾つかのハードル越えて今日の幸

二人居てちらちらボケが仲間入り

出雲市 城 多喜

冬の海ざわざわと喋りすぎ

白雲をごくりと呑んだ青い空

鳩尾にポタリポタリと溜るウツ

掌であぐらをかいている豆腐

陸橋で車の流れ見て飽きず

出雲市 石 倉 芙佐子

港にはしつかり者の妻がいる

凍て付いた港は愛さえも拒む

慟哭の海から還らない二人

椿ひとひら沈んで浮いて冬の海

陸海空 戦火の昔思ひ出す

出雲市 吉 岡 きみえ

トンネルの先が見えないから不安

年金に相談しながら義理を欠く

冬ごもり炬燵と長いおつきあい

分けるものなくてこころを差しあげる

三十歳ひとり遊びはわびしいね

島根県 森 茂美

軒下にこどもが群れる柿すだれ
真つすぐに棚田に冬の来た朝
妻の居ぬ部屋が不気味に広くなる
戦争はしない約束した九条
托鉢の僧遠ざかる古都の暮れ

島根県 伊藤 寿美

雲走るわたし元氣と返事する
ささくれた心を癒す一通話
一人になったとキャッシュカードに言い聞かす
ローンは無いが築百年に金が要り
西雲亡夫の電話鳴っている

島根県 持田 多輝子

お浄土は土産のいらぬ永久の旅
ざわざわとエゴがひしめく暮れの町
見栄張ったばかりに収拾つかぬ破目
花の首折れたら天命だと思ふ
福祉から貰った杖は温かい

岡山市 井上 柳五郎

すぐ米寿頑張らずともマイペース
紅葉をみんなに見せて眠る木々
平凡な暮らしを願う初詣で
老の字が近頃さとくよく映る
人間を怠け者にする文化かな

倉敷市 井上 富子

流し目でノックしてみる彼の胸
へそくりがぐらりと揺れるテレシヨップ
日参をした日もあった丸木橋
上方でごつつう儲けた低い腰
胸の鈿河に不倫の星も二つ三つ

倉敷市 小野 克枝

幸せに苦勞を混ぜた母の皺
核心に触れると風はまわれ右
ふるさとに向けて地下足袋干してある
帰らない客のコップを下げにくる
香り消えました夫婦の散歩道

岡山市 小林 妻子

そうですかやっぱりですか自衛隊
修繕の利かない老いの医者通い
マニフェスト赤絨毯の住み心地
おじいさん独り残して初詣で
暖冬異変スパイクタイヤあくびする

岡山市 大石 あすなろ

老いふたり気ままな刻が回り出す
素通りへ赤提灯が呼んでいる
煮びたしにわたしの愛を含ませる
弁当の蓋に浮かんだ妻の顔
言い訳を探す男の黙秘権

岡山県 山本玉恵

結び目が解けたら逢いに行くつもり
振り捨てた想いが風に舞い戻る
選りすぐった道で転がってばかりとは
建前も本音も脱いで仕舞風呂
涙腺のゆるみはげしき老いし今

広島市 森田文

幾許のいのちと思う日の日記
あご髭も眉毛も同じ地べた族
向き合えば写楽も笑うかも知れぬ
牛一頭の値がつく鯉のはやり病
一本の線に覚悟がいます

竹原市 石原淑子

赤トンボ静かに還る霜の朝
日本語の綺麗な暮らし小津シネマ
藁ほうし夢ふつふつと寒牡丹
ポックリと落ちる椿に深なさけ
猿も人も同じ今を生きている

竹原市 正畑半覚

日本の特等席の永田町
国民の汗と涙の永田町
国民の手取り減らして永田町
一票を忘れず仕事しているか
金バッジつけて昼寝もいいもんだ

竹原市 森井菁居

失点を励みに変えている若さ
歳末へ貧者の一灯僕なりに
京着物伝承という美しさ
集中心力どんと高めて今日を生き
優勢は今日まで明日は闇の中

竹原市 古谷節夫

定型の五七五にしがみつく
貧政をコメも野菜も訴える
自分史に段差と亀裂まだ残り
派手を選ぶ妻よ今宵は美人だね
散り際をご教授します寒椿

竹原市 岩本笑子

ステンコロリ若くはないと思ひ知る(右手首骨折)
左手が笑う鉛筆コロリコロリ
お願いをしていっしょに夫と風呂に入り
ケセラセラ厄は私が引き受けた
正月が来るね何にもできません

竹原市 時広一路

雨の日も傘があるぞと万歩計
噴水の下で緋鯉のラブソング
不器用な生き方もよし汗光る
白い画布どんな花でも咲かせます
マイペース緩と急とを使い分け

広島県 福島 万年

弱虫と言われたくない兵士達
師に続く我にも続く弟子一人
負けるとも知らずに乗った輸送船
父の歳超えて悟った父の罪
よく見ればジャガイモどれも美男美女

唐津市 山口 高明

荷担して戦争反対なさる国
髭面を競う世界の奇人たち
色気より食い気と燥ぐ旅の宿
お正月なりと金粉入りの酒
大人より性悪残酷無計画

唐津市 久保 正 剣

計画倒産そんな匂いがする保険
自衛隊つのおせ槍出せ目玉出せ
禁酒禁煙主治医無慈悲な断下す
仕事着は禪一本徳儀
錠剤を転がし今日も生きている

唐津市 樋口 輝 夫

振り向いた嫁の言うこと空々し
胃潰瘍あとは頼むぞ岡田君(星野仙二)
朝市で元氣売ってる笑い皺
顔いたばかりに貧乏くじを引き
くじ引きで議長交代村平和

唐津市 井上 勝 視

電波から取り残されて爺静か
変化なく遠吠えしたくなる夜明け
さからわず酔いを牛耳る老婆という
不況ほど強く元氣な老婆である
カネ出して老いは三猿強いられる

唐津市 宗 水 笑

名水は一日かけて汲みに行く
米不作挫けてならぬ藁を焼く
勝ち負けはどうあれプロの眼の光
外面はポーツとしている苦勞人
酒タバコやめた代わりに鬱となり

熊本市 永田 俊 子

頼る人が居ない私の雨宿り
或る時は狂ってみたいヤジロベエ
値札見ないで一度は買ってみたい
母は強しシングルマザーという美名
浅い夢でした私のいろは坂

熊本県 高野 宵 草

ピーナツを剥くとき猿の掌に還る
まだ青い地球に潜む核兵器
万物の命を食べる掌を合わす
賀状書く手から思い出またこぼれ
退院をしてしばらくは仲が良い

熊本県 岩切康子

序でに立寄る先は決つてる
掛軸の読みでヒソヒソ古い仲間
はつきりと断り背なが伸びて来る
石段へ杖の効用身に沁みる
古本で結構楽しむ習い事

東かがわ市 川崎 ひかり

凶器にもなる一本のペンの先
あおる風またも火種が燃えたがる
情け受け情け返して生きている
ひとりよりふたりがいいよあつたかい
ライバルの背中を今日もバネにする

東かがわ市 原 賢

頂上に立つと孤独の風に遭う
握手したその手に軽い嘘がある
慎ましく生きてる老夫婦に敵もなし
イヤリングつけて女房が弾んでる
見栄がある限り引き際狂わせる

東かがわ市 池内 かおり

落ちぶれた家にはカラスさえ来ない
豚汁の匂いに起きてくる気配
美しい話だ耳を傾ける
ヘリコプター私の上へ墜ちぬよう
解凍が過ぎて刺身が泣いている

東かがわ市 清川 玲子

七癖も夢も消さずに閉じる年
悔い一つ胸に畳んで年を越す
名画見た余韻と帰る星あかり
カレンダ―の美人尻目に厚く塗る
駅弁も一役かって町おこし

東かがわ市 神保 坊太郎

妥協してつじつま合わす自己嫌悪
こぼれ種そこで始まる物語
仲裁の神が茶を出す酒を出す
私が消えるをつじつま合っている
どこか嘘かくしていそう赤いバラ

松山市 古手川 光

街路樹がいやと言うほど切り込まれ
すぐに首突つ込んでくる話食い
どん底を知っているから出ない愚痴
異常なし言われ不安になりました
拉致家族おいて助けに行くイラク

松山市 高橋 宏臣

本音かも知れぬ冗句で胡魔化され
隙見せぬ影武者やがて疲れだし
乗せられてしゃべった余分侮られ
見てみない振りが握っている急所
せめてもの抵抗黙ることとする

松山市 丹下 美津子

勝ち負けのない敬老の珍プレー
カラスにすかれ富有柿の深い傷
森の怖さ十七歳はまだ知らぬ
幼な子の受難の年と思う記事
優勝で座布団が舞う栃東

愛媛県 中居 善信

お正月鎮守で御神酒頂いた
今日の無駄明日の力になっている
どずいたる気迫だんだん瘦せてきた
男気を出して墓穴を掘っちゃった
不意に来る死への恐怖を夜の静寂

高知市 北川 竹萌

天地は変わらず世紀移りゆく
新世紀平和保つや地球人
人殺す用具極めて何となる
師走くるざわつく中で賀状書く
年賀状九十三歳二百枚

高知市 小川 てるみ

ひたすらに春を待つてる冬木立
ハート・トウ・ハート言葉などいらぬ
価値観の相違いち日貝になる
温もりが欲しくて情が深くなる
他人には楽しかったとフルムーン

砂川市 大橋 政良

尻尾振るぐらゐに鉛玉はやれぬ
咲かせたい咲きたいちよつとしたあせり
燃えるもの燃やしきれない胸の奥
胸襟をひらき残り火風を入れ
還暦はゼロ歳哺乳瓶を買う

弘前市 相馬 銀波

人の掌の温さに似てる隠し味
身を隠す仮面に強い隙間風
オカリナで春の息吹きを待つ津軽
原点の重さ各論から探す
真冬日の空から拾う流れ星

弘前市 今 愁女

ミステーク子らを危めた星条旗
三猿でいられぬ地球焦げている
必死で羊数える夜の虎落笛
踏み破る音を楽しむ霜柱
白い息吐きランドセル駈ける朝

黒石市 相馬 一花

面白い話の裏にあるエレジー
折角のチャンスを逃がす糞真面目
本人が言うからきつと嘘でしょう
大切な写真をしまう場所がない
人間の特権ですな笑い皺

八王子市 播本充子

もう二月出来ることから一つずつ
目が合えば笑ってしまふ惚れている
パニツクの真ん中にいるへらず口
太りたいなんて言ったら殺される
ジャンケンに弱い男の空財布

東京都 岸野あやめ

三猿は明治生まれの母のこと
誠実な男だトップセールスだ
自然治癒したので残る傷の跡
初釜へずらりレディーの揃い踏み
軽い気で口出ししてはいけません

東京都 清原悦子

相談のつもりでついだ酒なのに
左手も添えた握手が温かい
介護する部屋に緑の風を入れ
成せば成るそんな言葉を信じてる
本当は心に秘めた愚痴もある

横浜市 菊地政勝

おれおれに備え補聴器買替える
親米にされて命が軽くなる
歯に衣を着せたまんまで歳をとり
取っときの酒を封切るめでたい日
母だけが父の音痴に拍手する

横浜市 小野句多留

アバウトにすごし万事が楽になる
一晚を寝ても醒めない酒の罪
残尿感参加戸惑うバスツアー
眠ったら取り残される電子機器
紅白に今年も知らぬ顔が増え

富山市 島ひかる

先ず五年 生きる健康考える
写メールを山の上からまた送る
渡り鳥休み場にする庭の木々
風向きが変って雪の香りよむ
けもの道雪の白さに迷い込む

富山市 舟渡杏花

毒消し売りのくれたヒントで生き延びる
破れ太鼓叩き続けた肩のパネ
人を恋う屋台の隅の忘れ傘
帝王学のあい間あい間に読むマンガ
晩成に沙汰なくどっと出る疲れ

静岡市 安本晃授

一匹の犬にもあった妥協心
不意打ちの耳をつんざく計の知らせ
生活の裏のメニユーが温かい
善悪は問わず微笑む母の顔
春うらら余韻が残る花言葉

静岡県 菌 田 猷 杏

爺ちゃんが目を輝かす穂の重み
手を繋ぐ影もあまえている月夜
徳俵運がこつちに向いてきた
笑われて失敗もして人気者
陽が沈む無限の愛を振りまいて

京都市 都 倉 求 芽

謎解きは全部他人に頼つてる
足して2で割る永年の惰性
統計に入っていないわが暮らし
背の丸さ映さぬようにする鏡
南天の好きな日当り白障子

京都市 高 島 啓 子

お札出す時は表を向けておく
転んだらすぐ引きこもる子供たち
七人のまん中辺で無視される
意のままに動かせないよ足の指
あみだ籤のように兵士テロに遭う

大阪市 杉 澤 汀

バット一本国の友好盛り上げる
大寒の夜は静かに凍る音
牛乳と朝刊の音なお寒い
ライバルを亡くし静かに惚けていく
こみ入った話になると里なまり

大阪市 西 川 更 紗

薬害を気にしながらも飲むくすり
何処からか貧乏神が忍びよる
家中で夫の免許さがし出す
何着ても着映えのしない人という
湯けむりにお国訛がとび交つて

大阪市 古 今 堂 蕉 子

九十の母に温みをもたらつてる
記憶する機能つぶれたケセラセラ
チャブ台もTVも囲まなくなつた
安楽に暮せぬ国の多いこと
楽勝と思つた時が魔さす時

大阪市 鶴 田 遠 野

空財布膨らませてるカード達
突風に模様眺める風見鶏
ひと言の好きに熱い血甦る
パール婚揺さぶつてくる妻の所作
軸足は家庭に移す左遷先

大阪市 川 端 一 步

万物をしっかり抱いて冬の山
夕暮れの陽を前にして身を払う
書き過ぎも言いすぎもあり歳の暮れ
辛口のペンも酔つてるお正月
老いという字を捨てました春だもの

大阪市 本間 満津子

まあこんなもんやと甘えとく米寿
玄関に優しいピンクシクラメン
白味噌のお雑煮これが大阪や
喧嘩ごま羽子突く子供どこ行つた
いい声でひとり百人一首詠む

大阪市 渡部 さと美

生き抜くにさるより下手な芸をして
漢字虎気炎は来期までつづく
山茶花が散つてきれいに恋おわる
武富士の社長身ぐるみ剥がされる
技の冴えドイツで人気日本車

大阪市 伊藤 博仁

品書きのボケないそばを二杯食う
十円が下見て歩く癖をつけ
選り抜いた娘に笹売らすえべっさん
新築の床に遺影と特選酒
裏道の廃車にふとんが干してある

大阪市 板東 倫子

年の瀬やあちこち軋む屋台骨
逆効果と知つて中止のダイエツト
おばあちゃんオレだオレだと悪の声
お目出とう特に目出たくないけれど
苦楽半々人生貸借対照表

大阪市 津村 志華子

幸せは来るものでなし掴むもの
ひとり鍋ボン酢ツンツン香りたつ
遠い日の交換日誌ウフフフフ
老いらくの恋の話はこそばゆい
申年の記念切手も縁起もの

大阪市 奥村 五月

惚れている酒が命を取りにくる
逢うて泣き逢えぬと泣いたその昔
酒好きな医者を探して診てもらう
泥除けに立派な秘書を育てあげ
子を産んで弱い女も強くなり

大阪市 大塚 節子

隅々に心くばりのあるお庭
訳ありか隅にひっそり通夜の席
コンビには口きかないで用がすみ
逆算で遅刻はしないはずやった
一人住み世間を狭く生きている

大阪市 中澤 伽羅

消したいがズームアップで来る記憶
土砂降りも病院予約とつてある
しんみりとしては出来ぬ老介護
しんみりが似合わぬ顔で三枚目
そのままを見せて成り立つ町おこし

大阪市 大川 桃花

産む時は考えなかつた器量など
板さんに根回しの酒つぐ幹事
葬儀屋のチラシ保存の付箋つけ
レジャーシート敷くと行き交うお惣菜
しめ縄の文化薄れて行く団地

大阪市 前 たもつ

大阪城の銀杏を踏んで朝の贅
デジタルテレビ置いてきほりにされそうだ
僕に似た彼を娘が連れてくる
不器用で楽な生き方選ばれず
捻子まいてお呼び待ってる古時計

大阪市 熊代 菜月

こだわりを少し溶かしたぼたん雪
また一人喪中ハガキでやって来る
来年の予定書き入れ年の暮れ
飾らない言葉あなたを輝かす
体力を過信しすぎた水たまり

大阪市 川原 章久

この不況肩身の狭い酒煙草
石橋を叩きすぎたら社が壊れ
帰り道足を引張るワルが居る
まだ懲りず麻雀パチンコ縄のれん
不倫とまでゆかぬ程度のお付合い

大阪市 小泉 ひさ乃

三猿になる私にはとても無理
ユーモアが足りない老父の古時計
土砂降りが一泊させる回覧板
いつまでも旧姓で来る案内状
第六感冴えてしばらく鬱になる

大阪市 小糸 昭子

一步から始まりました遍路旅
大阪はええなおばちゃん元気だな
お伽話今の子供は信じない
飲ん兵衛で仕様がなが惚れてます
一杯のビールで口が軽くなる

大阪市 星野 きらり

ウォーキングいつもの場所で影拗ねる
コスモスを見習う笑みを隔てなく
水琴窟太古の声に耳澄ます
姿見に後ろ気にする帯の位置
回覧板他人ごとならず喪の知らせ

大阪市 岩崎 公誠

断ち切れぬ過去の重荷を提げ歩く
軸ぶれた玉虫色の返事来る
カラフルな恋の配線過熱気味
黒枠に友の名がある雪の朝
ポケットに妥協と嘘を詰めておく

大阪市 玉置英子

蜜柑五ヶ二人で食べて皮は風呂
頑張らず怠けず明日たのしみに
長く生きお金拾ったことがない
自爆する命 延命術いのち
にこやかに渡してくれた請求書

大阪市 津守柳伸

習うより馴れる料理のサシスセン
蛇口から溢れる水も愛だろ
女湯でやたら隠すと嫌われる
ない袖も振って見せます十二月
メードインチャイナどっさりある筆筒

大阪市 津守なぎさ

ヤンママのチャリンコ荷台子が二人
初笑い双子パンダの身の動き
食べ残す料理へ高い宿泊料
九条の楯へ世界の目が光る
湯気と汗裸まつりの最高潮

大阪市 神夏磯典子

老いた木をゆさぶって目を覚まさせる
淡々と日が落ちてゆくそれも良し
明日のこと言うたら怒る楽天家
淡墨で描けばやさしい猿になる
隠れ上手もぐら叩きに似てるテロ

泉佐野市 山本蛙城

MRI検査機の中に似て
平凡が至福でつせとふれ回る
南海地震近いと軽く言われるが
電飾の師走イラクを忘れつつ
逆らわずまとわりつかず友数多

和泉市 中川楓

殊更の客なき暮し冬座敷
熱爛にしばし忘れていたい事
かたくなに自然が好きで無農薬
日記書き心の解毒剤にする
内緒話に閉め直して障子

茨木市 藤井正雄

僕だけに土産をくれる低い声
酒にして不利な話を煙に巻く
おふくろの直伝妻のませ御飯
母の留守父は愉快に昼の酒
地下売り場春の掛け声京野菜

大阪狭山市 矢野梓

母がいるただそれだけで温かった
南座へ行く暇はある十二月
よろこびは伏せても隠し通せない
里帰り元気なわたし見て貰い
自分流押し付けているプレゼント

大阪府 米澤 倭子

時は魔術師悲しみゆるり消してくれ

姿からは想像出来ぬ声のはり

こちら出来ればあちらお留守になる老化

今の子に欲しい星野のような父

注連縄を渡せば滝も神になり

大阪府 村山 隆盛

燃える彩あつめて冬にスタンバイ

チヨコレート夢に二月の不眠症

不況風二八だけで止めてくれ

泥んこであそぶ風の子消えたまま

独裁者影一つなきその末路

河内長野市 村上 直樹

百年に一度のボジョレ飲む至福

節酒する決意賀状のマニフェスト

かつぽれで老いも病も追っ払う

あこがれは喜寿白髪で舞うワルツ

梅日和 初音が誘う一万歩

河内長野市 山岡 富美子

古時計律儀に老いを刻んでる

ホカロンを買ってどっぷり老いの中

生ゴミが少なくなつて老い進む

老老の介護が重い長寿国

ラブソング唄つて老いをジャンプする

大仏が魂抜かれ大掃除

陰口で毒を盛り合う立ち話

大物は大胆不敵な面がまえ

あの時のとまどい今は嘘みたい

鈍行で走り続ける夫婦坂

河内長野市 井上 喜醉

柏原市 永浜 加津子

戦争への道甦り恐くなる

自信喪失紅がだんだん薄くなり

年金を新札にして年の暮れ

北風に耐える山茶花紅冴える

おいしさを共に喜ぶ幸せも

交野市 山川 日出子

南極の皆既日蝕世界初

優勝が夢のようだ栃東

山の柿鎌で皮むくお百姓

芋畑烏よけにとバイキンマン

中国の十二楽坊紅白に

岸和田市 岩佐 ダン吉

真つ直ぐな背スタイルは崩すまい

心飾る夢大切にしたい

イラクには九条の旗立てなさい

自死三万列島累々青テント

手が荒れる母さんに冬きたらしい

岸和田市 原 さよ子

幸せな叙勲たたえて湧く拍手
抜打ちにとっさに出ない声と知恵
三億を狙って夢を買いつつげ
折角の軽いふとんに落ちつかず
肌ざわり言つて木綿を恋う老夫

岸和田市 井伊東 吉

デジタルの利便ばかりを囁したて
年金の記事は逃さず読んでいる
リニアカーそんなに急ぎ何処へ行く
脳指令無しに歩ける慣れた道
行く人と帰る人ある大リーグ

堺市 源 田 八千代

見て聞いて口まで出して強く生き
アメリカへ目配り気配り怠らず
小泉流イラク派遣のタイミング
店開きさくらになってモーニング
なんでやるシャッターチャンス目をつぶる

堺市 矢 倉 五月

心配を掛けぬ子うっかり忘れそう
敏の数競い合うてる同窓会
調子はずれのよさこい出たら上機嫌
言い訳は胸に畳んで頭下げ
基礎知識も一度咀嚼してみよう

堺市 志 田 千代

積もりそう丸大根を炊きましよう
素で逢えるガラスの玉のネットワーク
メガネとると目玉小さいお人好し
楽しくてやがてむなしい噂話
その時のために歯型はとつてある

堺市 神 原 文

コーヒーを零した人を好きになり
嫌なことすべて流して白を着る
冬時雨セーター赤にして逢いに
目標はどんどん逃げて八十路くる
無駄話するうち湧いてくるやる気

堺市 村 上 玄 也

二階級特進哀し死の帰国
七転び八起き目のないこの不況
苦労話しだすと父は酔っている
体罰と躰の区別つかぬ親
吐く息で寒さ伝わるテレビルポ

堺市 和 田 つづや

蝸牛いちどあなたと旅したい
助演賞折紙つきのかすみ草
十字架の御旗持たないクリスマス
四半世紀老けぬ面影抱いたまま
善人が今絶滅の危機にある

堺市 山本 半銭

吹田市 太田 昭

いいないいな雲は気儘に流れてる
働哭のイラク報じた後のお笑い
お寺さんの新年会で華やぎぬ
雲と話し雲の好きな子予報士に
気配りの人は表に出たがらず

堺市 宮本 かりん

頬杖の思索している顔でなし
あの方の余韻か空気あったかい
引っこみがつかなくなつて怒鳴り出し
正直な子の口ふさぐあわてよう
心うきうきつい口先が軽くなり

四條畷市 吉岡 修

デュエットの昂が僕の応援歌
本物の失恋なんと味なもの
アリバイが思いつかずにうろたえる
次までをもう心配な振り込み日
あやふやな椅子だうかつに休めない

吹田市 山本 希久子

積年の悔いと長い長い橋渡る
右脳左脳干からびて介護疲れ
高齢の母の心の奥の奥
留守宅の梅ほころびぬ我が生家
梅の花六十路の旅もあと少し

楽しさをいっぱい詰めて空財布
小言聞く耳ぶら下げて墓参り
歯痒さがだんだん冷めて褪せてゆく
押し売りの受話器に向かい啖呵きる
乾杯に寝ていた虫を起こされる

吹田市 穴吹 尚士

亡き父の指紋が残る広辞苑
ブランドのネクタイに早や酒の染み
俺が掛け妻が受け取る保険金
札束で傷口を巻く医療事故
この国の政治を叱る人がない

大東市 児玉 蛙

家族散りいつの間になら老い二人
修羅越えて女は強く生きのびる
火の車二人で押せば越えられる
さり気ないやさしさが好き背が温い
秘密だと皆に耳うちしてまわり

高槻市 乙倉 武史

未成年の一字で締め括る
巻き戻し出来ぬ人生慎重に
味のある言葉に凡夫動かされ
歳月が流してくれたわだかまり
復興とテロの狭間の弥次郎兵衛

高槻市 西谷 治三郎

息つめて計るウエスト試着室

国支え老いては粗大ゴミとなる

定年後宮づかえより気を遣う

充電もせずに傘寿の坂上がる

朝昼晩テレビはいつも食べている

高槻市 井上 照子

悪夢から覚めたかシャワー浴びている

日暮れには母かも知れぬ子守り唄

国益を若き命と替えるのか

貴女には似合うと言われ買わされる

仲間だと信じて卵あたたためる

富田林市 片岡 智恵子

デパートの雰囲気を買う小半日

職安で昔話は疎まれる

まだ元気かと介護保険の証書くる

マネーゲームが頭もたげる低金利

母を恋う歌口ずさむ雨の午後

富田林市 中井 アキ

嫁の掌に任せて畳む蛇の目傘

別居した妻が綺麗になってゆく

マイク持つ指から零する昭和

頂上を狙う蟻んこの歯ざしり

サヨナラの頁に残る蒼い影

富田林市 大橋 鐘造

逆風へ熱い男の血が騒ぐ

不景気で賽銭箱が欠伸する

人間の方が上手な猿芝居

淋しさに何時か覚えた独り酒

親切を絵に描くようなお節介

富田林市 中崎 深雪

もう一度戦する国作るのか

次世代に平和憲法渡したい

情熱が豹変あすが恐くなる

やや日脚伸びるも嬉し冬の底

たまつてる胸のほこりも鬼は外

富田林市 藤田 泰子

発つ鳥は勝った負けたと騒がない

刻々と迫る私のXデイ

娘の家に座り心地の悪い椅子

労わられすぎて淋しくなっている

孫五人サンタクローズにされている

豊中市 水野 黒兔

唐辛子あくまで変えぬ自己主張

還暦を越えて仮面を取り替える

コンニャクが好きでくねくね生き延びる

君知るや心の形愛の色

踏切を追われるように渡り切る

豊中市 吉田 あずき

皆既食修羅の地球へ華麗なり
除夜の鐘わが煩惱は暮れ残る
足不意に拘われそうな不信心
ところととしてると落ちてゆく鮮度
なだめられ騙され洪の抜けた柿

豊中市 安藤 寿美子

東山お寺も墓も上り坂
墓まいり足がこんなに弱いとは
あと何度顔見世見られる事だやら
幕上がるもうしんどの忘れてる
隠すからバレるのを気にせんならん

豊中市 江見 見清

この頃ははつと気付くのが遅い
年寄のハートくすぐる介護品
どなたでも楽にできると入門書
胃袋は喜怒哀楽を知っている
頼られてちよつと勇気を出してみる

寝屋川市 籠島 恵子

試されているのか時雨ふりつづく
紅白で飾る荷物とすれちがう
イタリアンの店になってた喫茶店
大袈裟に旨いは不味いかもしれぬ
一本の電話わたしに降るしぐれ

寝屋川市 富山 ルイ子

挨拶をせぬ子の親を知っている
傷持って優しい人になりました
孫作る料理家族で褒めちぎる
修復が出来ぬ大きな疵になる
悪態の挑戦状は破り捨て

寝屋川市 太田 とし子

羊から猿に変わっていた目覚め
新年会済めば二月という寒さ
懐が寒いとコートの襟が立ち
アデランス皺が目立ってつけられず
見て聞いて笑って騒ぐ猿が好き

寝屋川市 森 茜

金太郎飴みたいで信用されている
深々と一礼謝罪パフォーマンス
気まぐれな男が譲らない美学
パバの鞆ドリンク剤が転げでる
歓声が人気力士を盛りたてる

寝屋川市 高田 博泉

自衛隊派遣で首相ねむれない
家計簿をにらみ年賀を買い求め
デジタルはようわからんがさわい
餅値上げプラスチックで飾ろうか
足もとを見つめ直せばごみばかり

寝屋川市 江口 度

欲なこと言うなと冬の田は眠る
まだあった善意よ忘れ物かえる
冬そこに痛み分けあい枯葉散る
言いわけの語尾にずるさが見えかくれ
車椅子見ると駅員飛んでくる

寝屋川市 平松 かすみ

夫婦相和し同じお菓飲んでいる
白寿まで元気であれとサブプリメント
自然食元気で育つプリンター
好物はいつの間にか胃に落ちる
お賽銭だけはけちらぬお母さん

寝屋川市 坂上 高栄

豊かさに進む少子化策がない
人当りよいのでうっかり腹話
アメリカの大きな誤算テロつづく
詰め込めばまだ入ります前頭葉
尾を振った犬にしたたか手を咬まれ

羽曳野市 三好 専平

イラクまで戦車行くのと九条問い
散骨をしたら綺麗な虹になり
自衛隊テロの餌食になりにゆく
拉致問題争点にして票かせぎ
学力とゆとりのはざままで生徒グレ

羽曳野市 安芸田 泰子

とり立ててすることも無く年の暮れ
雑踏の一員となり暮れの街
豊漁のサンマに漁夫の愚痴がある
三億円当たれば身内もめるだろ
テレビのない独り暮らしは出来んだろ

羽曳野市 吉川 寿美

賀状厚巻これはわたしの宝物
背伸びとは気づいていない足の裏
時代屋で時間とり戻せるならば
かけ違うたボタン元へは戻れぬか
十指みなそれぞれ約束ごとを持つ

羽曳野市 徳山 みつこ

限界を知った息子に飯をつく
老いるなど割りあてられた母の役
皿も若返るから揚げスパゲッティ
ねずみ花火甘えたりふくれたり
その先は喉にとどめておくセリフ

羽曳野市 酒井 一壺

私の翼休める仕舞風呂
気が合ってつい本心を喋り出す
裏の裏知っているのでおとなしい
隠し芸遊んだだけのことはある
回復の兆しか食事待ち遠し

東大阪市 笠井欣子

日記にはいいことばかり書いておく

我が玄関活気があると友が来る

おいしいな息子の焼いた目玉焼

幾重にも折った万札母がくれ

故里を自慢している柿の種

東大阪市 中岡 妙

何処で曲がりそこなったのかと思う

用心をしても怪我する歳となる

いま越えて子供返りの義母見舞う

ブランドのカタカナ文字が身につかず

生きざまがコントになつて流れ出る

東大阪市 安永 春

健脚もやはりお歳に勝てません

チラチラと雪 首だけ出して露天風呂

好きな餅ながめていますダイエット

じつくりと読み癒される古本屋

寒梅が匂う日だまり下駄をはく

東大阪市 谷口 義

六十から七十までのころろろし

七十から元気になったおばあさん

降りかかる火の粉かぶったままで生き

階段を数えて登る癖がある

月下美人汝なかなか芸達者

東大阪市 北村賢子

ゆさゆさと土に感謝の黄金の穂

裸一貫再起を誓うルミナリエ

末っ子はまだサンタさん信じてる

時に自惚れ時に落胆さす鏡

響き合いがみ合いして来たドラマ

枚方市 森本節子

ヘルベスウイルス鯉の世界に黒い影

人気ある負け馬の名はハルウララ

踊り子のようにカクタス花ひらく

回送の電車にひとりとり残され

動物好き繰り返し読むにゃんぴい

枚方市 海老池 洋

冠婚葬祭だけ親戚の顔で出る

ストレスに耐える姿よ鎌の月

わが道にも袋小路と抜小路

生きるをやつくづく思うゴミの高

ラ・フランス小さな革命だと思ふ

藤井寺市 楠 昭子

的をつかれて白状をしてみよう

わたくしを晒すと灰汁が浮いてきた

泣きながらピエロは人を笑わせる

可能性はまだ残ってる荒削り

リストラのお陰田圃を耕せる

藤井寺市 高田 美代子

匿名で予約しておく深夜バス
よく吠える犬を飼つてる路地の奥
人はみなこころに駅を抱いて生き
赦せない人をいつかは血祭りに
病葉よ介護保険は掛け捨てに

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

意気のいい薔薇に恋しいひと取られ
青汁をゆつくり飲んだ事はない
墨を吐く烏賊の抵抗見とどける
信じようお酒も夢も人肌だ
正月はおとこゴルフへ追出しぬ

藤井寺市 太田 扶美代

好運をいつも誰かに盗まれる
満足なお礼も言えぬまま師走
菊日和父の愛した庭にいる
冬嫌いお正月やらクリスマス
用もなく師走の街になだれ込む

松原市 小池 しげお

ど忘れを思い出してるアカサタナ
ハナハトマメ八十歳に手が届く
そのへんで買うて来たのに喜ばれ
節約をしますケチをしません
薬局が愛想よいので治らない

箕面市 岩津 ようじ

朱鷺の如 絶滅近し同窓生
画期的發明使い捨てカイロ
背を伸ばすおなかを前につき出して
褒められて全敗W杯ジャパン(ラッキー)
天高く大根高し葱高し

箕面市 出口 セツ子

アナログの義理人情が欲しい暮れ
春色のときめきルージユ買ってみる
逃げ道を残し七分で生きている
思いきり無駄で心を弾ませる
てんこもりの夢新年へ描いている

八尾市 神原 まさと

キイキイと事故車引かれる寒い音
見つからぬ鯉の病に効く薬
ああ寒い主治医転勤してしまふ
厚着してくしゃみ止まらぬ十二月
はりこんだ二万のおせち子の腹に

八尾市 井尻 民

泣き笑いした一日に掌を合す
匿名を着て大胆を吐く批評
土壇場の受話器から来る母の知恵
初春の誓いこたつて寝てばかり
人生のひだたてよこの泣き笑い

八尾市 高杉 千歩

仏にも鬼にもなれず歳の豆
そんなこんなで福は内鬼は内
痛恨の極みしらじらしく響く
福祉課へ安否確認登録す
空騒ぎひとり芝居の老い寒し

八尾市 吉村 一風

人生の起伏五尺の体耐え
働けるうちが華だと子に教え
子に渡す金の成る木が育たない
祝傘寿 少し淋しき通りすぎ
馬鹿になることも上手に歳をとり

八尾市 宮崎 シマ子

そんな約束したかと夫白々し
木の実減り町へ赴任をするお猿
ほのほのと母と囲炉裏の五平餅
大根を抜かれた穴の物おもい
百均の安さに負ける無駄遣い

八尾市 内海 幸生

負けるなよギククリ腰にと陽が昇る
聖人も君子も霞で生きられぬ
人のやるパソコン出来ないはずがない
決めつけて言う癖前からあると言う
糸電話夢でも温い亡母の声

八尾市 生嶋 ますみ

太陽にうま味をもらう吊し柿
レンタルで成人式のプラン立て
謝っただけではすまぬ手術ミス
銀杏散るはらはら心空っぽに
ベランダに布団が競う冬日和

八尾市 長谷川 春蘭

鳥籠に入り兜虫元気なり
菊切るを風雅な音と客の言う
甚平や手足のしわのあからさま
背を伸ばし休める鍬に赤トンボ
万葉の歌の遣りし野も枯るる

八尾市 宮西 弥生

ひとりより二人ほのほの鍋囲む
伎芸天ほのほのひとを華にする
六法の裏で汚れた世に生きる
整形をしない顔なり神の自負
かくすから覗いてみたい涙壺

八尾市 山本 宏至

もう少し愛が欲しくて甘える子
覚えてもすぐに忘れるカタカナ語
雑念は湧くが発想出てこない
クラス会よくも揃ったビール腹
きつちりとのおんだ葉が余ってる

神戸市 木村 貴代子

エプロンを脱いでキャリアの顔作る

霜やけの足が泣き出す掘りごたつ

声高く冬がおどるか北の海

パソコンでも救い出せないひきこもり

神戸市 山口 美穂

幼馴染みの新郎新婦のいい涙(嫁の結婚)

しあわせな歳月第九に酔っている

お鍋がいいね師走の夜が冷える

長電話肝腎のことはほん一分

神戸市 池田 善守

さる人も来る人もあり年賀状

二人だけの歴史の重みルビー婚

慟哭の対面あわれイラクの地

新年のバラ色の計お湯の中

神戸市 伊勢田 毅

木枯しとともに訃報の葉書くる

無料パスぞろぞろ降りる昼のバス

名刺見て人の値打を計ってる

猿真似を檻の中から笑ってる

相生市 中塚 礎石

謎とけて酒の旨さが身に染みる

欺されぬように疑いかけてみる

六十の手習い筆の先おどる

山の寺花いっぱい咲いて荒れ

芦屋市 黒田 能子

うつつを癒やしてくれるハーブティ

血糖値豊かに食べたパロメーター

火星接近しばらく振りに月も見る

救急車すぐ飛び出して見る近所

尼崎市 山田 耕治

旅日記老いのフライトレコーダー

吐息して心の揺れを教えられ

虫が知らずと特老へとんでゆき

丸文字のノート教授のにがい顔

尼崎市 軸丸 勝巳

松竹梅ひと鉢飾り新春を待つ

両足で歩く幸せ歳の暮れ

イラクの血またかと嘆く丸い月

外交官犠牲の葬に身が締まる

尼崎市 林 昭三

跳べたかな面接試験終えたけど

雪囲い世間知らずの牡丹苗

ハイチーズ皆それなりに写ってる

勉強かゲームか子供眼鏡かけ

西宮市 秋元 てる

放り出してひとり暮らしも悪くない

茜空ロマンチックな大正っ娘

下向きに咲いても香り高い百合

三軒に分けて間引き菜いそいそと

西宮市 牧 潤 富喜子

広辞苑クロスワードが埋まらない
是々非々の派兵へいつも評論家
混んでいる車内でひとり浮いている
不作だと言っても三度食べている

西宮市 井上 松 煙

極楽に苦勞ないなら寂しから
老衰を医者に愚痴って気を晴らす
ごみ袋出して素顔のお付き合
病院へ予約したのに待たされる

西宮市 菊 池 トミエ

霜うけて錦織りなす山もみじ
後戻り出来ぬ旅路はゆつくりと
煩惱を虫干ししたく座禪組む
潮満ちて子亀一斉沖に出る

西宮市 刈 田 泰 司

宇宙から津軽三味線聞ける日も
小宇宙で遊ぶ女の立ち話
宅配に母の優しさもらう柿
松茸を食べて寿命が少し延び

姫路市 古 川 奮 水

紙ティッシュ配る笑顔は業務用
退職後暢気船旅日本海
敬老も参加手間取る運動会
女兒生誕 声弾んでる電話口

兵庫県 大 谷 幸次郎

乾杯のあとはめでたい歌になる
乾杯の音頭にもある自己主張
遣伝子がおふくろの味恋しがる
叱られる種は蒔かないことにする

大和郡山市 坊 農 柳 弘

ときめきの色に山茶花弾けてる
吊し柿遠い記憶の国訛り
懺悔する写経の筆は無口なり
躓いた小石が諭す人間味

和歌山市 榎 原 公 子

落としても割れない皿で育つ愛
さてもさても毒気抜かれてからおひま
前向きで老醜晒すことになる
崖つぶちの答えを探る体当たり

和歌山市 玉 置 当 代

助手席が口で運転して困る
丸い輪を描いていかねばなと思う
鏝に強く守られている絆
挨拶を交わす気持ちのいい朝だ

和歌山市 武 本 碧

ご近所の噂も買える小商い
てるてる坊主へ明日の空が生返事
鬼の留守洗濯もせず日が暮れる
神と手を結んでる間に減る味方

和歌山市 宮 本 三喜夫

デパートも時勢の波に店を閉め
観光地自販機ですがよく稼ぐ
よく辞めたまずは健康よかつたよ
いつまでも生きる積りか欲がある

海南市 谷 口 義 男

身に纏う衣類の総て妻の趣味
妻の小言綴つてゆけば愛の歌
低収入デフレの御蔭住み易い
遠慮せずマイク突き付けインタビュ

鳥取市 前 田 一 枝

隠しても素振りでわかる年になる
何よりもほしいあなたの手ぬくみ
はだしで踏めば砂丘も炎えて来る
プロの夢捨てて過疎地に根を残す

鳥取市 永 原 昌 鼓

矢印の通り歩いて迷い込む
中止にはできぬ人生ひた走る
虫のいい奴ら世の中かき乱す
待つ身にはやたらと遅い救急車

鳥取市 山 本 益 子

若葉マークの追いつく風はひやりする
癩癩の虫一匹に左右され
流行語 毒まんじゅうに嵌ってる
水平線の彼方へちらり亡母の顔

鳥取市 山 宮 愛 恵

出逢いこそ尊い命茶がうまい
おい自分それでいいの胸にきく
限らない道ぎっくり腰が襲う
予行練習できぬ旅路だなど思い

鳥取市 福 田 登 美

除夜の鐘一つに罪を流してる
長い冬病む夫の詩書いておく
もの言えぬ苦痛眉間に訴える
健やかに自由に生きる素晴らしさ

鳥取市 加 藤 茶 人

アルバムに空白がある痴話喧嘩
貧乏が長生きさせた腹八分
健康は妻に任せた塩加減
居る人が居て幸せな台所

鳥取市 宮 脇 道 子

一代記残る枯葉が揺れている
独り居てお好み焼きに泣き笑い
年重ね贅沢に生き見た広野
数々の葉を呑んで何故生きる

鳥取市 富 山 檳 榔 樹

初春は夢を力に余生描く
父習う平方根を子が開く
よく届く声はわたしの好きな人
踏ん切りがついて今日から親離れ

倉吉市 猪川 由美子

余命表引き算すれば背が寒い
よくやるねメダルと恋の両手持ち
神の滋味 干柿舌でころがせる
エビフライよ衣薄けりや素敵だに

倉吉市 森川 あらた

拝まれるほどに長生きしてみよう
よく笑う人は長生きするらしい
この国は見栄を張るのが好きである
人間に蹴られて石は丸くなる

米子市 中井 ゆき

無人駅新そばありの旗がゆれ
ゆつくりと終着駅で逢うことに
塩つぼが空にならないよう生きる
ほめられてまだやる気だす八十歳

米子市 光井 玲子

一介の民草なれど国想う
想い出をいっぱい秘める始発駅
空つぼの頭で右往左往する
昼の月ふらふら雲に誘われる

米子市 門脇 晶子

神無月 神社は空いた部屋ばかり
始発駅今日のドラマの幕が開く
心の奥に終着駅がいつもある
駅までが遠くなったと足の裏

米子市 白根 ふみ

空つぼがころがってゆく吹き溜り
胸貸してまさか負い目になろうとは
名人になるほど手抜き見当らぬ
引きとめるつもりはないよ戦力外

鳥取県 土橋 はるお

生きている間使っている手帖
本当の事を言わないお医者さん
夜用の身体になった風呂あがり
温泉に初めて入って溺れそう

鳥取県 谷口 次男

遊びまで親が教える甘えた世
麦飯が嫌いで父に怒鳴られた
百姓と田んぼが作る米と飯
肝臓がほめる量だけ飲んでマル

鳥取県 奥田 保子

老いたとは見られたくない背を伸ばす
へたくそな字でも手書きと決めている
めがねでは足りず天眼鏡も要り
煙草吸う父は肩身が狭かろう

鳥取県 岩崎 みさ江

小津に夜を取られてこころ癒される
孫颯風来ては孤独を置いて去ぬ
甘えちゃあいけない老いの背を伸ばす
春を待つまるで恋人待つように

鳥取県 国森武子

少しずつ病氣治って少し笑む
死ぬ日までせめて落ちつき暮らしたい
七十代どう乗り切ろう年の暮れ
一日ずつ真面目に生きよ亡父が言う

鳥取県 平井栄翁

東京の雑魚より過疎の鯛で生く
耳遠く笑顔で返すすみません
猫でさえ悪い時には振り返る
霜降りてあかぎれ痛む亡母浮かぶ

鳥取県 下田茂登子

他人様の年金ばかり覗く猫
月と太陽味方につけて過疎に住む
雑草と話の出来る八十路坂
目減りする年金だけど命綱

鳥取県 近藤春恵

さよならは書きたくないと言の愚痴
新型肺炎防ぐマスクを買いに行く
事故防止お守りさんが揺れている
かば焼きはいやだとうなぎすねている

鳥取県 吉田孔美子

お転婆の記憶に残る百日紅
芋洗い入浴猿のバイオニア
猿の腰掛け高価なオーラ出るといふ
病根は申方向にあるらしい

鳥取県 平尾菜美

尻尾巻くうちに糸口見えてくる
少年の殻破り待つVサイン
小石蹴る少年的は広い海
ハードルに向かい気おくれ取り戻す

鳥取県 西川和子

大切な事は忘れる呆け始め
いい話聞いてもすぐに空っぽさ
急行の止まらぬ駅で過疎すすむ
乗る人もなく発車する無人駅

鳥取県 蔵本悦子

ほめられてみんな仏に見えて来る
未年に一べん夫をほめておく
モノリザにウインクすると二度笑う
国民のサイフ悶えて火の車

鳥取県 佐伯やえ

節分の話へ子らの瞳がきれい
小ざるもいつか空翔ぶ夢をふくらます
忘れたふり若者に花もたせとく
イラク派遣 日本中がゆれている

鳥取県 前坂なお美

名刺でにわか信者の顔をする
修行僧礼儀正しくすれ違ふ
旅のそら嫁妻母を脱ぎすてる
吟味して買ったお土産だったのに

鳥取県 太田 幸枝

根っからの悪でないからにくめない
空っぽの財布ポイポイ投げられる
プロポーズまさかの男にささやかれ
乗客のほとんど降りた雪の駅

鳥取県 山下 節子

先の先よりも大事なきよう明日
律儀ですはんちゃん事が許せない
腹の虫宥めて会議まるくする
虫干しの着物に母を重ね見る

鳥取県 上田 俊路

カリスマが落ちてきそうない月夜
いろいろな球根春の夢を秘め
イラク派遣まさかの武器が渡される
北朝鮮 韓国越えてくる黄砂

出雲市 富田 蘭水

確かめてふみしめのほる喜寿の坂
カレンダー書きこむ幸せたしかめる
醍醐味は寺のガイドで拝まれる
大吟醸のむとすべてを丸くする

出雲市 板垣 夢酔

貸す銭は無いが借りずに済む暮らし
ボケだして一人住いはメモ暮らし
にぎやかな男も孤独一人部屋
境界線 子供部屋にもノックいる

出雲市 岡 あきら

同期会いつから評論家になった
忘れごとあいさつ中に思い出す
世話役へ手をあげる人見当らず
やるだけはやったバトンが渡される

出雲市 久谷 まこと

日短かを気にも止めない立ち話
あせつても軌道に乗らぬ縄電車
少子化で子供見かけぬ遊園地
七癖の外に気付かぬくせがあり

松江市 三島 裕丘

揺れ動く心に杭を打って置く
豊かさに馴れた舌先愚痴を言う
霊長という人間の勘違い
四面楚歌癒してくれる妻の声

松江市 小川 注湖

さらけ出すそれでよいかと思うほど
子の未来地球の未来考える
ふる里は遠きにわれもその境地
少子化で神在月も神なやみ

松江市 安食 友子

メールからエロチックまでお越しやす
フラメンコ下肢はちよっぴり男だね
三猿が助けてくれたあるシーン
俺俺の疑似餌に勝って反る鼓膜

島根県 多々納 テル子

転た寝に夫の年輪浮いている
プライドを捨てるとみんな寄つて来る

方言がひと言ほしい現代子
朝冷えに乾布摩擦で目を覚ます

島根県 榑原 秀子

山寺の山の空気へ響く鐘
精進料理予約しておく山の寺

野苺を一つふくんでみる郷愁
体操をする約束がつづかない

岡山市 川端 柳子

真実の声が天から降ってくる
八十歳夢それなりにマル秘です

時に私のしつぽから吐く炎の矢
身についた勿体ないでとしをと

岡山県 福原 悦子

脇役に徹して放ついぶし銀
波ばかりたて明るさに遠くいる

胃袋はつい腹八分忘れてた
喜寿夫婦はにかむ赤いチャンチャンコ

岡山県 国米 きくゑ

お布団につまずく歳を笑い合う
ゆつくりと二人で歩く長い道

ひと言で満ちる親子の思いやり
人生の幸せでした好い出合い

岡山県 富坂 志重

傘寿来て芋やかボチャに札を言う
ふつくとお節をもって仏様

まだ生きる余白あるらしお正月
傘寿越え百歳目ぞすわらぞうり

竹原市 三宅 不朽

煙草は止めん晴れ晴れ海へ愚痴を吐く
衣食住足り刑務所が増えて

真夜中に飲む水 水だなどと思う
風物詩ではない泥だらけの棚田

広島県 藤解 静風

新年の十字路に立ち迷うサル
モザイクをかけた僕の二十代

左手で卵を割って妻を呼ぶ
ああ寿命延びる年金減らされる

東かがわ市 成重 放任

ドン底の暮らしいつしか忘れおり
年金に羽根が生えだす年の暮れ

見る人の心を映す月鏡
アルバイト先の上司は元の部下

東かがわ市 伊勢 八重子

三猿に徹し無風の昨日今日
高らかに第九師走の風に乗り

天国か地獄を聞か検査室
紅葉を背負い山家に柿すだれ

松山市 宮尾 みのり

同年のスターが逝った今日のウツ
母と子をゆつたり昼寝さす童話
まげ落とす四股名の呪縛から解ける
地に足が着いて枯葉の音ばかり

高知県 赤川 菊野

古里の森にいつぱい借りがあ
る
夕やけ小やけ古里の夕陽が呼んで
いる
トビがタカ生んで一人の米を研ぐ
独り居は死ぬまで舵は離せない

高知県 小澤 幸泉

汗くさい父の背中にある平和
背負い切れぬいのちの重さ耐えて
いる
空白をしっかりと埋める老いの意
地
反戦の赤く大きな輪を抜け

唐津市 市丸 晴翠

もういいかい母が遺影に問いか
ける
まあだだよ遺影の声と母は聴く
不器用な胃だね不満を溜めてい
る
巢立つ子を祈りで送る母の影

弘前市 一戸 ツネ

古傷の行きつ戻りつ八十路坂
道化師の胸の奥からグッドバイ
植木屋の鋏に俺を削る音
嘘ひとつ落して嘘に溺れてる

弘前市 岡本 花匠

浮寝鴨早く逃げなよ狙われる
ドライアイ臆する悩み鞭を打つ
不器用も身の内にして生き残る
愛憎の雪を活用町おこし

弘前市 宮崎 ヒサ子

冬晴れが続き調子がちと狂う
お岩木山 雪はまだかと言つて
るよう
さんま焼く師走の色になって焼
け
きき馴れた音途絶えずに今年い
く

弘前市 櫻庭 順風

南極の世紀の祭り見る炬燵
太陽を消すイベントのしたたかさ
日蝕は昔畑で今茶の間
月の影 瞬時の過客なりにけり

弘前市 須郷 井蛙

春うらら蝶になりたい日もあつ
て
苦労した甲斐あり晴間見えてく
る
青森のリング サクサクうまい
味
霜柱踏んで欠かさぬ散歩道

十和田市 阿部 進

もう一度歩いて見たい車椅子
夢でいい好きなあなたに抱かれ
たい
秋野菜 隣近所におすそわけ
お母さんあなたの笑顔支えです

青森県 小寺 花峯

街角で酸素が急に薄くなる
友が来てボトル一本倒れてる

決断の甘い男に隙間風

チラチラと鼻毛が伸びて今日を生き

滋賀県 中 宗明

夫婦でもイエローカードよく使い

弱虫がいつの間にか古希迎え

旅先で知己ふやしつづつ旅ひとり

面接を控え茶髪を黒に染め

亀岡市 井上 森生

わからないそれともわかる「バカの壁」

チャップリンのベストはいつもネクスト・ワン

老年期探る廁の後の顔

母白寿あやすと今日も笑い出す

京都府 稲葉 冬葉

絵手紙の冬水仙が匂ってき

神様のエコヒイキにも困ります

奉仕的に動いて威張ることはない

鞭よりも痛い言葉を字書で引く

京都府 丹後屋 肇

島つなぐハイウェイ下の真鯛釣り

午前様問い詰められるパピブペボ

超高層ビル借景の坪の庭

遡上する鱗に熊の爪と牙

大阪市 清水 絹子

入園テスト稀に早起きママとパパ

スポンサーの名もすっかりと紙おしめ

泳ぐより浮くむつかしさ日プール

過去の罪握る妻にはかなわない

大阪市 榎本 舞夢

さあ師走にらめっこする予定表

朝の内来年の干支買いに行く

御歳暮が来るの上げるのチェックする

年金の枠で年金振り分ける

大阪市 寺井 東雲

当たった人聞いたので僕買いました

ぼけが抜け人間かたくなって来た

いい人生だったと言うて死にたいね

熱さめた夫婦でとても仲がよい

大阪市 榎本 日の出

許したり忘れたりして諦める

細かいがお金のことは大雑把

歳取ってきれいになった齒の並び

頑固者折れるチャンスを待っている

大阪市 松尾 柳右子

まだ試験受けてる夢を見てるママ

物知りの喋り止まらぬ鼻眼鏡

懐かしい友と再会弾む声

子が出来て堂々と帰る里は雪

大阪市 町田 達子

アルコール入れてもみじと照り競い

故郷からの絵手紙もはや冬景色

抱かれるのが苦手ベットの兎くん

降るような星空見たい欲を言う

大阪市 中村 叡子

贅沢なこんな御馳走残す年齢

年寄りには公衆電話さがします

大阪に着いて豚饅買い可笑し

湯治旅したのに帰宅草臥れた

大阪市 鈴木 トヨ子

黄金の光つづけと初日の出

年賀状に孫の成長見るようだ

初雪に訃報つづきでふるえる身

過ちを許し合うてる老夫婦

大阪市 安達 はじめ

やれやれと言える暮しがまだ出来ぬ

子に送る小荷物夫婦して包み

冬の日の窓辺私の指定席

四面楚歌私を拾う友がない

池田市 栗田 久子

季節感味わう鍋は鴨一羽

現実気つかぬらしくよく吠える

肩のこる話は遠慮しておこう

飼慣らしこの手にひよいとのせた鬼

和泉市 西岡 洛醉

幸福の余白実直の道進む

ブランドが老妻の胸春にする

柿ひとつ残し駆け足冬が行く

一病息災落葉さくさく踏む歩幅

交野市 森本 弘風

一休寺今年のモミジ燃え切れず

一寸だけ昨日と違う日記書く

年金の暮しになれて恙なし

酒よりも焼酎が好き血糖値

河内長野市 植村 喜代

あの頃はよかつたなどと淋し過ぎ

世界中人の心が病んでいる

町の灯が淋しく見える夕餉どき

小さい小さい幸せにありがとう

河内長野市 水谷 正子

捨て猫が私と妻の座を競う

まんころのクリーム買って老い防ぐ

十二月八日はやはり寒なった

モノクロに節子絹代が生き生きと

河内長野市 石堂 潤子

善人の中で二の足踏んでいる

へっついからタッチポンへと飯の味

もの忘れ私もですの握手する

デパ地下の回転焼きが呼んでいる

岸和田市 木村 正 剛

満腹を極めて消えるシャボン玉

妻のあと闊歩している影法師

殺虫剤ときどき僕に向いている

鬼は内こころを鬼にしたいから

堺市 西村 りつえ

婆ちゃんもほんのり紅の三箇日

三世代絆固めた福笑い

迷いつついつしか楽な坂をより

底抜けの明るい話申も待ち

堺市 齋藤 さくら

名前すぐ出てこないのが悩みです

命ある限り笑顔で暮らしたい

旅土産富士がくつきり顔を出し

イラク戦終ったはずでなかったか

堺市 柿花 和夫

菊人形菊も本気で咲いている

木犀のシャワーを浴びて母和む

間をとって棘避けている老い二人

地上波の説明脳が音をあげた

吹田市 瀬戸 まさよ

不景気を知らぬデパ地下散歩する

キャリアウーマン スーパーで主婦の顔

閑居してエリート顔の顔角が取れ

冬ごもりどなたか私連れ出して

吹田市 岩屋 美 明

上がり込む隣の猫と日向ほこ

化けの皮はがせば傷も癒えてくる

美食家のラストオーダーにぎり飯

ポップ屋の帽子が似合う雪だるま

吹田市 大谷 篤子

仕合せの笑顔を配る友がいる

過ぎ去ったチャンス数えて年重ね

記憶力あやしく手帳離せない

美しい錯覚のまま生きている

吹田市 早川 棲世

みのもんた論拠に主治医困らせる

ドガの裸婦そんな肢体と見る車内

消去法妻にはやつと俺残る

念のためよく死ぬ病院覚えとく

吹田市 野下之 男

今の世を諦めてない楽道家

願いたい事慎ましくして老いの春

妖精が三日月の舟どんぶらこ

磨かない玉があるのに気付かない

大東市 南原 正和

夢の中不倫のドラマ開演中

火と燃えて知りつつくぐる地獄門

傘の中炎の雨に影二つ

秘めた糸切れず綾取り繰返す

高槻市 生田 義一

語り合う友多くあり老い楽し
逆夢でないかと悩む苦勞性
水平線じつと見ているだけでいい
スポーツが結ぶ結婚やわらちやん

高槻市 左右田 泰雄

襟巻きをすると肩まで冬が来る
安心の座り心地がいま一つ
傷つけ合い許し合いして育つ愛
煩惱を抱え彷徨う茨道

高槻市 江原 秀夫

地から湧く平和の音が響き合う
潮時に消えて拍手が幕を引く
忠告をカクテルにして飲むゆとり
おまけ人生四捨五入して締めくくる

高槻市 傍島 克治

レシビより確かな母の匙加減
大阪城に行ったことなき浪速ッ子
疑いもせず矢印通り行く怖さ
真相を話しておこう歳だから

豊中市 山門 夕ミ

共白髪これから先がほんまもん
糸車朝の電話でまわり出し
思いやりこの身にまとい温かい
亡夫恋し無性に恋し丸い月

豊中市 岸田 知香子

目的に向かい退屈知らぬ老い
八十路です老いのリズムで時刻む
老いてなおりズムくずさぬ頑固者
満月にうっとり疲れいやされる

豊中市 樫谷 郁子

初夢は富士のお山と孫悟空
俊敏と知恵貫つてゆこう申の歳
慟哭の対面声なく涙涙(イラク外交官 2句)
お二人の御霊に祈る南無阿弥陀

寝屋川市 堀江 光子

浮雲のあの日に似るも人遠し
ふるさとへ届くかたちに鱗雲
日向ほこあの世この世の噂して
惜別の思い犬にもあるらしく

東大阪市 指宿 千枝子

七十もおしゃれ楽しむ今がある
レッスンのピオラもチェロも親がかり
湯けむりは妙薬僕を若くする
東京駅鳩も私もうろちよろと

枚方市 二宮 山久

はく息もま白き夫婦ベアシューズ
血糖値下げる薬は万歩計
還暦へ赤いセーター胸をはり
面接へ背筋のばして六十歳

枚方市 安達 忠 央

古里を袋に入れて帰りたい
ライバルの袋の中が見たくなる
釈迦の手に抱かれて善も悪もない
阪神のリーグ優勝だけの年

枚方市 宮川 珠 笑

妥協するつもりで訪えばむし返し
腹の子とバージンロード踏みしめる
道問うて地図さがす間を待たされる
陽のめぐみ受けつつ愚痴るサンルーム

藤井寺市 中島 志 洋

生きるため時には鬼になる男
ああ平和婦唱夫随で波立たず
来ぬ人の思いはつる松の雪
許す気で心の窓は開けておく

守口市 井上 桂 作

年輪を重ねてもなお知恵わかず
一芸に長けるは良いがうとくなる
金木犀匂い入れては窓を閉め
物忘れ言い訳だけはせぬことに

八尾市 村上 ミツ子

還暦の友へポインセチア贈る
書くことはなんにもないと書く日記
山茶花を散らす激しい雨の音
真つ向勝負敬遠なんかするもんか

大阪府 澤田 和 重

アホになることも平和を保つコッ
座布団がうんざり客の長い尻
平凡な大人になったやんちゃくれ
一笑に付されて本音宙に浮く

大阪府 野田 栄 呼

秋雨の向こうに息子の八回忌
いたずらに失った物探してる
あれこれと財布呼び込むお買い得
何遍も老母の話聞いたげる

大阪府 桑野 ゆきの

ロボットの介護ますます失語症
スカーフをリボン代りにヤングママ
出雲では神集団で舞踏会
父と子の歯車母の潤滑油

〈川柳カレンダー・第16回〉全国川柳大会

締切り 3月31日 投句料 無料

発表 平成17年(2005)「川柳カレンダー」誌上

選者 橘高薫風ほか11名

賞 最優秀賞1名・優秀賞4名・寿優秀賞(70歳以上)4名

女性優秀賞4名・佳作賞30名・銀賞60名・努力賞120名

投句用紙(所定) 1人1枚に限る

投句先 195-0072 東京都町田市金井4-1-16

全国川柳大会事務局 芳文館

自選集

橋 高 薫 風

山は父 海は母とや屠蘇の膳
妻と僕まるで白兔黒兎

この頃の暮しを佳境とも思う
妖怪になれば妖怪怖くなし
茸狩りゴツホの耳を拾ろてきた

土 橋 螢

新しい花芽をつけた長寿梅
次の世は鶴になろうという雀
仏前莊嚴はつはるの香を焚く
来年も生きる約束して仕舞う
愛燦々 雪白黒の万華鏡

西 田 柳 宏 子

ご無沙汰を詫び元氣だと来た歳暮
日々達者ですとは口のことかいな
捕えてはみたがフセインもて余し
クリスマス許り騒がし歳の暮れ
正月をたずねあぐんだ迷い箸

西 村 早 苗

平服でいいと招待状が届く
おせちメモ握って初春の人の波
風花が舞う日途中下車をして
注連縄のみずみずしさよ床飾り
気に入りのハンカチ今日はよく使い

仁 部 四 郎

卵売るスタンド民を守り立つ
お隣もトヨトミである現代史
御慶とて民九条を高誦す
み民われ二十五条を杖とする
中学でバイ・ザ・ビーブル教えられ

野 村 太 茂 津

先に逝く君を見送る独り旅
託けを頼む葵水待つ森へ
つるの想いは独りの部屋で身が締まる
脇構え木刀を振る新陰流
寂しさを払う独りの夜は深けて

波 多 野 五 楽 庵

風花の寂しさに遇う娘の回忌
初雪草 我も旅ゆく一人なり
不覚にも冬の迷路にまざれこむ
牡牛座の譜面で踊る北の鬼
きさらぎの旅に疲れているピアノ

藤井明朗

新年を迎え友待つ花の春
正月にひ孫待つてのお年玉
フセインの目算はずれ捕えられ
長生きへ感謝九十歳の春
景気上むく申年を信じてる

藤村メ女

小さな命石の割れ目に咲く命
母さんが一番小さい影法師
こだわりをゆつくり流す母の川
下積みをじつとがまんの丸い石
まろやかな余韻で母の鈴が鳴る

芳地狸村

喜びの歩幅となりし初日の出
清らかな明るい朝の福寿草
朝の陽を背に夫婦の散歩道
困ったら茶漬けかきこむ癖がある
ご先祖の顔が生きてる七五三

宮口笛生

老人会旅行の話すぐ決まり
楽しみの一つに父のコップ酒
ワープロは嫌い筆の年賀状
束で来る正月温い年賀状
初詣する気になつたいい天気

森下愛論

信用が少々生きてる町に住み
坂かれた失意羽ばたく孤独感
静かさに心の中の夢を追
飛行雲追つて駆けっこしてみたい
紅葉を求め色濃き山路ひとり行く

八木千代

花野にも枯野にもある忘れ物
黙って探す 人に迷惑かけられぬ
溜めてある記憶を少しずつほぐす
しばらく経てば溢れるほどに思い出す
後の世もかけて見つける事にする

八十田洞庵

曼陀羅の絵解き遺戒を夢見てる
どの裸木も生きるてだては心得る
夕やけこやけ腕白小僧だったよね
寸劇かも知れぬこれも愛のうち
女ひとり被害者意識干涸らびる

両川洋々

フセインもブッシュも神にすがりつく
ストレスが身体で溶けるまで笑う
癌告知 神へ近づくと鶴を折り
反戦の声も冬枯れしたらしい
自爆テロ今日もイラクの子等が死ぬ

阿萬萬的

そんなことばれてますわと妻笑う
鼻の効く妻に一目おいている
歳ですね妻に淋しさ見える背
世話好きの癖にまたまた物忘れ
言わぬが花今日ここまでにしておこう

石川 侃流洞

仏の花育て余生の指を折る
記念切手貼った便りの温かさ
我が句会明治生まれがデンといる
ワリカンへ損するもんかけちん坊
美食して瘦せたいなどと罪つくり

板尾 岳人

冬の花胸に抱かれたことがない
あの街に行けば逢えそな冬の花
大寒やみどり絶やさぬ冬の花
あの日から恋しくなった冬の花
鞆の揺れを見ている冬の花

奥田 みつ子

右向け右 昔に戻る世が恐い
しがらみを捨てて飛び立つ風を待つ
愛も憎もみんな無にして渡る川
今朝もまた生かされて見る霜の庭
優しさに触れてやさしくなつてゆく

河井 庸佑

目の高さ合わせ子供の悩み聞く
先の先読まれた石と気付かない
観点を替えて活路を切り開く
平静さ欠いてひとり道化めく
逆境に挫けず明日の風を待つ

川島 諷云児

無為徒食いいんじやないの達者なら
不器用さしみじみ思う針の穴
晩学の道は険しと辞書を繰る
おろおろと年金当てに生きている
運不運時には神もミスをする

木村 あきら

一筋の道に迷いのない余生
ガマ口下へ向き連休終る
朝刊を読み一日が動き出す
弁解は止そう自分が小さくなる
梅鉢に祈りを込めて受験生(天神詣り)

工藤 吟笑

家内より可愛がつてる松盆栽
竹ボーキ檜山の道掃いて置く
荒波を蹴立て男は船を出す
寒紅梅庭園でしきりに春を呼ぶ
七勝七敗明日一日に賭けてみる

黒川紫香

王様の逃げ場教える二三人
夕暮れはいつもの匂いする場末
郵便屋来たのに家で止まらない
長屋にも郵便届く年の暮れ
病人の程度が判る車椅子

小西雄々

信頼へ仮面のとれぬ日の誤算
満月と話つきない枯すすき
真心へ少年の瞳を信じよう
強がりを案じて散った桐一葉
尻尾切ったつもり辞職の言葉聞く

小林由多香

初春へ去年のなみだ持ち越さぬ
よく叱る上司に今日は奢られる
成長期うるさく理由聞きたがる
ケーキ買え買えとジングルベル煽る
叱つても後がないからさわやかだ

斉藤 姦

競りの声弾む津軽のりんご達
よく笑う子からこぼれる花の種
プランターに小さな夢を児と育て
まだ少し燃えそう吹いてみる焚き火
夢売りが好きでたまらぬ冬苺

田口虹汀

川柳塔唐津も今日が初寄り
あと四年すると百まで手が届く
普通なら七日過ぎたらお仕事ヨ
明日は鬼じゃ鬼じゃのお火焚きよ
三ヶ日アツという間に過ぎました

竹内紫鏑

カリヨンの丘で合唱団も伸び
顔知れず投句と三種便永し
技師の自分史前半は医師に似る
血が沸いた日あり武蔵の挿絵展
オレオレが来る同窓の顔付きで

田中正坊

冬館 書架から古き本を出す(内村鑑三)
後の世に何遺さんか問いかける
金 事業 思想 遺すものありや
真面目なる生涯をこそ遺すべし
冬茜 我が晩節をけがすまじ

玉置重人

約束はきつちりしたい停止線
よく見れば美人ばかりの趣味の会
階段の長さを足に言い聞かす
お隣の犬のおやつも買うてある
妥協して男の影が薄くなる

川柳塔かんとう(仮称)発会句会

発起人・河内天笑 播本充子

とき 2月28日(出) 13時開場・14時30分開会

ところ アルカディア市ヶ谷(旧私学会館)・赤城
東京都千代田区九段北4-2-25

電話 03-3261-9921

JR中央総武線市ヶ谷駅徒歩2分

課題と選者 各題3句・13時30分締切・席題なし

「白 い」 佐藤 美文 選

「芽 」 太田紀伊子 選

「ふわふわ」 てじま晩秋 選

「アクセント」 四分一周平 選

「光 る」 奥田みつ子 選

当日会費 500円(発表句報呈)

欠席投句 用紙自由、80円切手3枚同封
2月20日(金) 締切り

投句先(問い合わせ先)

〒193-0832 八王子市散田町2-31-3

播本 充子 電話 0426-65-3172

物騒になったと月のひとり言
空っぽの酒瓶父はまだ唄う
民営化性格はまだ官のまま
そのまさか無口な人が喋りだす
わらべ唄跡は継がない無人駅
永住と決めるみどりの薫る町
マンションが起きてる寝てる走ってる
負け犬の涙が洒れる流れ星
手の平でみるおなますのお酢かげん
先人の知恵をいただく句の味

遠
山
可
住
恒
松
町
紅

第5回 文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

募集作品 文学ルート(5市)周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗
行事などを題材とする川柳。(未発表のオリジナル作品に限ります)

宿題・応募先(宿題に応じてご応募下さい。各2句)

松江市「しじみ」「怪 説」松江市産業振興部 観光文化課 TEL(0852)55-5293

〒690-8540 松江市末次町86 FAX(0852)55-5564

尾道市「塔」「眺める」尾道市産業文化部 観光文化課 TEL(0848)25-7366

〒722-8501 尾道市久保1丁目15-1 FAX(0848)25-7293

今治市「港」「焼き鳥」今治市教育委員会 文化振興課 TEL(0898)36-1608

〒794-8511 今治市別宮町1丁目4-1 FAX(0898)25-1700

松山市「ロマン」「野 球」松山市企画財政部 国際文化振興課 TEL(089)948-6634

〒790-8571 松山市二番町4丁目7-2 FAX(089)943-9001

高知市「はりまや橋」「黒 潮」高知市教育委員会 生涯学習課 TEL(088)822-6394

〒780-0870 高知市本町4丁目3-30 FAX(088)823-1095

応募方法

・専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品(FAXによる応募可)

・応募作品には「宿題」及び、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号

等、必要事項を明記して下さい。(雅号の場合は本名も明記)

・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。

応募締切 平成16年3月31日(水)(当日消印有効)

出品料 無料 選考 平成15年5・6月

発表 平成16年7月、入賞者に通知します。(表彰式は、16年9月下旬予定)

選考委員(第二次選者)吉岡龍城・塩見草映・橋高薫風

(第一次選者)柏井日出子(松江市) 三浦 宏(尾道市) 木原 鶴子(今治市)

関谷 省三(松江市) 曾我部佳風(高知市)

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

水煙抄

板尾岳人選

府中市 馬場利子

出雲市 小豆沢 歌子

何もかも許してふたり日なたほこ

終章の余白は白いバラで埋め

言い足りぬ言葉残して発車ベル

自動ドア明日のコント掴めない

風は初春未来の構図夢で追う

鳥取県 吉田弘子

大吉のうれしい予感初みくじ

見物の客の値踏みをオリの猿

すっからかんだから野心が燃えてくる

賞味期限素直に読めぬ位置にあり

リストラの戦士いたわる昼の月

米子市 足立 由美子

知恵の輪が解けてトンネル抜け出せた

欲張らず僕の歩幅で生きてみる

覆面を小春日和に干している

児の瞳にはきれいな景色見せておく

新年の川がさらさら流れ出す

跳び過ぎて大きな飛沫浴びて

遠回りしたから逢えた冬木立

冬の空 私の指定席探す

追伸の筆の温もり点点

冬の暖絡んだ糸が弛み出す

岐阜市 平野 あずま

一斉に素顔を曝す柿すだれ

想い出を温く包んだ冬帽子

均等法双子のような秋刀魚買う

枯れるには早い人生返り花

病気せよ入院せよとコマージュ

唐津市 坂本 兵八郎

盃が理性の扉を乗り越える

仕様のない理性が恋の邪魔をする

嫁姑理性の衣補修する

優しさを全部他人に使う妻

強い妻なのに恐がる夜の道

河内長野市 大西文次

九十三鯖を読んでも始まらぬ

寝た切りへ産みたて卵お見舞に

湖畔だと解り小川もほつとする

思ひ出は昔バナナのたたき売り

久し振りなんて老人たぶらかし

北九州市 岡田幸生

少子化の波に揺れてる命綱

カルチャアの梯子で落とす脳の錆

食い違う親の望みと子の希望

捨て切れぬ欲に眩んで嵌る罟

猿真似でいいさ倅せごっこなら

札幌市 三浦強一

青空が好きですフリーマーケット

招待はないが出掛けるお葬式

家族っていいなと思うサザエさん

助手席にカーナビがいる妻の里

ふるりの夜星屑を浴びている

奈良市 乾春雄

初詣で欲が渦巻く人の群れ

反逆の影絵がゆらり揺れている

消しゴムで消せない噂歩き出す

外は雪待ち人想う身は炎

捨て切れぬ靴が知ってる修羅の道

奈良県 藤村重之

人生の岐路に紫煙もゆれて見え

正義感中途半端に燃えて消え

ポタン穴掛け違えてる倦怠期

一本のネクタイで釣るママの腕

初恋の人が素敵に老婦人

奈良県 江波正純

人生の余白に詩を書きつける

キャンバスに思いのたけを塗りつける

酒を飲む理由の方が威張ってる

自らをほめて心を弾ませる

思い出と別れを惜しむ大掃除

和歌山市 喜田准一

コーヒーを飲んでその後を考える

口軽い女がそばに居る不安

古傷をまともに照らす内視鏡

無礼講宣言されて身構える

論点がずれて意見が縮まらない

兵庫県 安達厚

減ったら食べ眠いから寝る本を読む

百歳まであと何年と思う暮れ

後もどり出来ぬ月日がまた一年

間違いは字にはあるけど絵にはない

雀にも留守をたのんで旅に出る

神戸市 両川 無限

まだセーフ鏡に呪文かけている
前回も水に流して生きている
私より短気な人に近寄らぬ
好きな人いるから翼欲しくなる
散る覚悟出来て根っ子を太らせる

神戸市 山田 婦美子

ひとことがハート目がけて矢を放つ
釘づけになった身体に気付かない
欠点を利点にかけて対処する
挫折する先にチャンスがある予感
耳元で枯葉の音がせきたてる

尼崎市 河津 正治

子の責を背負う遍路の影重く
不発弾抱いてストレス溜めてます
風紋を描いて去った風の精
いじめとは言わずノルマで縛りつけ
積年のひずみ絆が解きほぐす

伊丹市 延寿庵 野鶴

逡巡へやがて紅葉も土になり
淡白なこんにやくに刺す針供養
米ぬかで女を磨く仕舞風呂
マイペース生きて百歳二万人
天気図の乱れる雲の息遣い

川西市 井本 清山

天に星地に松茸の我が故郷
パズル解き頭の調子テストする
神仏の世界も金が要るそう
爪楊枝だけは買わない総入れ歯
受信料払ってコマーシャルも見る

三田市 堀 正和

正月は神も仏も信じます
蟻の目でみれば人間働かぬ
左遷地へ噂が先に届いてる
やき芋屋英字新聞使ってる
美人とは友にはならぬ妻の知恵

鳥取県 福西 茶子

菜の花と蝶々の内緒話きく
力瘤まさかの時に溜めておく
満月をひとまわりするプチ家出
民話から人でありたいコツ学ぶ
次の世もあなたの子です輪廻待つ

鳥根県 武島 ちよえ

のぼる血を静めてくれる冬の天
病葉へ回りの風は温かい
悩み事優しく包む茜雲
生きているから笑ったり怒ったり
手に負えぬ事は神へと転嫁させ

岡山県 矢谷 富士野

まつたけを一人で食べる不しあわせ

雪しんしん祖母の民話のある炬燵

悪女にも魔女にもなれず鍬をふる

風雪に耐えて今宵の綿帽子

鏡台に心のすきを見すかされ

京都府 三宅 満子

無難より困難選ぶ子に拍手

年俸の一億二億遠く聞く

手あぶりを出して心も温める

デバ地下は不況知らずで主婦の山

事始め京の師走に華添える

長岡京市 山田 葉子

鍵かけた胸によこんでいる疼き

あけずにはいられなかつた玉手箱

絶ち切れぬ思い発酵させて冬

気持ち分け合つたところでお茶にする

どれ位歩けば君の街だろう

宇部市 高山 清子

アスファルト土に還れず舞う落葉

腹立ちに蹴る石も無いアスファルト

今日も無事亡夫に感謝の香を焚く

無い袖を振って見栄張るお付き合い

行間にかすかに見える思慕の跡

愛媛県 黒田 茂代

わくわくと京都の秋を食べ尽くす

実るもの実らせ秋は足早に

逃げ水を追つて亡我の蝶になる

走り根の森がだんだん痩せてくる

酸欠の街から森へラブコール

今治市 野村 清美

帰らない過去をビデオが巻き戻す

親しい無理をするなど使われる

空白へ書けない思い埋めて置く

貧乏性焼いた鰯が口に合う

外は雨本とおしゃべり楽しもう

高知市 伊野部 和江

選択肢入れて置きたい風まかせ

クリスマス今日だけ我家宗旨変え

真冬の蚊自殺したげに寄つて来る

少しずつプラス思考を友とする

怠慢の中に眠っている答

高知県 桑名 孝雄

大過なく冬を越そうぜご同輩

酒おでん予防注射の冬の陣

秒針はずしゆっくり老いてゆこ

世渡りが上手で二番手につける

雑兵の腰弁当のでかい夢

大阪市 近藤 正

改革の名で年金が先細り
報われぬ汗にも明日につなぐ夢
日の丸が月の砂漠にさまよい出
騒ぎ立て騒ぎをつくるテレビ局
聞かざるに見ざる言わざる猿の知恵

大阪市 中村 忠敬

とりあえずビールの次はウーロン茶
プリン体怖がりながら飲むビール
意外にも手書きの手紙見直され
子に負けた次は孫にも負けそうだ
二人なら食っていけると口説いてる

岸和田市 雪本 珠子

呑気でも影にストレス溜めている
今が好き夢中になって生きている
幸せな水輪ひろがる昼下がり
若いねと言われて歳を意識する
花よりも人の笑顔は美しい

吹田市 木下 敏子

ぼちぼちと言ってはおれぬ十二月
折り返し地点で笑う膝がしら
成るようになる母さんのひとり言
見て聞いて今年はさるの知恵借りて
しきたりの水引き緩むお正月

吹田市 須磨 活恵

老いてなお女激しい性を持ち
残り火を絶やさぬように本を読む
誘われて一期一会の風に遇う
木枯らしに避けて通れぬ女道
もう細い絆の先が裁ち切れぬ

吹田市 二宮 栄子

松茸の匂いをたんと嗅いでくる
涙腺の緩みを子等にさとられる
里帰り瀬戸はきれいな月明かり
児の電話幸せそうな顔で聞く
しとしとと雨のつぶやき聞いて寝る

藤井寺市 若松 雅枝

年始客馴れぬ着物の裾さばき
三猿の教えを生かす老いの知恵
逆風に負けないコート買ってある
寄り添って記念写真を見る灯り
媚びないでわたし一人の舞を舞う

八尾市 松葉 君江

孫のない頭の痛い鬼瓦
児の笑顔重い空気を軽くする
一合の酒で本音を引き出され
世の乱れ怖い絆の切れる音
人間の裏を見たくて回り道

神戸市 田中 章子

和歌山市 寒川 武

目に見えぬひびほど恐いものはない
うさぎより亀でゴール目指そうか

減らず口聞いて安心しています
責任が無いから好きなことを言う

色付かず枯れるもみじは口惜しからう
途中下車運命少し変えてみる

雪辱を晴らしに行つて返り討ち
どの説も決め手の欠ける倭人伝

三田市 石原 歳子

奈良市 成橋 邦柳

衰えを口でカバーをする歳に
顔の皺増えたからこそ派手な服

口下手とつらつら話す長電話
年寄にオレオレ詐欺は許せない

本当の愛を教えた万葉歌

お喋りの私黙らす蟹づくし
蟹鍋が煮えた頃には皆黙る

I T は無いが楽しく暮らして

篠山市 谷田 多美子

奈良市 田中 賢治

口さみし風呂吹き大根お茶うけに
物忘れいよいよ惚けて来よるらし

鯉跳ねて毒饅頭へ流行賞
白黒を灰色にして行くイラク

南無浄土プラス志向でゆく余生
野仏に帽子かぶせて冬支度

上つ張り取れば石油のにおいする
拉致解けぬ今か今かと春を待つ

野仏に帽子かぶせて冬支度

西宮市 片山 忠

鳥取県 竹森 富久江

生真面目な夫に苛立ち縛られる
二度洗いされてる僕の水仕事

大きめな傘ひろげても雪のみち
熱っぽく語り明日をつなぐ橋

子に後悔させたくないと遊んでる
相性がびたりと合えば窮屈だ

日本語のお国訛りを披露する
日本語もぎこちなくなり老いの海

相性がびたりと合えば窮屈だ

田辺市 大峠 可動

鳥取県 細田 裕花

不整脈沸騰点で棒になり
神我一体 去年の夢は捨てました

決め球のない男影薄くなり
現役にこだわら生命燃やしてる

軍備地図 隠岐には隠岐の子守唄
紅葉舞うあの世この世の慰みに

虫くいりんゴ転がる夜の街
引き算の美学で老いの支度する

紅葉舞うあの世この世の慰みに

卵焼のない弁当はしまらない

貰うまで年金セーフ願いたい

気合入れ年末ジャンボ買いに行く

幸不幸きつと心の中に棲む

鳥取県 平木 公子

大方の色を着こなし古希をゆく

鶴の恩忘れず人の恩返す

母の駅みんな好きだと寄ってくる

新春の水心まで染みてくる

鳥取県 山岡 久枝

単身赴任整理袋で送り出す

近頃のすずめは口がこえている

猫の手と床みがきする古屋敷

自転車で新発見へ街めぐり

鳥取県 藤山 弘子

年毎に祝い皿替え話題待つ

忠告は馬の耳には届けまい

漏らされた他人の秘密茶に告げる

夜更けにはふさぎの虫が眠らせぬ

鳥取県 横田 春名

倉吉市 青砥 菊枝

親戚の無いこの町が暮らし良い
鮎玉をわたしはいつも噛み砕く

嬉しくて悲しくて飲む酒を飲む

針仕事で家族支えた座り胼胝

子と旅をしたアルバムのなつかしさ

赤い靴履いて波止場で海ながめ

淋しさも悲しい時も唄が消す

燃え尽きて夢だけ残り逝った夫

鳥取県 山口 千代子

捨てる物出してしまつて年を越え

名月が弛む手許に語りかけ

頼りない一人暮らしの長電話

泣虫も時に護身の立役者

鳥取県 河田 のり代

子宝の願い叶つて十五年

神だのみ子宝願ひ恵まれた

鍋囲む四季の匂で舌つづみ

淋しさにたえず胃袋満腹だ

鳥取県 岡田 信恵

大根の白さに負けた太い足

雪女寒い世相を暖める

八方美人嘘も方便生きている

風呂 食う 寝る ことば足らずの人でした

倉敷市 撰 喜子

鳥取県 福岡 博利

秋風によちよちあるく楓の葉
雲竜太鼓バチが喜び風を切る

旅好きの秋の木の葉は風に乘る

寝そびれて明日の段取り出来上り

串間市 高畑 滝

妻の留守レシビで遊ぶ退職後
識別は顔相でできるという時世
蟻の列横に流離う者がいる
価値のある品と思うが安すぎる

日立市 加藤 権 悟

フセインのようにも見える蟹気様
黒枠に飾るにちょうど良い写真
いいことをしたなと思う赤い羽根
着ぶくれを二ん月の風春を恋う

愛媛県 安野 かか志

味噌蔵で漬物石と話込む
仲良しの夫婦になって寒に入る
ひもじさの語り部として芋の茎
すり抜ける風も微笑む初デート

愛媛県 花岡 順子

寂しいな打算ばかりが見えてくる
黒子の意地は黒子のままで終わらない
一寸の虫ジレンマを抜け出せず
戻れないものかと道を模索する

愛媛県 宮本 末子

健康な限り切手は嘗めて貼る
下向きに茶花がこぼす小春の陽
ありのまま生きて子に継ぐ長寿の灯
釣り人の意地で見つめる竿の先

今治市 渡邊 伊津志

二度書きの未練が滲む墨の色
自画像は夕焼け色に染めておく
蹟いた跡に落とした目のうろこ
善人の笑顔が残る掌の温味

高知県 百田 幸

出る杭は除けて歩いて姑でいる
捨てるのにとても勇気のいる女
アルバムが我が家のドラマ物語る
一言を吞んで同居が丸くなる

南国市 小原 圭二

立ち止まり時の過ぎゆく音を聞く
日溜まりで膝にまつわる冬の蠅
植木刈る音がひびいて暮れ迫る
アフガンのあとはイラクの地理学ぶ

高知県 近森 功

すべらした口が飛火しやけどする
幸せを猪口に託して妻に謝し
長持ちをしたなと思う八十年
千人針イラク派兵へ準備する

日高市 根岸 方子

終章へ趣味の数々追加する
行く先は聞かず背中を信じ切り
鼻歌が響く厨房いい香り
心配が過ぎて古着を捨てられず

東京都 やまぐち 珠美

往く年へ飽きず見ていた仄明り
少年が円く削ってみる昨日
手枕の高さあなたの血潮聴く
ジャム瓶を開けては辛い現実を埋め

東京都 井上 つよし

パソコンで人差指のオメデトウ
友と酌む酒で処理する不発弾
売り声もシャンソンめいて焼芋屋
採れたての頬ツべ落ちそな蜜りんご

横浜市 長島 亜希子

気丈夫もすぐ転移かと口にする
今だから護憲唱える党が要る
雅子様真似てABC教え
遊ぶ金あつて本買う金がない

横浜市 巖田 かず枝

母さんの時より似合う高島田
懐かしの母のドレスで色直し
肩の荷を半分降ろし嫁ぎゆく
神様もお困りだろうイラク行き

横浜市 布山 嘉信

目分量妻の料理の味確か
憲法を虫食いにして兵を出す
年金に木枯らしよりも寒い税
昔なら話題にならぬ子沢山

横浜市 金森 徳三

早ばやと時代おくれが秋の風邪
老い二人手抜きでいつもチンの音
なにもせず気ばかり焦る老いの暮れ
スーパリーのポイント溜める妻の趣味

京都市 清水 英旺

人間の知と理と情はどこ行った
ただ事でない胸の疼痛闇の底
無意識に寿命逆算してる僕
あくび一つきょううつがなししまい風呂

富山市 松見 たえ

捲し立て話す言い訳聞くゆとり
人間の弱さを知った孤独な日
寝た振りでこそこそ話聞く本音
隠し事嫌に優しい態度見せ

新潟県 高野 不二

不作でもないいさお米の値が上り
洪抜いた柿がちよつびり抵抗し
小雪の暦知ってか雪が降る
おれおれに俺はだまされな積もり

草津市 久保 和友

眠れぬ夜ゆつくり見てる小津映画
産寧坂で一ヶ所見える塔が好き
その昔路郎先生と飲んだ店
戦友会消滅イラクの話せず

大阪市 寺井弘子

南座のまねき忙しさがきたてる
明日ゴルフにこにこ顔に雨予報
マニユアルを見てもこなせぬ機器ばかり
鍋奉行仕切り甲斐ない少人数

大阪市 池上清治

文楽の佳境に浸る小半時
ともかくも苦楽を共に五十年
海に入る夕日で故郷を思い出し
褒められた時に飛躍の決意する

大阪市 尾崎黄紅

飛車角と金銀換えて立て直し
名無し草なんてあなたは無学だな
隣から貰った苗の咲いてくれ
寄り添うて落葉が温め合っている

大阪市 伏見雅明

水割りで今日の仕事を締めくくる
憧れた街にもいない青い鳥
呆けるには時期尚早と辞書を買う
初恋は黒い瞳に赤い靴

大阪市 三浦千津子

リストラの身を重ねあう捨て案山子
膨らんだ噂へレモン丸かじり
罪ひとつ隠して妻に裁かれる
不揃いの子の巣が温い子沢山

大阪市 升成好

生きざまのそのままに指節くれて
百歳の皺に無言の力あり
タバコ消しスタンドを消し今日を消す
江戸寿司の老舗たべ方まで教え

和泉市 横山捷也

ライバルを追い抜くチャンス狙う位置
丸い母笑い袋を持ち歩く
病床の父に芝居を演じ切る
裏役に撤したままで父が逝く

和泉市 小坂凡英

デジタルがなんだやろうぜ紙芝居
健忘症自分で嘘をバラしてる
筋書きが見え見えですよ猿芝居
仏への感謝頼みに代えるエゴ

泉佐野市 稲葉洋

まだ憂き世離れられずに赤を着る
影にまで老いの習性見たシヨック
大寒に寒いと言って嘲われた
また一年経ったに古い影消えぬ

大阪狭山市 羽田野洋介

なぜ急ぐまだやることがあったはず(友達く)
身に覚え無いのに降ってくる火の粉
いやな噂やっぱり独り歩き出す
火傷せぬ分別はある年の功

河内長野市 坂上 淳 司

軸ぶれの悲劇の歴史繰り返す

欲惚けて高値見送り底で売る

入れ知恵があつたか示談振り出しに

口下手がまあまあやなと褒めている

河内長野市 木太久 正 一

喪中欠礼面影偲ぶあの頃を

友が来る妻清掃に熱こもり

歳月が矯めて相性いい夫婦

順調に年金暮し喜寿を越え

岸和田市 土橋 房 枝

医療ミス命を軽い物にする

優しさが私のハート変えて行く

塗りすぎて素の自分にもどれない

悪口を言いブーマラン帰り来る

堺市 奥 時 雄

あれしきでこんなに効いた鼻薬

定年のころから折れぬ妻となり

焼肉に負けないようにサンマ焼く

黒髪の乙女がとんと見当らぬ

豊中市 源 田 啓 生

台本のない芝居してみな主役

とつとつと郷土自慢を語る酒

窓枠の中の政治を覗き見る

宝くじ期待と落胆繰り返す

富田林市 古田 千 華

人生の軌道修正気前よく

履くことはもうないだろうハイヒール

おだやかに席ゆずりつつ照れている

絵手紙のはみ出た元氣埋まる溝

高槻市 大崎 侑 子

今にして及ばぬ亡母の知恵袋

フセインは袋の鼠だったはず

残された月日気ままに過したい

玉の輿 玉の基準は無いらしい

高槻市 田 中 初 恵

揺れてますあなたに小石投げられて

押売りを冷やかしている昼の魔女

慇懃に探り合うてる腹の底

パンドラの壺へ懺悔を封じこめ

寝屋川市 岡 本 勲

田んぼごと盗まれ寒い秋祭り

赤トンボ今頃どこへ三木露風

もう少し温度下げてと泣く地球

不景気の風をケチらず虎ファン

羽曳野市 森 下 一 知

用心に部屋のテレビは点けて出る

中間の椅子で繋ぎに徹し切る

罵りを覚悟で通う馬の骨

知恵袋膨れて帰る回り道

羽曳野市 永田章司

京の街上がる下がるで道迷い
年賀状元旦に書く頑固者
去り際にポツリ一言好きだった
四十七士総理だったらどう裁く

羽曳野市 吉村久仁雄

追う夢を捨てると酒が優し過ぎ
各停で帰郷楽しむ道の駅
児に還る父に童話を聞かす夜
文才を旅にもらってハガキ書く

東大阪市 米田志津子

フセインの隠れ家あわれとらえられ
ストレスは溜めないように晩酌す
師走の風甲辰さんの猿ゆれて
全身にパワーひろがるルミナリエ

東大阪市 小川賀世子

シクラメンの誘いに乗っている財布
部屋中の花の吐息を聞いている
包み解く手順も楽しおむつ替え
聞き流すことにも馴れて六十路坂

八尾市 笹倉ひろし

法善寺明るさ戻る下駄の音
デパ地下は全て揃うと手抜き族
スーパのチラスはデフレ持続気味
万歩計いつも約束破られる

八尾市 脇俊子

一粒の山椒はピリリ意地がある
ジャンボくじ弾む心の夢拾う
初雪で弾む童の雪だるま
美しい敬語が昼寝ノックする

八尾市 田中トシエ

年玉で孫の笑顔を買わされる
歯車の雑音を消すフルムーン
旅の宿 語尾のやさしい国訛り
言い訳の建て前論で化粧する

大阪府 神野千恵子

少しずつ未練残して繋ぐ明日
流行はインフルエンザも先取りし
還暦でかわいい魔女の仲間入り
近づいて火星がゆっくりせよと言ひ

大阪府 藤井郁代

足腰の痛み消し去り初詣で
しがらみを洗い流して年あらた
節分の豆に平和の願い込め
喜寿近し日向ぼっこの暇はない

大阪府 小栢こずえ

人に会うただそれだけで祭り好き
わからない法話じっくり聞いている
そこそこに相槌だけは打っておく
お世辞など待たず自分で褒めておく

神戸市 木村 忠義

どう書こうとも冬という字は寒し

よく道を聞かれ散歩に地図が要る

大笑い皆がおんなじ顔になる

尼崎市 桑原 東園

生き甲斐を見付けた胸に虹が出る

お引き受けてから悩むお人好し

この美味さ思い出します母の味

尼崎市 古川 正子

山茶花の賑やかに咲く冬の風

鰻丼を一人作って食べてます

宵やみの丸い月みて立ちどまる

三田市 辻 開子

やせている年金さらにやせるのか

新年は三猿と決めひと呼吸

年金者ポーターナス記事がちらついで

西脇市 七反田 順子

国産の味を知ってる舌の先

幸せは感性だけで生きている

柿熟れて満腹だとか鳥も来ず

兵庫県 黒崎 美紗子

楽しみを明日へひかえておやつ買う

来年も生きてるつもり種を蒔く

寒空に木の芽生きいき陽をあびる

兵庫 岩本 美緒子

夢を追う目線の位置にある絵の具

七十九と脅す暦の歳の数

イルミネーション小雪が欲しい鐘の音

夕映えに彩とりもどす暮れもみじ

燻し銀の演技主役を引き立てる

童謡も小節がまわる演歌歌手

生駒市 小西 稔

黒髪を捨てて茶髪の現代子

煙突が無くなりサンタ立ちどまり

新年のお参り前にネットする

檀原市 藤 永 実千代

競りの値は袋の中の指が決め

血糖値飴玉一つ見逃さず

名で呼べば何故か返事がすぐに来る

奈良県 南海 美知夫

損得にこだわり続け老いてゆく

生れつきセンスがなくてどじで生き

ライバルと仲良くラーメンすすすつてる

和歌山市 根田 よしこ

もうちよつと気楽に生きてみようかな

貫い風呂何かほっこりした昔

長寿とは嬉しくもあり淋しくも

和歌山県 森 下 順 子

時々は亡夫の下着干しておく
海荒れて拉致の家族に長い冬

あやかつて儲けていますクリスマス

和歌山県 村 中 悦 男

肅々と元旦祝う古い二人

ど忘れを二人笑顔でかばい合い
性分とわかつて妻にさからわず

和歌山県 辻 内 次 根

失敗の汗を次回の糧にする

握られて安定剤になる温み

餅投げの過疎でなかつた人の数

鳥取市 西 尾 敬 之 介

とれとれの活きのいい蟹旬を食う

連れだつて旅に出てみる老いの友

柗席に力士の汗が降り注ぐ

鳥取市 近 藤 秋 星

俺は俺今年も俺のドラマ描く

カレンダーもうめくれれない十二月

新年へ夢をつないで初日の出

鳥取市 大 坪 天 涯

愛しさを増してふたりで歩く道

笑顔っていいな利那の天国だ

眠りから覚めると深い森になる

鳥取市 谷 岡 清 子

エンジンをかけても記憶間に合わず

大欠伸今年の憂さを掃き捨てる

初日の出幸せ祈る福寿草

倉吉市 酒 井 芙 美 子

古稀迎え楽しい趣味が一つふえ

これからは三猿になり気を楽に

山分けをしたいが出来ぬ山を持ち

倉吉市 前 田 喜 美 子

木枯らしに落葉生きいき走り出す

百ワット劣らぬ笑顔の君がいる

繋がれた犬を思えば愚痴言えぬ

米子市 池 尾 保 子

にっこりに乗せられて買う松葉ガニ

寝て治るそんな若さにもどりたい

都合よく聞えなかつた耳がある

米子市 小 塩 智 加 恵

ブランドの小さな財布持つゆとり

二勇士の帰還に涙とめどなく

募金箱心の気持ち差し上げる

米子市 猪 森 ス ミ エ

おふくろの味は逃がさぬ換気扇

覗いても振つても徳利空っぽだ

三日月にちよいと羽衣掛けてある

晩酌に里の名物顔を出す

耳朶を引っ張り福を待つ私

松井さん暗い世相に灯をともし

鳥取県 岩崎和子

寄り道をしたくて手土産用意する

さっそうを心でだけ歩いてる

幸の日々のおとずれ手を合わす

鳥取県 毎田信翁

深情けことわり切れず後で揉め

大根に浸みた味噌あじ亡母思う

よい出合い白髪夫婦続けてる

鳥取県 岡村孝明

居間にある父の匂いのする机

思い出の品で一杯古机

捨てるのをためらっている古机

鳥取県 橋谷静江

金魚鉢洗う思案をする師走

暖房は炬燵居眠りするによし

北風の音 波の声村包む

鳥取県 竹信照彦

一日のタバコ六本だけにする

不況には経済学も役立たぬ

美しい女性にいつも片思い

鳥取県 西原真一

絵葉書で旬の果物送る友

貧乏神 了見狭い道歩く

海を背に潮騒を聞く砂の塔

鳥取県 鈴木一弘

干柿のおいしさ風と太陽と

テレビから伝わる雪の寒いこと

今日もまた涙と一緒に花手桶

松江市 山根邦代

食洗機 洗濯機あり妻もいる

他人ならもっと優しい声かける

留守ですか家も心も開け放ち

松江市 松浦登志子

余生までついて来たがる悪い癖

お茶会が済んで作法が空を舞い

若人に負けず劣らずお洒落する

出雲市 荒木英子

秋晴れに嬉しくなって散歩する

白い壁柿ののれんがよく似合う

恋すれば傷が重なる若き日の

出雲市 梅 ミツエ

何時までも若い気膝が笑い出す

賀状から消える癖字に手が止まる

神のサミット終れば里は冬支度

出雲市 加藤スズコ

安来市 原 煩惱鬼

学友の絆が続く葬の列
骨を抱く倅を神は見てくれぬ
歳重ねても僕はなお青春だ

島根県 毛利 幸

散歩道落葉奏でて秋を踏み

古里の心の土産山と川

ひたむきな努力につける大きい実

島根県 菅田 かつ子

合格へほっと一息たまご飯

窓際へ休暇上げると肩たたき

がらくたを集めた指の強みかな

唐津市 岩崎 實

まだ先だが明日に迫ってる

寝転べば落葉の山へ村の音

イラクより無言の帰国涙する

シドニー 三谷 たん吉

ためらわずウソつき通しよく眠る

来世もこんなもんなら遠慮する

何がどう英雄の死と犬死にと

シドニー 坂上 のり子

息凝らし闇夜の音の行方追う

花とりどり顔見えて見ると競い咲く

英語の子アカンベーって何と聞く

東かがわ市 向山 治延

晴れた夜はウイנקをする星もある
同窓会酒が言わせた裏話
尻長の人にはそつと箒立て

高知県 貞岡 佐紀子

この辺でリセットしたい年の暮れ

とにかくも師走今年も無事だった

読まないが般若心経置いてある

宜野湾市 杉谷 一栄

宙に舞うにぎりこぶしを解いた指

夢枕寝付き良いのが自慢かも

沖縄も冬があるよと言う寒さ

青森県 富士 トキ

雪しんしん今頃兄はいずこまで(兄が逝く 3句)

師走と言う気忙しい中兄が逝く

初雪に乗って天国すべりこみ

秋田県 湊 修水

祝盃をあげてほどよい猿になる

お隣がまた遠くなる雪囲い

気がつけば翁とよばれる歳となり

武蔵野市 亀井 円女

愛した亡夫はたで食う虫でありました

足の爪 我が手で切れるありがたさ

お人柄あふれていますその笑顔

横浜市 石原三郎

躓いた石を蹴つたらまた転び
餌値上げ池の金魚に知らせとく
けちけちと地獄の鬼に供えとく

静岡市 中西雅

空白が 一気に埋まる日記帳
人生は川の流れに似る希望
蟻地獄雲がじわじわ遠くなる

大阪市 平井露芳

コンピューターに頼ると予報当らない
ケーキ用苺で暮れも忙しい
淀川の水で垢抜けする不思議

大阪市 吉内タカ子

大阪弁話す講演気がやすむ
留守番で羽根も伸ばせず秋の暮れ
つじつまの合わぬ夫婦の別座敷

大阪市 井丸昌紀

朝刊が遅れ会社も遅刻する
名前なぞ雲は頓着しないだろ
一片の綿雲おーいどこへ行く

大阪市 中村トミノ

傘寿過ぎ賀状書けたる己が幸
一日の重み感じる八十路坂
傘寿過ぎ夢夢夢と考える

池田市 多田契子

熱燗に待ってましたと舌騒ぐ
コスモスに肥満は嫌と首振られ
ときめいて一人演じる夢芝居

泉佐野市 備後三代子

里芋を炊いたと嫁の料理好き
大あくび誰に遠慮もないふたり
夫婦して生前戒名たまわりぬ

柏原市 伴洋子

潮みちて女が書いた離縁状
憧れはあこがれのまま胸の奥
棚ぼたのチャンス何やらきな臭い

交野市 田岡九好

交番におまわり居らぬ神無月
ベスト着て腕の寒さの時雨かな
ひめゆりの塔に涙が噴きこぼれ

門真市 矢阪英雄

シナリオを自身で書けど時間ずれ
自分さえ心おさめて丸い顔
一人来て一人で帰る暗い夜

河内長野市 内海綾乃

散る前の寂しさがある銀杏達
当たらないと思いつ並ぶジャンボくじ
杖つかず歩いていたら夢の中

岸和田市 坂口英雄

へそくりの論吉も去った虎セー

リストラで靴も重たい職さがし

たつぷりと税金飲んで下手な唄

岸和田市 亀井皎月

美人だが色気がなくて素っ気ない

ふり向けば紆余曲折に消える里

郷愁が湧いたら来いと村の橋

岸和田市 堤 檜代

抜け目あるあなたにホッとさせられる

不意をつくブツシユ訪問兵嘩然

小泉さん我が子イラクにやれますか

岸和田市 森元ふみよ

停電でパソコンただの箱となり

パラサイト親に胡麻する抜け目なさ

形より味の良いのが自家菜園

堺市 荻野像山

元旦の計が侘しい年の暮れ

欲しかったケイタイ持てば用がない

乗る人がなくてリストラされたバス

堺市 川盛龍三

割り勘と聞いて今夜も飲み過ぎた

年金が狂うニュースに気も狂う

晩飯のビールは妻の愚痴も飲む

堺市 大久保伸子

歳ですと言いつつ派手な服を選び

がむしゃらに歩いてみたい雨の中

シヨッピング肩こり頭痛どこへやら

高槻市 安田忠子

太鼓の音お腹に響く同期会

生活がリズムにのつた孫の守

何もかも止めて専業主婦となり

高槻市 瀧本 激ま

携帯に電話ボックス乗っ取られ

古希過ぎてパソコン携帯買いました

爪痕の余白が光る秋の朝

高槻市 執行稲子

塩貰い浅蜷いきいき泡を吐き

楽天家無くて七癖直さない

目線から外されません子の行方

豊中市 藤井則彦

七難も隠しおおせぬ年恰好

羽毛布団寄り添う妻に掛けてやり

偏屈が勲章になる芸術家

寝屋川市 中川恵香

宝くじ当らぬくじを引き当てる

上げ下げの言葉で彼方に絡み付く

日出ずる国今を見据える富士の山

初恋の人の悲報や里遠し

枚方市 大昇 隆 広

木や苔の維持費生み出す巫女のお店
物の無いころ支え合う愛があり

枚方市 二宮 紫 鳳

還暦へ赤いセーター元氣出せ

満ちたりた酔いの寝顔は六十歳

嫁姑 合作弁当もみじ狩り

枚方市 莊 司 弘 之

もう少し祝つてもよい建国日

右派と左派どちらか引くと世は平和

Gパンでお猿のような尻を見せ

枚方市 小 川 良 吉

不条理ね弱者ばかりが泣くニュース

旧友に元氣と握手名が出ない

タレントに握手しくじり照れ笑い

藤井寺市 吉 田 喜代子

一盛りのりんごに秋は深くなる

床の間の松竹梅の自己主張

遺言書に今の私を書いて置く

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

青春の名残りをのせて賀状来る

散歩道冬の野辺にも花暦

水仙を抱いて亡母にあいに行く

荒波に揉まれた石は角が取れ

藤井寺市 喜 島 芳 江

ああ言えばこう言う孫も家系かも

その胸に閉ざした悩み聞いてやり

藤井寺市 俣 野 登志子

伴侶得て独身貴族主婦

貝になり七十五日待つ噂

ドアを出る背へ小言が追つかける

藤井寺市 西 村 栄 一

胸の垢一度洗濯したいけど

失恋は心のキズとあきらめて

透明な心に染まる独り旅

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

立ち止まれば崩れるような年の暮れ

せつかは親ゆずりだと自慢する

新しいこよみとバトンタッチする

藤井寺市 鈴 木 いさお

フルムーン苦勞の妻へプレゼント

多分この坂も越えたる山頭火

傷心を癒す旅立ち船にする

箕面市 寺 井 柳 童

老々の身に美しいボケの花

枯葉きくイブモンタンと二人きり

くすぐれば笑うロボット今に出来

かたつむりのような家でも遺言状
八尾市 中島 春江

不景気でかじられた膝痛みだし
父の文余白に書かぬ思い見ゆ

八尾市 寺川 肇

正解を蹴って男の意地を見せ
乗り継ぎへ夢が踏み出す二人旅
言うべきか躊躇しながら一呼吸

八尾市 西川 義明

拉致の子の弾む足音待つ大地
寝言にも六甲おろし歌ってた
初詣で 柄杓に老いの手がのびる

八尾市 平川 幸枝

イガ栗の才気の棘が絵を拒む
子の才能わが財産と育ててる
弾む日があって仏飯干からびる

羽曳野市 仲谷 真一

新春を笑顔で迎える有難さ
アリバイを細工するほどボロが出る
平和へのメッセージまた太くなる

東大阪市 今岡 真人

介護には金を惜しまぬわれ傘寿
吟詠にまだ魂は抜けとらぬ
戦の絶えぬこの世を月照らす

拘りがチャンスを逃す影法師
星条旗聞いたかテロに泣く師走
後もどり出来ぬ人生落葉ふむ

大阪府 高木 道子

谷川の散り浮く紅葉秋を抱く
無農薬虫食い野菜売れ残り
せせらぎに顔くしゃくしゃのお月様

大阪府 畑中 節子

第11回 井笠川柳会笠岡誌上大会
薬 ひこばえ

課題 「結ぶ」 「剥ぐ」
京藤 大雄 梶川雄次郎
和田 宏 共選 卜部 晴美 共選
福島 直球 西出 楓楽

応募料 1000円 (定額小為替) 発表誌送付
応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句(計4
句)を列記。郵便番号・住所・氏名・
柳名・電話番号・所属柳社名を明記
(全てにフリガナを付ける)

締切 平成16年2月20日(金)
投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会宛

TEL 0865-63-5858 FAX 0865-63-6131
お問い合わせは 戸田さだお迄

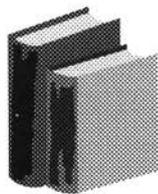
賞品 課題1位には石碑贈呈(2名)
(本人希望句・1年以内建立)
3才に粗品呈(句碑建立者を除く)

会員募集 年会費2000円(年4回誌呈)

10月10日
(日曜日)

川柳塔創刊八十周年記念
川柳大会並びに第十回川柳塔まつり

心に残る一冊



(順不同)

八月の本

川端 一步

定年退職を機に、八月はこの月にふさわしい本を必ず読もうと心に決めた。

その夏、見つけたのが『娘よ、ここが長崎です』だった。

表紙に作者の筒井茅乃さんは、永井隆博士の遺児とあり、小学中級以上むきで字も大きくルビも打つてある。一も二もなくこの本を選んだ。遅読の私が一夜で読み終え、何度も感動で胸を熱くした。

この本は作者の茅乃さんが中学生になった娘さんを連れて故郷の長崎を訪ね、原爆資料

館など見学することから始まり、長崎の原爆で家族や友だちなど多くの長崎市民が悲惨な被害にあったことを、作者の生活を追いついて語っていく話である。

読んでいく中になんかの間に主人公の茅乃さんになって、原爆のおそろしさを訴える語り部になってしまふ。

翌年、友だちグループで九州二泊三日の旅をした。観光バスは三日とも同じドライバーとガイドさんだった。

最後の日、いよいよあと三十分で空港に着く時間になった時、ガイドさんは「先程は永井先生が住んでおられた如己堂を見ていただきましたが、永井先生の遺言を（披露します）と語じて読みはじめた。

『わがいとし子よ。』なんじの近き者を己

の如く愛すべし』そなたたちに遺す私の言葉はこの句をもって始めたい。…バスの中は私語が止みシーンとなった。五十分と経つうちに、あちこちからすすり泣きがおこり女性のほとんどがハンカチを目に当てた。男性もじっとこらえている。

二十分余の朗読が終わると大きい長い拍手がおこり、ほどなく空港に着いた。別れを惜しむガイドさんはポロポロと涙を流していた。彼女と握手した瞬間私も熱いものがこみあげて来た。『娘よ。…』とたどろり…。

わが青春の書

福士 慕情

書棚に少しセピア色になった一冊の本がある。新田次郎著『剣岳・点の記』である。

山が好きで暇があれば山を歩き、母に心配をかけていた時期、山仲間三人で立山連峰の縦走を試みた。勿論、目的は剣岳登頂である。困難を極めた山行ではあったが、なんとか目的は達成出来た。この登山の後、私は転職して測量の道を進むことになる。測量に従事してからは、山や海、川と自然の中で仕事をす

るせいか、登山と呼べるような山行からは遠ざかっていった。測量を主題にした小説は少なく、井上ひさし著『四万歩の男』と、この『剣岳・点の記』より私は知らない。

「あの山には未だかつて登った人はいないぞうだ。立山信仰の思想を大衆に理解させるために描かれた立山曼陀羅の中に、地獄の針の山として描かれているのが剣岳である。登ってはならないし、もし登っても帰れない山と信じられている」。また「弘法大師が草鞋三千足使っても登れない山」と言われ、当時、未踏峰とされていた剣岳へ上官の命を受けて、剣岳山頂へ三角点を設置すること、その頃出来始めた山岳会との登頂争いで話は進展していくが、私がこの剣岳を含めた他山や仕事で体験したこと、今では死語になりつつある測量用語、忘れ去られてゆく測量機器等、この本の中には私の青春がぎっしりと詰まっている。測量という地味で他人から脚光を浴びることもない仕事を私もまた、黙々と、しかも誇りを持ってやってきたのである。

主人公の率いる測量隊が未踏峰と呼ばれた剣岳に登頂を果たすのだが、その絶頂にはポロポロに錆びた「剣の穂先と錫杖の頭を発見、よほど名のある僧か行者が持ってきたように

思われた」とあるように、日本の高山は大概修験者によって登頂されているということである。三角点とは何か、点の記とは何か、字数の関係で記述出来ないのが残念である。

戦国武将の人間学

山口 光久

いろいろな歴史書の中でも戦国時代のものは特に面白く興味深い。特に心に残る一冊をあげるとすれば、童門冬二著『戦国武将の人間学』——リーダーにみる人の生かし方——である。武将は領地拡張のため戦いの連続である。戦国時代は抜きん出た才能を發揮した者のみが勝ち残り、天下を統一し号令することができた。それが織田信長であり、豊臣秀吉であり、徳川家康である。

特に、感銘を受けた信長と家康について、リーダーとしての人事管理、情報の収集分析と決断、そして人の生かし方について考える。信長が世に出る第一歩となったのが今川義元との桶狭間の合戦である。織田軍二十人に對し今川軍は四万人、勝ち負けは明らかであった。織田軍は城を枕に討ち死にしようとした。

定した。その時、梁田政綱という武士が悩みに悩んでいた信長に貴重な情報を申し出た。今川軍は桶狭間と田楽狭間に陣を構えていた。情報は桶狭間と田楽狭間の状況の違いと気象状況についてであった。信長はその情報を分析し、決断を下したのである。

その決断とは、田楽狭間に義元や大将、重臣が、桶狭間には一般の兵が集結している。気象状況を見計らって、田楽狭間だけをターゲットにして総攻撃をする——であった。

戦いに勝った信長は義元の首を取った毛利新助を第一の功労者とはせず、梁田政綱を第一の功労者として表彰した。

信長は情報がいかに重要であるかを恩賞という形で表したのである。

徳川家康は関ヶ原の合戦に先立ち、会津の上杉景勝を討つべく大軍を率いて東北に向かった。小山まで来たとき家康の陣にいた山内一豊に妻千代から大阪の情報（石田三成の工作の状況）が届いた。家康は情報を分析し、直ちに上方に引き返す、と断を下した。こうして関ヶ原の戦いが始まり家康は勝利した。

山内一豊が大名に立身し、土佐一國の領主になれたのは妻の功績と思われる。

現代社会のリーダーに求められている人事

管理、人の生かし方、情報の収集、分析と決断力、これらは戦国時代に学ぶこと大である。

心に癒しを

大内朝子

朝ごとの鏡に老いを見せつけられるこの頃、溜息を漏らすことが多くなりました。そんな時、手にするのがこの一冊『葉っぱのフレディ』です。この本はアメリカの著名な哲学者レオ・バスカリア博士が書いた、生涯でただ一冊の絵本だそうです。

ストーリーは葉っぱのフレディが春に生まれ、秋に枯葉となって土に還ってゆき、そして新しい葉っぱを生み出すという自然の営みを写真を交えながら書いた絵本です。この絵本を開くと自然と心が和み、老いること死ぬことへの恐怖から、ふっと逃れることが出来るのです。子供の心にかえってゆくような素直な気持ちになるのが不思議です。一枚の葉っぱを通して、人間の命の旅をやさしく教えてくれているようです。

産声をあげて以来の私の人生を振り返ると、さまざまなことがありました。フレディ

のように緑ゆたかにキラキラ輝いた頃もありました。葉っぱに私の人生を重ねて、読めば読むほど味わい深く心にしみてくるものがあります。気持ちが落ち込んだ時には、おまじないのように私を楽にしてくれます。

老いて死ぬ、それは自然なことなのだ。そして新しい命を育てる力になるのだと、希望さえ湧いてくるのです。この絵本に出会って二年くらいはたつてでしょう。思いだしたように手にする時の私の気持ちに、上手に寄り添ってくれるやさしい絵本です。

これからも折りにふれ、ひらひらこの絵本を捲りながら心に癒しを貰うことでしょう。

情感に、沁みる一冊

田岡九好

田辺聖子さんの『川柳でんでん太鼓』この一冊が私を川柳に引き入れた。田辺さんはこの他にも『古川柳おちほひろい』『道頓堀の雨に別れて以来なり』という、川柳関係の作品があるが、『川柳でんでん太鼓』は川柳の魅力、おいしさをターツと並べたショーウィンドーみたいな本である。

明治の川柳革新から昭和の六大家の紹介などはさらっと流して、もっぱら名作の紹介と鑑賞にあてている。川柳がそのまま章の見出しに使われて、それだけ読んでも面白い。

「大阪はよいところなり橋の雨」 水府

「ほんとうの僕ワイシャツを着たことも」 三窓

「熱高し相姦の藻の乱れ髪」 新子

「院長があかんいうてる独逸語で」 豆秋

「秋風に傷なきものはなかりけり」 薫風

こんな大好き。鶴彬さんはちよつとしんどいが田辺さんは、2章をこの人に割いている。

それからいよいよ「飲んでほし止めてもほしい酒をつぎ」(霞乃)「子よ妻よばらばらになれば浄土なり」(路郎)という章がある。

「更に私が好きなのは……」と田辺さんは言う。路郎師の「お父さんは不覚束なくも生きている」これである。私も大好きだ。この情感は身に沁みる。自分のことだから。

それから「雪しんしん猪の親子は谿を越え」(葉)「ファンタスティックな童画のような」と田辺さん。僕もそう思います。

「人恋えば淡き彩もつ雛あられ」(森中恵美子)そして「男皆阿呆に見えて売れ残り」

(山川阿茶) あはは。面白いですね。

「こんな人が一杯並んでいるんです。この本を読まないという手はありません。タハハと笑ってシンとなる。ほんとに川柳で面白いですね。」

「という僕は作句歴まだ二年、前たもつ先生の指導を受けている修行中の身、偉そうなことを言いました。ごめんなさい。」

聖子さんでん太鼓が縁となる 九好

『バカの壁』を読む

小川 注 湖

表紙の赤い帯に「話せばわかる」なんて大うそ！とあり、これは読み心を引き立てる。昭和七年五月、海軍青年将校らは、「話せばわかる」と説く犬養首相を、問答無用と射殺した五・一五事件である。この事件を機に軍部の政治的な進出が強まった。

著者は大学で痛感したことは「話してもわからない」者がいることである。「つまり自分が知りたくないことは自主的に情報を遮断し、壁をつくる。これも一種のバカの壁だ」という。

全編を通して、齒に衣着せぬ話に拍手を送りつつ読んだ。「機能主義と共同体」の項目は印象的だ。外務省の評価は一連の不祥事で地に落ちた。それを著者は「外交によって国益を守るというより、職員利益を一致団結して守ることが優先し、省共同体の中に二世、三世の世襲キャリアが多い。外務省は宮内庁と合併して儀典庁にし、ヒゲを生やした世襲高官がパーティーに招かれ、立派なテーブルマナーをすればよいでしょう」と書く。

昨年十一月、衆議院議員選挙があった。かつて民間起用の藤山愛一郎外務大臣は自分の外交姿勢を国民に問うため、次の総選挙に立候補し当選、外交の信任を得た。今回、民間外相は自分の外交姿勢を、選挙で国民に示し問うことをしなかった。また一國の経済を司る学者大臣も自分の政治信条が実験でないことを国民に示す選挙を見送り仁政に乏しい。

東大名譽教授の「東大のバカ学生」：「こんな学生が卒業し何年かしたら、偉いお医者さんだ」の話にはびつくり。精読して互いに話を通じ合わないのは「様々な壁に囲まれ、その壁が内側だけが自分の世界で、向こう側を見ない。向こう側が存在していることすらわかっていない」というのが貰った結論だ。

全八章、小項目九十五にまとめられた読み易い本だ。煙草一箱分を節約し、六八〇円で貰う常識は多い。まだ読んでいない方は超ベストセラー話題の本。一読をお薦めする。

「仁」を考える

富田 蘭 水

井上靖の「孔子」を読む機会を得た。孔子と言えば、誰しもすぐ論語、子曰くを思い浮かべる。この井上靖の孔子は、歴史小説である。読了してみても、その素晴らしさは格別で末長く心に残る本であった。

孔子が高弟と共に、春秋末期の戦乱の十四年間、亡命、遊説の旅におのれの信ずる道を説くため、乱れた中原を命がけて放浪する旅中での数々。そこで語る子の詞。いつ、どこで言った詞か、その時代背景は、実に読者には興味ぶかい。後に論語に収められる数々の名言を知る事により愛着がわいてくる。

架空の人物「えんきょう」によって孔子死後三十年余りの時、高弟、子路、子貢、顔回等も勿論いない時、えんきょう独りが生き残って、子と共、放浪した当時を、中国の孔子

研究家達が、えんきょうの庵を訪ねて、研究会を成し、子の詞の解明、質問などを通して、人間像に迫っていく筋である。

孔子の思想は、戦後の日本では、儒教道徳などの元、敬遠される憾があったが、現代再び孔子の正しい姿が認められつつあると聞いている。偉大なる聖人孔子。一口にいつて、論語の「仁」の道が孔子哲学の根幹と私は思っている。「天命」とか「知」とか数々あるが。子は、仁の字は、人偏に「二」を配している。人が二人、その間には守らねばならぬ規約的なものが生まれる。「思いやり」「相手の立場に立つて物を考える」即ち「仁」である。そして「二」には二種類、大きな仁（志士などへ）小さな仁（庶民）相手により違った仁の解き方をされた。

今の日本、社会、教育各々の場で、「思いやり」「相手の立場で考える」はどうであろう。モラルの低下、肉親から他人をめぐる殺人など、暗いニュースの悲劇は後を絶たぬ。八十代で書いた井上靖の絶筆となった孔子探究、人間像、師と弟子「えんきょう」に語らせる靖の論語はすばらしく現代に通ずる。「仁」を考える時、生きる力を与えられる小説である。

日本と日本人

穴 吹 尚 士

通勤電車の往復を中心に多数の本を読んだが、心に残る一冊は司馬遼太郎著『坂の上の雲』につきる。

日本という国の、日本人という人種の、健気さ、いじらしさ、哀しさが、明治という新しい時代を背景に、ありありと描きだされて

いる。
正岡子規を導入部に置き、秋山真之、好古兄弟を主人公にして、その他の群像達も自己一身を一つの目標に据え、全身全霊を挙げて邁進する、これが日本の礎であったことを物語っている。

今の日本を見て、今の日本人を見て、国が富み、他国の侮りを受けぬ立場に上り詰めて、日本草創の時代の日本人に対し、恥ずかしさを感じるのには私だけだろうか。

この本を初めて読んだのは、石油ショックの頃であったろうか。日本経済も私の勤める企業も危殆に瀕しており、いわゆる猛烈サラリーマンが昼夜を問わず、働きに働いた時代

であった。それだけに、自分自身をこれら明治の日本人に重ね合わせ、自身を叱咤激励した日々を懐かしく思う。

今、日本はイラク派兵や国家の体質の改革に揺れに揺れている。日本の運命の舵輪を握る人々が、かの明治人と同様な気概と資質を持つていられることを、切に願っている。

私を川柳に引き戻した句集

出 口 セツ子

私が川柳を始めたのは、昭和40年、橋高薫風先生が選者をしていらつしやつた某紙に初投句で掲載して頂き、毎週投句するようになりました。薫風先生に「俳句公論」を送って頂き句会へもお誘い頂いたのですが、そのころの私は故小寺正三先生の「俳句公論」の編集、発送のお手伝いをさせて頂き、編集部選という形で俳句の選句もさせて頂き、高校、大学の自治会も忙しく、新聞投句のみで過していました。

昭和58年、長男誕生で忙しくなり川柳と遠ざかっていた私を、もう一度、本気で川柳を

する気にさせてくれたのは、薫風先生が贈つて下さった『古稀薫風』でした。入院して時間のできた私は、久しぶりに朝日なわ柳壇へ投句したところ、すぐ薫風先生から謹呈と『古稀薫風』を送つて来て頂いた。十年以上も投句もせず、勝手にいた私を覚えていて下さつただけでも感激なのに『古稀薫風』を下さつた先生の優しさに触れ感動！

「檻の鶴又目を閉する外はなし」薫風先生が若い頃入院された時の句ですが、本当に窓一枚隔つた世界がとて早く感じられます。

「極月やわが父の死を立話」も昨年一月に父を亡くした私にグツとくる句です。

「生きるとは写経に続き賀状書く」も日頃無常観を感じながら、思いを上手に表現できないでいる私の核心を突かれたような感じで、どの句も底辺に愛と優しさのある句で、もう一度、私も本気で川柳を一生やりたいと思います。たった一句で良い、誰かの心に残る句を作りたい。と決心し、川柳塔の同人にさせて頂いた次第です。

優しさが胸に沁み入る師の句集 セツ子 この句集にはありませんが、私は薫風先生の「降る雪や貧しきものがまず隠れ」という句が大好きです。

立ちほだかる壁

山本蛙城

書店主が「百六十万部のベストセラー」だと言ふ『バカの壁』、著者は解剖学者の養老孟司氏である。

百六十万万という販売実績を一々検証するほど余裕はないし、ベストセラーだからと飛びつく理由はないが、この著者は『中央公論』という少し右臭いかなと思われる雑誌の中に連載の、「鎌倉傘張り日記」35でイラク派兵に納得いかないと敢然と書いていたのを思い出して読んでみた。

内容を簡単に言つてしまえば、人間のコミユニケーションにおける問題点の提示である。それを、脳の研究をしている科学者らしく脳の特性を説明しながら検証的な事例で哲学の領域に及んで話しかけていて分かり易い。イスラム原理主義と米国の例で見ると両者の間に『バカの壁』がたちはだかつているというのである。

この「バカ……」の用語について人権派と称される人は死語にしたがるかもしれないが

ここで言われる「バカ」とは例えば匠的職人が、道具が劣化したものを「バカになった」というのに似て、決して人間をあざけて使用しているわけではない。脳細胞は五感から得た情報を音速で、一細胞が千から万の数のニューロンで化学物質を出しアイデアを形成するが、好き嫌いがあつて嫌いな情報には働かない、知りたくないことには耳をかさない性格があり、これが「バカの壁」だといふ。

ここから川柳界に思いを転じることができ。伝統的本格派と詩性派の問題。難解派と分かり易い句派、面白い句派、面白くない句派。それぞれそつぽを向いていないか。極端にはサラ川は川柳にあらず論。さらに拡大すれば俳諧の共同始祖の事実を忘れたか峻別論。これらを時代は果たして「バカの壁」と見ないだろうか。(新潮新書、六八〇円)

クラウディア大奇蹟の愛

松本文子

戦争によって人生を翻弄された一人の男と二人の女の実話である。蜂谷彌三郎と久子の夫婦は生まれたばかりの久美子と平壤で終戦

を迎えるが、彌三郎はスパイ容疑でソ連軍に連行され、過酷な労働を強いられる。一方、妻の久子は一歳半の娘を背負い命がけで帰国、女手一つで子を育てながら夫の帰りを待つ。そのうちソ連ではベレストロイカが始まり、夫の消息も伝わってくる。クラウディアという女性に助けられ、その人と結婚しているとのこと。日本テレビ、NHK等々マスコミに取り上げられ大反響となった。そして取材班と共に彌三郎の弟、娘の久美子がロシアに渡り父と再会する。

お互いの実情を知り悩み苦しむが、クラウディアは彌三郎の帰国同意書を申請。一九九八年復権証明書も受理され、スパイ容疑も晴れ、無罪となった。薄っぺらな紙一枚で……。五十年もの年月を過ごし、多くの人たちが命を落としたというシベリア……。

鳥根県江津市に住む作家、村尾靖子氏はテレビで「クラウディアからの手紙」を観て、大きな衝撃を受けた。そして鳥取県気高町に住む彌三郎、久子夫妻に逢いに行ったのだ。

その想いをクラウディアに伝えるため、二〇〇二年ロシアに向かう。彼女に逢い、その後のことなどを纏めたのがこの本である。

先日、松江の友だちから電話が入った。ク

ラウディアが松江に来るといふ。命あるうちに再会させたいという、多くの善意が実を結んだのである。恋人に逢うために自分で編んだ黄色い帽子が美しかった。(新聞でご覧になった方も多いと思ふ)九十半ばのこの人たちの、この人生こそ祝福されるべきなのだ。そして切に思う。戦争はいけない！平和に勝る福祉はないのだと。

古典に学ぶもの

堂上泰女

私は最近、音楽でも読書でも古典を愛しています。古典には時代に流されない普遍性が感じられ、必ず感銘を受けるからです。

『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』『怒りの葡萄』『ファウスト』『二都物語』『車輪の下』『知と愛』等々、全てに感動してきました。中でも印象に残ったのは、スタンダール作の『赤と黒』です。

美貌と才知に長けた、貧しい木挽き職人の息子ジュリアン・ソレルが主人公ですが、誰もが思春期を持つ野心で、パリの上流社会にのし上がろうと、司祭を通じ知り合ったヴェ

リエールの町長レナール氏の夫人に近付きます。やがて愛し合い、夫人を利用してパリの上流階級に入りします。

そこで出会った侯爵の美貌の令嬢マチルダに近付き、恋の虜になります。周囲の抵抗に遇いつつ、やがて成功するかに見えた時、レナール夫人の書状が届き、ジュリアン・ソレルは逆上のあまり教会で夫人を撃ちます。幸い弾は外れ夫人はやがて健康を取り戻します。

犯人としてジュリアンは獄舎に繋がれ一人で冷静に自分を見詰めていきます。ここからが圧巻で、自分の過去に遭遇した数々の人々、地位権力に甘んじている多くの人、また心から純粹な愛を捧げてくれたレナール夫人、その人を撃とうとした自分の醜さ等々、冷静に自分を見詰めて、令嬢マチルダの懸命な命乞いの奔走を拒否して、マチルダに宿した子の養育をレナール夫人に託し、自ら死刑台の露と消えていく主人公に、人間としての強い誇り、愛、真心を大切にする生き方を学びました。その他、パール・バックの『大地』にも女の強さを教えられました。井上靖の『額田王』にも女の才能の魅力を学びました。

歴史小説では吉川英治の『三国史』を息もつかず一気読みをしました。やはり古典には深い趣があります。

忘れられた日本人

新家 完司

民俗学者である宮本常一が、昭和十四年から日本全国を歩き、各地の民間伝承を克明に記録した、いわば「ノンフィクション集」。

「対馬にて」「村の寄りあい」「名倉談義」「子供をさがす」「女の世間」「土佐源氏」「土佐寺川夜話」「梶田富五郎翁」「私の祖母」「世間師」「文字をもつ伝承者」等、十一の聞き書きを記録している。いずれも興味深い話ばかりだが、中でも秀逸なのが、土佐禰原（ゆすはら）の土地にて、橋の下のポロ小屋に住む盲目の老人から聞き書きした「土佐源氏」。この一章を読むだけでも、本書を手にする価値があるだろう。

若い頃に馬喰（ばくろう）をして世間を渡り歩いてきたという物賈いの老人が語る、出生、生い立ち、そして、成人してからの赤裸々な行状は、まさに、「事実ば小説より奇なり」という言葉そのものの、特に、「役人の奥さん」と「庄屋のおかたさま」という二人の女性との交わりの段は、衝撃的ではあるが、

にんげんの朴訥で正直な本能が美しい。

明治から大正時代にかけての、辺境の地という、まだまだ旧弊の残る社会の中での、無学で財産も無い一人の男、村社会の秩序からはみだしたアウトローの、生命力に溢れた生き方の記録は、ぬるま湯の生活に狎れきった軟弱な精神に、「もつと生きるエネルギーを出せ!」と、喝を入れてくれる。

なお、本書は岩波文庫にあり、坂本長利氏の一人芝居「土佐源氏」は、本書を元にして

源流に万葉集

丹後屋

肇

古い話で恐縮ですが、振り返って見ると、昭和二十三年は私にとって画期的な年でありました。旧制中学から旧制高校への最後の受験生となりましたが、ものの見事に失敗して、次こそはと雪辱に燃え、猛勉強を再開致しました。所が父の突然の死に遭い、進学を断念せざるを得ませんでした。

その受験勉強の中で、日本古典文学や漢詩文に触れて、文芸一般に興味を抱くようにな

りました。当時は敗戦後で、戦前と戦後の価値観がひっくり返り、多感な青春を迎えた私には、余りにも刺激過剰の時代であったと言えるでしょう。

大空襲で企業設備は殆ど破壊され、生き残った企業も戦地から復員する人々を優先的に受け入れて、今日に比すべき以上の就職難でありました。

しかし、幸運にも、知人の紹介があつて地方都市の郵便局に採用されることとなり、その職場で土屋文明選「アララギ」に投稿する先輩がいて、私もその影響を強く受けて作歌に専念するようになりました。「アララギ」の初入选が

父の喘息に利くというなめくじを
今宵尉にあてなく探す

それからは短歌に急速に傾斜してゆきました。斎藤茂吉の格調高い韻律の短歌に魅せられ、茂吉が昭和二十二年に発表した

灰燼の中より吾もフェニキスと

なりてし飛ばん小さけれども
関西の若手アララギグループが「フェニキス」誌を発刊し、新短歌運動を立ち上げ、その末席に私も加えられました。それは万葉集を軸に据えて、新しい時代の息吹を高くか

に歌い上げるものでした。

しかしながら、私個人の事情で自営業に転じ、その後長いブランクの末、十年前に長谷川淳さんに出会い、川柳の面白さを知らされ、くすぶっていた残り火が少しずつ燃えはじめました。それでも私の中の源流に万葉集が色濃く、今も地下水のように流れて、私を放そうとしないのであります。

満州唱歌もう一度

園山 多賀子

このほど大連に住んでいたという面識のない女性から『満州唱歌をもう一度』という、分厚い本が届いた。帯には「故郷を想う歌甦るあるとき」とある。満州唱歌といえバツと閃くのは主人の叔父「園山民平」のことである。驚いた。

叔父は東京音楽学校（現在の芸大）を出て、宮崎の女学校に勤め叔母と結婚。大正十一年に南満州教育会教科書編集部に派遣され渡満した。私も夫と共に昭和十二年から十八年まで大連に住んでいた。

当時、満州は内地より教育も生活もレベル

が高かったのだ。叔父は満州に住む子供たちに郷土に適した歌材を探すため、精力的に満州各地を回り、現地メロディーを採譜し数多くの満州唱歌を編曲したものである。満州国歌、娘々まつり、星ヶ浦、たかあしおどり、等々、彩り豊かで州内の校歌、寮歌はほとんど叔父の五線譜に載ったものである。

大連で音楽学校を主宰し、百人を越す生徒がレッスンを受けたと聞く。満州唱歌は異郷に暮らす日本人として心の拠り所だったのだ。戦後六十年近い歳月が流れ、すっかり資料もない。また度の過ぎた自虐中観に支配されていた戦後の教育のために、満州唱歌も封印されて幻の歌となりつつある。この機に当たり『満州唱歌をもう一度』は、かつて満州を故郷とした老齢の人達の心を温め潤すことだろう。

叔父は終戦後二十二年に宮崎に引き揚げ、宮崎音楽協会や宮崎管弦楽団等の指導に当たった。二百曲以上も民謡など採譜したという。県大賞賞も受け、終焉は音楽葬で見送られた。音楽に生涯を捧げた人である。

何時までも満州唱歌の生き続けることを希う。叔父の住んでいた南山麓、鏡の池の周辺、アカシヤの白い花：叔父の温顔が蘇ってくる。

信念は恐怖よりも強し

井上桂作

「忘却とは忘れざることなり」で始まる君の名は、主人公の真知子もさることながら、最初の「忘却」というタイトルにひかれたそうです。広辞苑によると、「心に記憶し保持したことが時間が経つにつれて、どのように忘れていくかを示す曲線を「忘却曲線または保持曲線」と述べています。歳をとるにしたがってこの曲線は下がっていくのが当然ですが、痴呆症になるのも困りものです。

旅をするときは、なにか心に残るものごと紀行文を良く書きますが、感心しながら観光旅行をするわりには、すぐ忘れてしまいます。その時々々の状況を熱心にメモするようになってから比較的スムーズに文を書けるようになりました。そうして短歌とか川柳をなかにはさんでおくと、なおさら記憶が蘇り楽しい思い出となります。

テレビは殆どニュースと相撲しか見ず、専ら読書で過ごしてきました。学生時代いくら読んでも理解できなかったのが、西田幾太郎

先生の『善の研究』でした。歳をとれば理解できると思ひ、書棚に大事に仕舞つておいたこの本を時間をかけて熟読しました。

ところが意外にも著者の言わんとすることはわかる気がしますが、例えば「善」とはなにか、説明しろと言われると説明できないのが残念です。

さらにもう一冊に残る本があります。ニユーヨークのキリスト教の牧師さんの書いた本で、日本語訳は「積極的な考え方の力」です。積極的に物事を考える習慣をつければ、信念は恐怖よりも強くなり、心配をかたづけ長く生きられるという教えました。

不幸にして交通事故にあひ、鞭打ち症で一年近く苦しみました。この本を読んでようやく寝られるようになりました。私はクリスチャンではありませんが、この本はバイブルとして今も大切に持っています。

氷壁

早川盛夫

井上靖著『氷壁』は昭和三十一年暮れから三十二年の夏にかけて、朝日新聞に連載され

たもので、著名な登山家である魚津恭太と小坂乙彦の、冬山での遭難をドラマ化した山岳小説である。

魚津と小坂はともに恋人への悩みを抱えており、この冬、冬期末登攀の前穂高東壁へアタックを試みるも、頂上ま近にトップをキープしていた小坂が、ナイロンザイルが切れて墜死する。当時、絶対切れないとされていたナイロンザイルが切れたことで、周囲はもとより専門家の間でもさまざまな憶測をよび、メーカーによるナイロンザイル衝撃実験などが行われ、再びナイロンザイルは切れないことが証明され魚津は窮地に立たされる。

小説はここから、恋人である美那子と小坂の妹かおるの三角関係のなかで、専門的な登山用語を交え、重々しいドラマとなつて展開していく。

登山家でもない井上靖は『氷壁』を書くために何度か穂高へ登り、嘉門治小屋を訪ねたり徳沢へ逗留し自らも岳へ登ることで、穂高岳を取り巻く峻険な岩場の描写を心掛けたものと思われる。

魚津は最も難しい登攀として恐れられていた飛騨側の瀧谷から穂高への単独登頂を計画、かおると徳沢で落ち合う約束をして東京

を発つ。ここからこの小説のクライマックスともいえる登攀が始まるが、前編の前穂高東壁での遭難描写と同様、岳人でないとい理解できない登山用語や、記録的な登攀手記を用いて読者に一種の緊張感と興奮を持続させる手法はさすがである。

魚津は落石のつづく瀧谷をD沢にとりつき、無謀とも思われる登攀をつづけ、大落石に遭つて死を遂げる。自殺行為にも等しい魚津の死によつて『氷壁』は完結している。私の愛読する書の一つである。

出世より山を選んだベシミスト 盛夫
定年へ埃を払う登山靴 〃

後世への最大遺物

田中正坊

はじめに本の名を書いておく。内村鑑三著『後世への最大遺物 デンマルク国の話』。

著となつているが、書き下ろしの著作ではなく、明治二十七年(1894)七月、箱根で催された夏期学校の講演記録で、昭和二十一年に岩波文庫に採録され、そのところに読んで感銘を受けたことを記憶している。

この講演は、著者が三十三歳の時に行ったものだが、まず、「人間に五十年の命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、この我々を育ててくれた山・河。これらに私は何も遺さずに死んでしまいたくはない。何かこの世に記念物を遺していきたい」と語りかける。

そして「後世へ遺すものの中で、まず第一番に大切なものがある。何であるかと言うと金です」と続け、金の必要を述べる。「しかし何人も金を貯める力を持っていない。それで金よりも良い遺物は何かと考えると見ますと、事業です」としてさまざま実例を挙げる。「それでも、私が金を貯めることもできず、また、社会が私に事業をすることを許さなければ、まだ一つ遺すものを持っている。それは私の思想です。文学をもって我々の考えを後世に遺すことができます」。

このあたりで私の心はグラリと動くが、著者はさらに続ける。「本を書くこともできず、物を教えることもできなければ、私は無用の人間として消えてしまわなければならぬのか」とし、「金も事業も思想も、後世への価値ある遺物ではあるが、最大遺物と言うことはできない」と断じ、次の言葉でしめくくる。「我々に後世に遺すものは、何はなかつとも

あの人はこの世の中に生きていた間は、真面目な生涯を送った人であると言われるだけの事を後世の人に遺したいと思います。このような「勇ましい高尚なる生涯」は、私には望むべくもないが、若い時にこの本の洗札を受けたことは、私の生涯を律した。せめて晩節を汚さずに生きることが、私の願いである。

郷土誌『上方』は私の宝物

早川 棲世

今でも時おり新聞紙などで「上方」という誌名を見かける。南木芳太郎という人が、家産を尽くし、一家ぐるみの努力で発行を続けられた戦前の郷土研究誌である。明治、大正、昭和の大阪を中心とする関西が、政治経済から市井の生活や風俗、さらには花街の噂話まで、あますところなく活写されていて、現在ではまことに貴重な史料とされている。

昭和六年一月一日創刊、経営や戦時における印刷事情との苦闘があり、刊行は昭和十九年ととだえている。その後空襲などにより、折角出版されたものの多くが散逸したが、それを惜しんで昭和四十四年から復刻されることになった。私が職場のプロジェクトチーム

に参加していた時、同僚の一人が突然「これ、君にあげる」とその復刻版全十二巻、一五一号分を机上にうす高く積み上げた。私は仰天し、そしてほんとうにうれしく思った。

罹災するまで、私の住いは大阪の旧市街にあったが、遠い遠い幼時のことと諸事記憶が定かでない。商家の風習、界隈における年中行事、旧蹟や葬祭の故事来歴など、本誌を読んで、はたと思いあたることが多い。東京とともにわが国の二極を占め、元氣だった頃の商都が彷彿とする。因みに南木さんは、私がいと同じ道修町で、葉種商を営んでおられ、編集はあくまで町人文化の伝統を顕彰することにあつたと思う。

愉快なのは、当時まだ幽霊や妖怪が生き残つていて、天満や江戸堀や長堀など、市内各地における祟りや化物やもののけの実話が紹介されている。通俗を厭わずして、学問的価値が高い。文芸の話もある。その中から

読むとすぐ投げ捨て、行く戎橋 路郎

子が生きてみればと思ふ天王寺

本誌復刻の賛同者として名を連ねた司馬遼太郎は、また無類の蔵書家で知られるが、大阪にある彼の記念館の壮大な書架には、復刻版全巻がきちんと蔵められている。

麻生路郎物語

(26)

— 六十一歳の情熱 —

東野大八

川柳雑誌復刊号(No二四〇)は、日本敗戦一年目の昭和二十一年八月号で世に出た。焦土の中の趣味的刊行物としては戦後第一号と自負してもよさそうである。

戦後のいわゆるカストリ雑誌時代は、終戦直後、チリ紙同様の仙花紙(仙貨紙とも泉貨紙とも書く)で、エロ・グロオンリーのラチもない卑俗な悪本が世に氾濫した。

見るからに粗悪で下卑た記事や印刷のB5版であるところから、粕取焼酎同様にマガイモノ、ニセモノの意をこめて、カストリ雑誌と呼称された。このカストリ雑誌は、昭和二十四年にピークを示し、二十六年におよんで消滅していく。この愚劣な大衆雑誌は、戦後日本のいわば恥部の象徴とされた。

昭和二十六年のこの種の雑本の消滅は、印刷用紙の生産が軌道に乗り、用紙の配給制が

撤廃されたことが転機となっているが、川雑はそのころすでに大型柳誌として本紙三十余頁を維持して本格軌道に乗っている。戦後復刊号のザラ紙八頁が嘘のようだ。復刊号より

笑いの復興運動(予告編)

笑いを忘れた国民の顔をジツとみているとなんだか淋しくなってくる。かつてはくだらないことにもゲラゲラ笑って、その軽薄さに顔をそむけたものであるが、戦時中の猿くつわが利き過ぎたのと、口をきいても腹が空くという現実には直面したので、相変らず笑いはない。イヤ、笑えないのかも知れないが、この儘捨てておいたら、人間の影を見ているような国民になってしまっただろう。

そこで私はお互いに大きく口を開いて笑う運動を近くおこすことにしたいと思つている。ムリに笑うことはばかっているかもしれ

ないが、柔道でも型から入って真技を發揮するところまで行くことを思うと、求めて笑つていよううちにホントに笑えるようになるにちがいない。人間の心の底には、必ず笑いの水が満々とたたえられているにちがいないから、私は地面へ穴をあけて、井戸水をポンプで吸い上げるように、国民を笑いの世界へ誘導する役目をつとめようと思つている。

(川柳雑誌・復刊号)

路郎が戦前から唱導しつづけた、川柳の社会化運動の主旨がここにあり、路郎は戦後の虚脱し、退廃と夢のない敗戦国日本に、彼自身、川柳の夢の拡大をそこに思い描いていたことがわかる。敗戦日本こそ、新しい笑いのエスプリに溢れた土壌でもあることをみてとつていたのである。

とにかく戦後は、文化に飢え新知識を渴望し、心のユトリを求める国民の欲求が、活字に向つて奔騰した観がある。実のところ、新聞、雑誌、一般刊行物とみれば、人々は眼の色を変えて殺到してきた。川雑復刊号の、川雑出版部と称する社告には「街の雑音(売切)」「大空(売切)」「人の一代(売切)」「累卵の遊び(売切)」「詩人複眼」売切の活字が眼につく。

こうしたなかで、終戦直後の資材難と欠乏生活の中にもかかわらず川雑は、「麻生路郎著・新川柳評鑑賞」(定価一五〇円)「戸田孤

蓬、麻生路郎鑑修・川柳二千六百年史」(定価八十銭)「戸倉普天著・普天隨筆」発刊の予告を出版部の名で出している。

「昭和二十一年八月不朽洞会理事長戸倉普天氏丹波へ帰郷のため辞任、後任は中島生々庵氏就任」(山雨楼メモ)

「昭和二十二年二月十日麻生路郎・岸本水府・中島生々庵三氏に大阪府知事から「浪華文芸賞」授与せらる。四月二十三日へ行脚、西本三笑居泊・金沢放送局から「手をさしのべる川柳」を放送。六月一日文芸賞受賞記念大会を不朽洞会主催で住吉の生根神社で。八月九日大阪府主催の文化夏期大学の講師として貝塚市で「川柳と生活」講述。川雑十月号に「三つの苦言」柳界の新鮮味を待望して「全国川柳大会私案、事後承諾について、中堅作家の脆弱性を執筆。十二月二日名古屋市中区催の「すげ笠社主催の全国川柳大会」に出席。三日新東海新聞主催の座談会に出席。BKから十二月二十九日「歳末のユーモア」を放送。葎乃夫人十一月十六日大和の三本松村に移らる、不朽洞山房(山荘)」(山雨楼メモ)

こうして川雑は着々と、戦前の面目をとり戻し、路郎の活躍も次第にあぶらが乗ってきた。昭和二十三年路郎は六十一歳になった。一六十一まだ情熱は燃えに燃え 路郎と詠んだ。

「ところが石井寿一大阪日日新聞社長がニマリ笑って「相手は二十七か八か」と言われた。私はこの思いがけない新解釈に一寸戸まどうたが、とつさに否定していた。

「この句は最近、私が還暦を迎えたので、今後の柳界に対していかに生きるかを句にしたのに過ぎない。この句の構成には恋情の意味はみじんも含まれていないのであるから誤解のないように」と私は大マジメで答えた。さよふこの頃なら、まあそんなところかな」と受け流すこともできたであろうが、なんしろその頃の私は言葉にベールを着せることを知らなかった。それは今でも持ち続けた私の若さである」(川柳雑誌No四四九・昭和記・路郎)

「戎橋筋のオメガで御還暦祝賀の集りが持たれたのは昨日のような気がするが十年になる。予想を遙かに上回った盛会に世話係が目を見詰まったり、当時の電力事情で懇親宴の最中停電となつて、ローソクの灯で祝盃をあけたり、その雑然たる中に参会者一同の親しみと愛情がみち溢れてほんとうに心から御健祥を寿ぐ雲囲気がひしひしと感ぜられた事が今日でははっきりと脳裡に浮んで来るのである。

真白い麻服の先生の後に、つましやかに葎乃奥様が續かれて会場に入つて来られると満堂破れるばかり、やがて「一六十一まだ情熱は燃えに燃え」という世紀の名句が発表せら

れて、あれから十年である」(川柳雑誌No三六二号・昭和32年7月・貞橋特集・中島生々庵)

不朽洞会永年の理事長中島生々庵は、昭和十四年の松坂俱樂部川柳部に入門、路郎門下の筆頭としてよく路郎逝去のその日まで、形影相付う労苦とともにした人物だが、昨年四月小石夫人とともに、柳道三十五年の名跡をつづる華麗なその作品と彩筆による「生々楽天」を刊行している。

路郎句碑の第一号は、この生々庵医博経宮の、中島小児科診療院後庭に建てられている。同院新築に祝意を表しての不朽洞会有志の手で昭和二十五年五月二十八日に建立された。小児科院にふさわしくその句は

— すべりんこ 親は涼しいとこで待ち

路郎

しかし、木碑のため破損甚だしく現存していない。

筆のついでに路郎の他の句碑についてふれておこう。路郎揮毫による句碑は四基で、その建立は昭和二十五年に三基、その翌年の二十六年に一基で、この両年に集中している。いわばこのことは、路郎と川雑の最盛期を示しているように思える。

路郎句碑第二号は、昭和二十五年八月三日奈良県宇陀郡三本松村(現室生村)上田翠光宅に建てられた。海拔五百米の山村で、葎乃の戦中疎開先で、麻生一家は「大和の山荘」

と呼んでいた。

「ここへ移ったとき、私は障子を押し開いて前方に折り重っている山又山の美にうたれ思わず、くちずさんだのが

一名も知らぬ山の起伏をうれしがり

路郎

であった」〔川柳雑誌No.二〇〇号〕

句碑は地元の石に彫られた。建立者は上田翠光で、その句を刻んだ碑も現存している。

第三の句碑は、岡山県久米郡久米南町。国鉄弓削駅前に建立された。

―俺に似よ 俺に似るなと子を思ひ

路郎

除幕式は昭和二十五年九月十七日でこの日西日本川柳大会が開かれ、百四十人が集り盛況で、地元の浜田久米雄の活躍が目立ったとある。建立のキモ入り役は丸山弓削平。

第四の句碑は岡山県和気郡吉永町福満の大森娯句楽居の前庭に建てられた。

―古くとも僕には仁義礼智信

路郎

「この句に盛られた思想が古いの新しいのと言つて見たところで、それは口頭の論議に過ぎない。むしろこの句境に沿つて、その生涯を貫くことが出来るとしたら、人生の幸福これにすぎないものなからうと今も信じる私なのである」

建立されたのは昭和二十六年四月二十二日

話をもとに還えそう。

路郎還暦祝賀川柳大会は、昭和二十三年七月十一日大阪市心齋橋筋戎橋オメガハウスで不朽洞会主催で開かれた。参加者二百九十一名（山雨楼）とある。稀有の盛況である。

燃えに燃える川柳への情熱に、路郎の活躍はつつき、山陽筋や九州一円を川柳行脚し、十一月には不朽洞山房（頓光寺）葎乃夫人疎開先）で徹宵句会（23人）まで行つてゐる。この年、年来の公私にわたる柳友岩崎柳路が逝つた。命日は十月三日。

「路郎師は川柳仙」と題し追憶を語られたが、痛惜の情は川雑誌面に溢れた」〔山雨楼メモ〕

柳路は、路郎の北支蒙疆の旅を斡旋した人物で、松野夫人とともに不朽洞会々友として格別の間柄にあつた。門下で柳号の中に路郎の「路」を用いてゐるのは彼だけである。もつともこの柳路は、麻生家とは別の意味で深い間柄にあつたようだ。

「純子は早くから岩崎柳路氏につれられて北支へ渡り、私達とはほとんど別な生活をしておりました」〔葎乃書簡〕

この長女純子は、大阪上福島の本屋時代の大正四年四月十七日の生まれ。

「私の結婚後、河盛彦三郎の後を継ぎ、河盛純子となる。河盛純子のちに杉生家に嫁して子無し、河盛彦三郎の家は絶家となる」

〔葎乃書簡〕

昭和二十四年、葎乃はながい疎開生活を切り十月末帰阪した。

「北川春巢さんの御力添えで、トラックを回して貰いようよう万代の家へ戻りました」〔葎乃書簡〕

「私は六十ぐらいで一応私の従来の仕事を取りあげるつもりでいたが、それが出来ずに七十になつてしまつた。このくいちがいはたしかに戦争が責任を持つてくれる筈である。その戦争も敗戦ではあつたが、私の人生に付加するものの少くなかつたことは疑う余地がない。それを考えると私の仕事の予定の上に十年の延長があつたとしても悔いることは少しもないと思つてゐる。

とはいうものこのころで一応けじめがつけた。そうした考え方が毎朝眼が覚めると私の頭を占領する。ではどうしたらよいのか、現在の煩わしいいろいろの糸を絶ち切る手段は―これは容易なワザではない。漂然と家を捨てる訳にもいかぬとしたらどうなるのか。（中略）どう考へてもこちらで多少の角度を変えたい。それは作家としてのもつともつと孤独性がほしい。（中略）私は解放されたい。そして私自身の芸術に生きることに、短詩界が少しでもよくなることに微力をつくすことに私の仕事を絞つていきたい」〔川柳雑誌No.三六三・昭和32路郎〕

愛染帖

波多野五楽庵選

東京都 やまぐち珠美

夫の恋 あれは螢火だったのか
銀杏が透けて炎を受け入れる

和歌山市 木本 朱夏

離れた指だからぬくもりが消えぬ
手探りで無明の坂を越えてきた

和歌山市 池 森子

花薄 風の行方を問ひ質す
いささかの志あり初暦

富田林市 村上ミツ子

手品師もビエロも冬の画布の中
風花とわたしの野外コンサート

八尾市 福井 桂香

絵に描けば白と黒との冬の道
影ぼうしわたしも君と同年

和歌山市 一戸 ツネ

絵皿から幽かに響くアウエマリア
妥協案冬の星座に問うてみる

尼崎市 内田美也子

影法師ブレイキばかりかけに出る
ドライにはなれず苦悶をくり返し

和歌山市 楠見 章子

ロスタイムやさしい毒に会いに行く
味のある詩をのせたい白い皿

鳥取県 土橋 螢

春用の男ひっぱり出してくる
ごめんなさいと謝れば春がくる

尼崎市 田辺 鹿太

迂回した方が得たと悟る歳
人間にゴールをくれたのは仏

弘前市 高橋 岳水

裏切らぬ土と契ってゆく余生
逢つて来た余韻を月と分ち合う

唐津市 井上 勝視

とめられぬ老化素直に受け止める
いい日だな花がきれいに映えて見え

西宮市 牧淵富喜子

思うこと一緒の時もあり夫婦
背に残ることはをくれた冬の雨

西宮市 西口いわゑ

煩惱に少々コシヨーふりかける
鏡とのバトル女の朝がくる

高知市 小川てるみ

羽曳野市 徳山みつこ

XYZもつれたままの風の街
幕引きをする人決めるジャンケンポン

大阪市 古今堂蕉子

ひとり芝居の幕がなかなか降ろせない
裏切った日から私も風の中

羽曳野市 吉川 寿美

哀しみの日々にも爪は伸びている
もしももしもと失敗重ねている無策

富田林市 中井 アキ

ことりともしないで届く喪のハガキ
足枷を取ると自信のない歩幅

西宮市 門谷たず子

不応なく風に頁を捲られる
愛されたバラなのだろう刺がない

大阪市 町田 達子

剪定の適期とやらが雪の中
裸木が主役になって十二月

大阪府 澤田 和重

寒々と私を待っていたお墓
過去未来みな呑みこんで影法師

和歌山市 西山 幸

柘榴はせて真つ赤な嘘を剥き出しに

豊中市 榎谷 郁子

和歌山市 桜井 千秀

弘前市 福士 慕情

弘前市 相馬 銀波

弘前市 斉藤 荔

和歌山市 吉村さち子

和歌山市 榎原 公子

涙金もらつて終る人生讀

大阪市

板東 倫子

日めくりをめくると手形返済日

砂川市

大橋 政良

致死量の一步手前を惚れ抜いて

和歌山市

古久保和子

てのひらに納まるほどの夢を抱く

和歌山市

松原 寿子

ゆずれない位置まで下がる縄梯子

松原市

小池しげお

深読みはしないようにと秋茄子

寝屋川市

籠島 恵子

妖艶なエロスを放つ午後のお窯

弘前市

櫻庭 順風

遺作展君の絶頂期が見える

藤井寺市

太田扶美代

備忘録兼ねた日記に反戦歌

八尾市

高杉 千歩

どっこいしよ夫婦揃って雪囲い

弘前市

中山 雅城

ぼろぼろの脛の補修をする老後

唐津市

坂本兵八郎

カーテンを開けて明日の絵を探す

唐津市

仁部 四郎

伏線にされた何時ぞやのほやき

京都市

都倉 求芽

人間のあかし諦めなどつかぬ

高槻市

乙倉 武史

水平線のような一直線が好き

鳥取県

西原 艶子

共犯にならぬ程度に知恵を貸す

鳥取県

上田 俊路

振り向けばやさしい風が肩叩く

鳥取市

福田 登美

欲ばり女女のイヤリングが寒い

寝屋川市

江口 度

せかせかと歩く男にえらが無い

黒石市

相馬 一花

カサブタを剥がして男勝負する

大和郡山市

坊農 柳弘

外は雪 今年の蕎麦を練つてい

愛媛県

中居 善信

することが笑い話になる白髪

尼崎市

春城武庫坊

整形外科大正生れがよく喋る

尼崎市

春城 年代

節分の鬼より怖い肩叩き

藤井寺市

中島 志洋

座禅して阿修羅を待つている女

和歌山市

上地登美代

神の名で銃を悲しいまで磨く

日立市

加藤 権悟

照らされているのも知らず踏む影絵

和歌山市

武本 碧

生きる日へ踏絵一枚ずつの刑

岡山県

山本 玉恵

肩幅がみんなちんだ背広たち

横浜市

金森 徳三

ぬくぬくの部屋で無精になるばかり

堺市

志田 千代

大声出し元気装う古時計

大阪市

前 たもつ

この世の華等身大に咲かせます

奈良県

渡辺 富子

自分史のページ行き交う瀬戸の海

米子市

林 瑞枝

方言も煮込んで温いぼたん鍋

三田市

北野 哲男

たわいない話が好きなの自在鉤

藤井寺市

高田美代子

女にも妻にもなれぬ紙人形

大和高田市

鍛原 千里

コスモスや我が青春の小津映画

交野市

田岡 九好

情念の火を掻き立てる冬薔薇

高槻市

左右田泰雄

貴方に逢うときれいな斑に変わります

出雲市

石倉美佐子

ふところ出番を待つているジョーカー

鳥取県

岩崎みさ江

あんなことこんな事まで上母慕情

松江市

安食 友子

励めはげめとストレスつくりにも励み

熊本県

高野 宵草

反骨の父の昔が遠過ぎる

和泉市

西岡 洛醉

追い過ぎた夢の隙間は時が埋め

西宮市

坪井 孝一

うるたえる事のぶざまを知っている

池田市

栗田 久子

八王子市 播本 充子
妻の鍋恨みつらみが吹きこぼれ

樺原市 安土 理恵
逆縁に母は祈りへとじ籠もる

武蔵野市 亀井 円女
許しておくれおどりの食いやら活づくり

和歌山県 中後 清史
なけなしの諭吉はたいて旅に出る

和歌山県 辻内 次根
五十年他国の雨となる郷里

竹原市 正畑 半覚
逝くことを考えてみたことがない

寝屋川市 坂上 高栄
ピストルを持てば射ちたくなる怖さ

米子市 木村富美子
五体満足しつかり生きている骨だ

鳥取県 谷口 次男
深夜族 体内時計が違うのか

和歌山県 福本 英子
また元の手造りになるお豆腐屋

横浜市 長島亜希子
妻も子も出かけベツトに話しかけ

鳥取市 田村 邦昭
空っぽの財布で春がまた逃げる

大阪市 三浦千津子
ライバルの動きに一喜一憂し

和歌山県 玉置 当代
傷ついた翼休める場所がない

鳥取市 夏目 一粋
体から欲とりだして溺れそう

堺市 山本 半銭
五体投地ままならぬ身の広懐悔

鳥取県 竹信 昭彦
申年は猿人らしく人らしく

東大阪市 北村 賢子
激瘦せへ怖い二文字がふとよぶる

唐津市 山口 高明
他人さまの銭を教えて今日も暮れ

富田林市 片岡智恵子
マニフェストの空念仏が票を釣る

八尾市 生嶋ますみ
パソコンを知らない指が土いじり

大阪市 岩崎 公誠
少々は軸がぶれても生きる駄馬

寝屋川市 太田とし子
買いたいナイ勿体ないナ宝くじ

鳥取県 佐伯 やゑ
ひたむきな誘い答えるベンがない

富田林市 大橋 鐘造
お互いに空気となつて支え合ふ

弘前市 岡本 花匠
砂時計リハピリの母りんご剥く

堺市 矢倉 五月
道楽の方で知名度高くなり

八尾市 田邊 浩三
定年後引き算知ったわが家計

滋賀県 中 宗明
本買って秋の夜長の準備する

和歌山県 青枝 鉄治
評判の塾で姑息な子を育て

四条畷市 吉岡 修
明日こそ言えると思うまで飲んだ

茨木市 藤井 正雄
歩み寄りやはり女の私から

米子市 青戸 田鶴
錆びた頭にいい聞かせよういい話

羽曳野市 酒井 一壺
いろいろと知つてだんだん怖くなり

唐津市 宗 水笑
ひやかしに値切つた罪で買わされる

鳥取市 徳田ひろこ
異分子も入り大きな輪ができる

愛媛県 花岡 順子
転んだら起きる明日のものがたり

姫路市 古川 奮水
オフィスから若妻になる市場籠

京都府 丹後屋 肇
叡山を借景してる物干場

出雲市 園山多賀子
笑つても泣いても川は淀まない

堺市 奥 時雄
チラツとだが客を峻別する目つき

尼崎市 長浜 美籠
年頭のプラン果せぬまま又至

寝屋川市 森 茜
わたくしを誘うロマンのおきどころ

西宮北口川柳会三十周年

記念川柳大会

とき 平成16年3月27日(土)

午前11時半開場・出句締切午後1時

ところ 西宮市民会館1階 大会議室

西宮市六湛寺町10-11

(電話)0798-331311

阪神電鉄西宮駅下車・市役所口から徒歩2分

お話し

川柳塔社名誉主幹 橋高 薫風氏

課題と選者(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)

「神」事前投句 川柳塔社 黒川 紫香選

「艶」 川柳塔社 西口いわえ選

「無心」 川柳塔社 西出 楓楽選

「根」 時の川柳社 小松原爽介選

「平和」 ふあうすと川柳社 泉 比呂中選

「ひととき」 番傘川柳本社 森中惠美子選

「チャンス」 川柳塔社 河内 天笑選

会費 2000円(軽食・記念品・発表誌)

事前投句締切 3月1日(月) 必着

懇親宴 大会終了後「華宮」にて5000円

投句先及び連絡先 〒663-8202

西宮市高畑町2-82-308 西口いわえ

(電話)0798-673740

主催 西宮北口川柳会

後援 川柳塔社

第28回全日本川柳2004年埼玉大会

日時 平成十六年六月十三日(日)午前10時開場

会場 埼玉会館 大ホール

〒330-0063 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-14

交通機関 JR京浜東北線、高崎線、宇都宮線

宿題 第一部(事前投句、四月十五日締切)

「爽やか」松岡 葉路選 「彩り」櫻石 隆子選

「助ける」天根 夢草選 「まごころ」小島 蘭幸選

ジュニア部門「小・中学生」

「さわやか」平田 朝子選 「助ける」米島 暁子選

「まごころ」国吉司朗選

3.5×18cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名

封筒に住所・氏名明記、投句料一〇〇〇円(定額

小為替・現金書留)同封して左記宛郵送のこと。

ジュニア部門は投句料無料

投句先 〒150-0004 大阪市北区天神橋二丁目北1-11

ステツブイン南森町七〇二

TEL 06(六三三)二二二〇 FAX 06(六三三)二四三三

郵便振替口座〇〇九七〇一九一三五七五

宿題 第二部(当日投句、十一時二十分締切)

「新鮮」内田 昌波選 「都会」田頭 良子選

「心機一転」川俣 秀夫選

各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者 吉岡 龍城・今川 乱魚・塩見 草映

磯野いさむ・大野 風柳・竹本飄太郎

会費 四〇〇〇円(昼食・記念品含む)

表彰予定 文部科学大臣奨励賞・参議院議長賞他

前夜祭

平成十六年六月十二日(土)午後六時

会場 ホテル・プリランテ武蔵野

〒330-0063 さいたま市中央区新都心2-1-2

交通 JR京浜東北線、高崎線、宇都宮線

会費 八、〇〇〇円(立食、アトラクショ)

宿泊 ☆ホテル・プリランテ武蔵野

シングル 九、〇〇〇円 ツイン 一六、〇〇〇円 2名分

和室(2〜4名) 宿泊人数により料金の差があります。

希望者は事務局まで事前にご連絡下さい。料金は一万円

前後(2室)あります。

☆ラフレ・さいたま(簡保加入者施設)

シングル 九、四〇〇円 ツイン 一七、四〇〇円 2名分

◆簡易保険加入者本人(70歳以上は旧保険でも可)は事前

に証明書コピーの提出があれば2000円割引になります。

宿泊日にご返金いたします。

観光 蔵の町川越観光(近畿日本ツーリスト)

日時 平成十六年六月十二日12時〜17時 集合

ホテル・プリランテ武蔵野12時 会費 五、〇〇〇円

(昼食なし)各自昼食を済ませてご乗車下さい。

申し込み35名以下の場合観光を中止します。

前夜祭・宿泊・観光の申し込み締切は四月十五日

必着で、宿泊は先着順で満員しだい締切ます。

◇別紙申込書に内容記入の上、合計金額を郵便振替

口座へご入金下さい。

申込先 川口市川口一三一―一四〇一

TEL・FAX 松岡 葉路方 日川協埼玉大会事務局宛

F332-0015 〒332-0015 日川協埼玉大会事務局宛

送金先 郵便振替 〇〇一九〇一(二)五九三六

日川協埼玉大会事務局 宛

誹風柳多留二四篇研究 63

大野 秀二・橋本 秀信
小栗 清吾・粕谷 長生
山田 昭夫・伊吹 和男

清 博美・佐藤 要人

488 ぜんひやうハもくさのからがねはんぎやう

大野 涅槃経、正しくは大般涅槃経。原始仏教の経典。釈迦の晩年から死没前後までを伝説的に述べながら、仏教の基本的立場を明らかにする。

元禄十四年十二月十四日に大石内蔵助良雄ら赤穂の浪士四十七名が吉良邸に討入り、吉良上野介義央の首をあげ、泉岳寺に引上げた。幕府は処分が決まるまで細川家をはじめ四家に預けた。切腹となったのは翌年の二月四日である。二月二日に据える灸は二日灸といわれ、その効験が著しいと信じられていた。二日灸に使用した切りもぐさの巻紙に涅槃経が使われていた。涅槃は釈迦の入滅のことであ

り、切りもぐさの巻紙に涅槃経がつかわれていたのが、後で考えてみると切腹の処分となる前兆であった、というのである。

ぜんひやうハ念仏をさくやしきがえ

二〇九

ぜんひやうハ死人シの山の辺をこし

一三三

小栗 灸の効なく病人が亡くなってしまった。考えてみると、もぐさの巻紙が涅槃経の反故だったというのではないか。労咳又は娘の厄年までいつていいかどうか。

清 小栗説贊。それだけの句でしよう。

佐藤 小栗説贊。

489 あみだを売てしんそうを買いに行き

大野 阿弥陀は吉原の朝日如来の事。(川柳大辞典)朝日如来は、江戸吉原新町の丸屋方に安置されていた恵心の作といわれる弥陀像。

吉原の朝日如来を拜んでくると言って出掛けてきたが、それは託ついで新造を買って遊んでいる。新造の客は老人が多いので、これは年寄りであろう。売ると買うが縁語。

よし原ハ夜も旭をおがむ所

六二八

朝日を売て新造を昼間買ひ

六五二

朝日の利益新造の客ヲ呼び

二九二

清・佐藤 贊。

490 てんぐにあそぶ穴ほらいそかしさ

大野 人それぞれ遊ぶ内容は違うが、こと遊びにかけては熱中し、忙しいことを詠んだ句と解したが……。またはこういう穴を掘る遊びなどがあつたのであろうか。

穴から女遊びのことも考えたがよくわかりません。

小栗 「穴」とは「忙しい」となると年末の門松の穴掘りだと思ふ。はつきりしない句だが、門松の穴も掘り、年の市にかこつけて遊びに行く計略も考えて、それぞれ穴を掘る算段をする年の暮というようなことか。

橋本 のろわずに穴二ツほらいそがしき

二ツ掘ル穴ハ齡の一里づか

四五〇
六七三

門ト松は甲にせて穴を掘り

三〇四

のように、穴を掘る類句は、小栗説のように門松の穴が多い。「遊ぶあな」がもう一つしつくりこないが、年が明ければ債鬼も来すに楽しい休みになるというのであろう。

清 「穴」と「忙しさ」で、小栗・橋本説贊。

「遊ぶ」には遊技・酒宴を楽しむなどの意もあり、家庭で行う正月の行事（カルタ・宝引きなどの小博奕、酒などなど）を遊ぶと表現したのではなからうか。

佐藤 「忙しさ」で年末の情景と思う。小栗説・橋本説贊。

491 ろうへ顔出して持参を母すゝめ

大野 道楽が過ぎて座敷年に入れられた息子に対して、母親が持参嫁をすすめた。嫁を持たせれば道楽は止むと思つてのことであらうが、持参嫁は持参金を持つてくるので、それで道楽で使つた穴埋めをし、商売の立て直しをする魂胆があるとは考え過ぎであらうか。

あばたとくしんで勘当ゆるされる 一四三九
親にたまされ持ちやるなととら仲間

傍四五

橋本 贊。類句二句との対比妙。けれど持参嫁では治るまい。

清 道楽をやめさせるだけの目的なら、美人の嫁の方がいい。持参をすすめるのは傾けた家の建て直しを計るためである。礎橋引用例句第一句目の直前の状況。

佐藤 同右。

492 美しい姫から財布持つて居る

大野 本句の嫁は美人の裸嫁であるので、財布は持つているが、中身はない。つまり空財布を持つていると解した。

橋本 同。裸↓所持金なしから財布としたのであろう。

清・佐藤 贊。

493 三年過てあま店へ縁につき

大野 尼店は江戸日本橋北詰の地。近世初頭、尼崎又右衛門の拝領地で尼ヶ崎店、尼ヶ崎町の略称。漆器問屋が多かつた。（角川古語大辞典）

鎌倉の縁切寺で三年居て亭主と縁を切つてから尼店に縁付いたというのであろうが、三

年と尼店の関係がよくわからない。寺に入つ

ていたので単に尼と洒落ただけか。

小栗 贊。単に尼寺と尼店をかけただけの句と思う。

清 「三年」は東慶寺に在寺三年だけの意。

小栗説贊。

佐藤 同。

494 大黒ハぬすんでばちにならぬもの

大野 浅草歳の市に恵比須大黒の像を売る店から大黒を盗むと翌年の運が開けるといふ俗信があつた。大黒を盗んでも罪にならない。僧侶の妻を大黒というがこれと密通しても罪にならない。僧侶の妻帯が禁止されていたから罰にならないとも解せる。

表の意味は前説で、後説も背景にあると解するのが妥当か。

米式俵たもとへ入る運のよき 一四三七

大こくの外を目かけるわるいやつ 一八二七

問男といわれず和尚くやしがり 五〇二七

小栗 大黒像を盗んでもバチが当らぬ。

橋本 右同。罪にならないかどうかは判らないが、売る側は大目に見ていた。

清 礎前半説に贊。

佐藤 同前。

首香のむ

藤田 泰子選

順番が狂うと元に納まらぬ

景色が見たいので鈍行に乗ってみる

喪の屋根に物言いたげな半月よ

山茶花の道にたき火の跡はない

背伸びしてしつかり見えたものもある

これ以上妥協は出来ぬ切り取り線

始発駅達者で続くひとり旅

たかが紙袋されどもレイヴイトン

いつの間にか身に合っている隠れ蓑

喜びの五月もあつたよね落葉

玉子ほど大事にされてみたいもの

バス停の風つよさを忘れてた

愛と哀 振り分けにして荷を担ぐ

風邪三日女の祭りだと思っ

同じもの見つめゆつくり生きている

残照で踊る秋から冬の恋

花に水やってわたしを潤して

病葉を一つ落としてよみがえる

一本のルージュ間違いない女

八尾市 高杉 千歩

米子市 門脇 昴子

西宮市 門谷たす子

八尾市 村上ミツ子

西宮市 牧瀬富喜子

大阪市 三浦千津子

和歌山市 松尾 和香

堺市 矢倉 五月

橿原市 安土 理恵

橿原市 居谷真理子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

大和高田市 鍛原 千里

岡山県 山本 玉恵

鳥取市 岸本 孝子

箕面市 出口セツ子

富田林市 池 森子

和歌山市 西山 幸

和歌山市 武本 碧

西宮市 西口いわゑ

生きてます小さな鍋で愛を煮て

十三夜は恥じらい満月はみだら

こだわりの拭いきれない月の暈

ロートレック視界に実らない話

遣伝子に私の毒を一しずく

以下同文こころ辺りがボクの位置

乾かない涙こらえて遍路旅

キャンドルとツリーと夫の掌と

後戻りして空白を埋めている

表面は褪せてしまったけれど愛

物差しは何本持てばよいのやら

フリルヒラヒラ世を隠した花になる

傷ついた蕾へ息をかけている

私を選んだだけの人だった

母性愛くすぐるなで肩の男

真つ直ぐな答えをくれる茜雲

根付いたかやがて一本立ちになる

保護色を脱いでわたしの一人立ち

キラキラと拾われたくて光つてる

ラストページぼつと小さな花が咲く

ひらがなの丸さで生きるこの余生

神の駅出雲訛りが温かい

花畑で私のうつつが消えてゆく

しあわせ過ぎて低温火傷に気づかない

畳の縁踏まず演じてきた月日

八尾市 田中トシエ

堺市 志田 千代

鳥取市 徳田ひろこ

尼崎市 長浜 美龍

和歌山市 福井 桂香

藤井寺市 高田美代子

豊中市 樫谷 郁子

東京都 やまぐち珠美

和歌山市 榎原 公子

富田林市 中井 アキ

吹田市 大谷 篤子

寝屋川市 籠島 恵子

羽曳野市 徳山みつこ

倉吉市 米田 幸子

八王子市 播本 充子

堺市 宮本かりん

倉吉市 山中 康子

香芝市 大内 朝子

芦屋市 黒田 能子

藤井寺市 太田扶美代

米子市 澤田 千春

出雲市 伊藤 玲子

和歌山市 森下 順子

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 古久保和子

バイキングの皿に残した欲の跡
 忍びよる影が静かで気付かない
 年金が揺れてる灯り消さないで
 イランでは隠れん坊が流行ってる
 一盛りで足りず二盛りでは余り
 憧れを抱いていますもう登寿
 バリアフリー明日の暮らしへ身構える
 天国は我が家にあつた仕舞い風呂
 気負わずに春を迎える花暦
 風になりにくいといふ人の頬に触れ
 逆らわず風を楽しむ赤蜻蛉
 親と子の絆遠くても確か
 ワン切りで悩みオレオレなお怖い
 月と泣き月と語つた紅椿
 つぶやいて自分を探す探し物
 いらつしやい小判好きですうちの猫
 こっそりと干したことある敷布団
 寝姿を気にしたことあるわたし
 雪の音人を許せばあたたかな
 悪者になつてしまつた紫外線
 この余白ありがとうなら書けるのに
 気散じに遊び歩いてああしんど
 無理をして行く必要のない法事
 郵送でこと足りているほどの義理
 火を焚いてようやく溶ける胸の内

鳥取県 岩崎みさ江
 米子市 野坂 なみ
 藤井寺市 若松 雅枝
 大阪市 古今堂蕙子
 寝屋川市 平松かすみ
 東京都 岸野あやめ
 大阪市 津守 柳伸
 寝屋川市 坂上 高栄
 出雲市 園山多賀子
 富田林市 古田 千華
 寝屋川市 堀江 光子
 和歌山市 玉置 当代
 和歌山市 福本 英子
 米子市 木村富美子
 熊本市 永田 俊子
 東大阪市 安永 春
 大阪市 大川 桃花
 大阪府 米澤 俣子
 鳥取県 佐伯 やえ
 神戸市 田中 章子
 西宮市 緒方美津子
 岸和田市 雪平 珠子
 三田市 久保田千代
 寝屋川市 森 茜
 米子市 林 瑞枝

孫の前老いの小言をのみこもう
 姑のふところ温いので困る
 十五時の扉は不意に開けられる
 心残りがまだ少しあるすりガラス
 賞味期限切れても翼まだ動く
 わたくしを捉え離さぬ故郷の根
 あちこちにあるから楽し好きな人
 着飾つて皺くちやの手がいと嬉しい
 若づくりもう無理だよと言う鏡
 これからは髪もこなす三面鏡
 夫の前歩いて妻をしています
 ふまないでまだ生きている紅椿
 未練など捨てて今日から翔ぶことに
 終章を素顔で飾る面はずす
 秋野菜体内時計を管理する
 喪中でも今年の汚れ拭くわねば

富田林市 片岡智恵子
 大阪市 神夏磯典子
 和歌山市 楠見 章子
 和歌山市 吉村さち子
 鳥取市 録沢 風花
 松江市 川本 畔
 豊中市 安藤寿美子
 堺市 西村りつえ
 東大阪市 北村 賢子
 倉敷市 井上 富子
 八尾市 生嶋ますみ
 米子市 中井 ゆき
 愛媛県 黒田 茂代
 倉吉市 淡路ゆり子
 神戸市 山田婦美子
 尼崎市 春城 年代

千歩さんの句—お料理をするにしても調味料の使い方に順番
 があります。人生も順番が狂わないように願いたいものです。
 晶子さんの句—鈍行に乗ると急行に乗っている時には見えな
 かったものが見えてきます。今、自分はどうな景色の中に置かれ
 ているのか時々鈍行に乗って確かめましょう。たず子さんの句
 —秋の夜長、半月のおぼろをみつめ、亡き人をしみじみと想う、
 故人を懐かしむ心をうまく表現されました。ミツ子さんの句—
 ダイオキシンの句—のうのと、焚き火ができなくなって淋し
 く思っていました。あの火の色、煙の匂いが懐かしいです。

つじつま

吉川 寿美選



つじつまを合わすと尻尾切れている
 つじつまが合わないままで大晦日
 つじつまを無理に合わせたおべんちゃら
 つじつまを合わせる台詞が見つからぬ
 つじつまを合わせるために一歩退く
 つじつまが合わず歯車軋み出す
 子育てにつじつまなどは考えず
 つじつまを合わせる土産駅にある
 つじつまの合わぬ痛みは民ばかり
 筋道を通す男の背は孤高
 つじつまを無理に合わせる多数決
 談合をしたかつじつま合い過ぎる
 生きてきたようにあの世へ送られる
 酔うほどに話の筋が纏れ合う
 饒舌がつじつま合わずうろたえる
 つじつまの合わぬ叱言を浴びている
 つじつまは合ってはいるがきな臭い
 つじつまが合わなくなった勘違い
 つじつまの通りには風は吹かぬもの
 筋道を通す男の刀傷
 つじつまが合った意見が締め括る
 つじつまを無理に合わせて掘る墓穴

碧 あやめ 正雄 妻子 蛭 ゆきの あずき 哲男 勝視 権悟 倫子 (花)順子 たもつ 浜丘 恭昌 晴翠 庸佑 活恵 志華子 磯富子 紫晃 淳司

つじつまが一つ合わないボタン穴
 つじつまが合わぬ日本の民主主義
 泣かせただけ母よるこばす人になり
 つじつまを合わせた嘘が重くなる
 愛と憎つじつま合わぬまま消える
 つじつまの合わぬ戦争引き摺って
 群衆に流れてつじつま見失う
 つじつまを神に任せた余命表
 つじつまを合わす尻尾を切っている
 つじつまが合って春には花が咲き
 横道へそれた話が戻らない
 つじつまを合わせる情けの四捨五人
 つじつまの合わぬレールが錆びてゆく
 つじつまの公平時間はかかっても
 神様は公平時間はおかかっても
 つじつまの合わぬ人生泣き笑い

佳 北の国つじつま合わせればかり
 辻褄をやっと合わせた消去法
 家計簿のつじつまへそくりしているな
 筋道を通す息子に折れてやる
 つじつまの合わぬ言い訳宙に舞う

人 つじつまが合うのはきつと死んでから
 地 つじつまが合わず遮断機降ろされる
 天 つじつまはいつも合ってる茄子の花
 軸 つじつまをやっと合わせた偏頭痛

強一 真一 俊子 愛論 弥生 保州 扶美代 重人 シマ子 慕情 隆盛 公誠 典子 志洋 正和 みつこ 鉄治 千里 美代子 春雄 久保止剣

巻

江原 秀夫選



くだを巻く友もいるから賑やかだ
 佳き日なり今日を何処も巻き戻す
 リストラも何処吹く風と煙に巻く
 少しずつ脳が左に巻いてゆく
 正月へ緩んだネジを巻き直す
 湯に浸かり今日のわたしを巻き戻す
 雑魚の知恵長いものには巻かれてる
 はぐらかす答で野党煙に巻く
 松に孤春を夢見て冬に入る
 表彰状巻くと覗いてみたくなる
 みの虫の身を巻き込んでいる孤独
 パスタオル巻いて敬語の電話口
 尻糸を巻いて正月満ち足りる
 振られても愛の振り子のネジは巻く
 巻きもどし出来ない古桶の軋む音
 タオル巻き寝ている妻へたまご酒
 執拗なぶらさがり記者煙に巻く
 ハチマキをさりりとしめて孫は稚児
 小さな手で孫がへそくり巻き上げる
 閻魔さへ舌巻くほどの嘘を吐き
 父さんのねじを巻くのは子の笑顔
 とごろ巻く若者温い灯を知らず

主一郎 美代子 武史 栄呼 (花)順子 庸佑 克治 郁子 幸生 度 活恵 正雄 典子 遠野 さと子 像山 時雄 開子 尚士 高明 ミツ子 半覚

名園の松に菰巻く冬仕度

巻き戻して確かめる過去の傷

兵児帯に亡夫の匂いがまだ残り

寿司を巻く母を見つめる子の笑顔

ネジ巻けばあやつり人形喋り出す

ネジを巻く明日を生きたるために巻く

相談に乗って噂に巻きこまれ

ぜんまいを巻くと亭主はまだ動く

巻きもどす叔父の原点赤い紙

あと付けて来そうな妻を煙に巻く

ねじ巻いたぶんだけ歌う蓄音器

犬にネジ巻かれてやつと出る散歩

巻き方は世界に一つこの指紋

忘れないように輪ゴムを指に巻く

落ちそうな首にマフラー巻きつける

佳

ゲートルを巻いた兵士の脚も古い

毛糸巻く胎児の動き聴きながら

掛軸を巻いて季節を春にする

巻いても巻いても極楽が出てこない

ゆつたりと緩めた五体にねじを巻く

人

不作にも負けず祭りの寿司を巻く

地

話したくて形見の時計巻いている

天

巻きもどしてきぬ時間をひた走る

軸

巻き返す力をためて明日の夢

紫見

鐘造

あやめ

(南)正和

柳弘

善信

春雄

敏子

(備)美津子

忠

正剣

圭二

晴翠

宏章

哲男

あずま

愁女

慕情

螢

愛論

(備)正和

理恵

和

王置重人

重人

重人

重人

重人

重人

具 合

奥谷 彩子選



無言劇 具合よく来たお客様

具合よく氏神らしい客が来る

聞き役に空気の流れ具合みる

成り行きに具合よく退く利口者

高飛車でさぐり合つてる腹具合

多機能の男で使い勝手よし

いいあんばいの糠床嫁に引き継がる

ロボットの具合自見るのはロボットで

風邪気味で具合良くないアナの咳

古い具合比べあつてるクラス会

体調に触れて欠席詫びてくる

具合がいいので今日こそ病院へ

ていねいに具合聞いてくれる名医

具合いいらしもぬけの殻へ見舞籠

胃の具合素行調べにくるカメラ

腹具合少しお世辞を食べすぎた

五体不調足の裏から黄カード

母の具合案じて急ぐ霜の朝

病床の母が気遣う子の具合

かあさんのふところ具合重症だ

ばあちゃんの懐具合孫が知る

親友は懐具合知つている

問診で懐具合みてる医師

ふところの具合暖簾がお見通し

ふところの具合見透かし買わず技

腹具合悪いがカニは見のがせぬ

輪を抜けて歪み具合を確かめる

頭一つ出ると具合の悪い釘

机上での空論具合悪くなる

風向きの具合で変わる日章旗

イラク派遣はアメリカの具合自見て

自爆テロ相手の具合など聞かぬ

難局へ政治の舵の取り具合

具合良くたなはた落ちたためしなし

出来具合じつと見すえる匠の眼

名工の千に一つの出来具合

陶匠は言わぬ火具合土の色

佳

履き具合いい靴ばかりよくちびる

具合よく咲くよう肥料水加減

千年の具合狂わぬ匠技

ポケットの指輪が間合い取る具合

太陽とただ絶妙の距離具合

母にだけ具合の悪いことも言う

一仁雄

一知

のり子

(奥)五月

宏章

碧

一粹

淞丘

俊路

正剣

俊子

徳三

たん吉

水笑

棲世

茂代

シマ子

勝巳

セツ子

可住

庸佑

あずき

土橋 螢

初歩ノ教室

題一雪

三宅保州

「題」についての知識を得るとともに、発想を広げる意味からも、辞書等で調べてから造句する習慣を是非身につけてください。

「雪」に関する熟語的なものを列挙してみます。いただいた句はこの中から限られたものに偏っていました。

雪起こし、雪折れ、雪下ろし、雪女、雪掻き、雪囲い、雪合戦、雪雷、雪沓、雪時雨、雪達磨、雪吊り、雪解け、雪濁り、雪野、雪晴れ、雪踏み、雪祭り、雪見、雪見舞、雪催い、雪焼け、雪原、雪崩、雪洞、雪化粧、雪うさぎ、雪国、吹雪、大雪、小雪、蛩雪、降雪、細雪、残雪、新雪、積雪、風雪、粉雪、はたん雪、初雪、淡雪、根雪

【添削・批評句】
原 軒下で植木に落ちる牡丹雪 みね代
原 雪の朝庭の枯れ木も薄化粧 稔
原 はたん鍋つきホカホカ雪見酒 郁代
原 みちのくの宿しんしんと雪見酒 重之

原 熱燗で一杯飲もう吹雪の夜 敏子
原 吹雪く夜は鍋で熱燗酌み交わす 良一
原 雪囲い雪積む季が近こうなり 千華
原 雪囲い庭木もしばし冬を越す 敬之介
原 バスツアー走り続けた雪の壁 准一
原 雪割って春告げにくるフキノトウ 正和

以上の句は、残念ながらいわゆる説明句、報告句の域を超えていません。説明や報告にすぎない句は作りやすいのですが、訴えのある句、作者の存在感のある句、命ある句などの佳句の条件を満たしていません。難しいことですが、報告、説明のみに終わらない努力を続けられれば、佳句が産まれるようになるものです。

原 胸を刺す冷たいことば仲を割る 美恵子
「雪」の題の句と言えませぬ。
原 チラチラがどんどんになり困る雪 照彦
「困る雪」が平凡で、ストレート過ぎます。
原 新雪に足形つけて胸いやす タカ子
「胸いやす」がいたたけません。
原 初雪やテロを知らない雪ダルマ トキ
川柳では、必然性がない限り、や、かな、けりなどの切れ字は使わぬよう。
原 石入れた雪玉当ててみたくなる 真一
原 穏やかなない表現過ぎませんか。
原 残雪が黒い地球が燃えている 像山

「が」が重なりリズムを損ない、意味も分かり難くしています。
原 古里の香落の雪もまた絶景 トミノ
添 古里を絶景にする雪景色

原 雪掻きも子の定年までと励む老 智加恵
中九章字、

添 雪掻きも元気なうちは励みたい
原 三輪車かくしてしまつた夜の雪 映子

中九章字、

添 三輪車隠してしまつた夜の雪
原 冬休み孫の楽しみ雪合戦 綾乃

下六章字、

添 雪合戦楽しむ孫の冬休み
以上四句の原句はいずれも字余りで、推

こつで直せる字余りが多いものです。安易な字余り、字足らず、破調等は避けましよう。

原 エステして戻ってこない雪の肌 弘子
添 エステでも戻ってこない雪の肌

原 たどんの目泣いてるよに温暖化 幸
添 温暖化泣いてるような雪たるま

原 温暖化都会の雪は語り草 侑子
添 温暖化都会の雪は語り草

原 屋根に雪乗せた車にくに思い 勝久
添 屋根に雪乗せた車に里思う

原 今のはなしの字二の字の雪景色 邦柳
添 今のはなしの字二の字の雪景色

原 添今は昔一の字二の字の雪景色

原 降る雪に出稼ぎ父の土産ぬれ 章 司
添 出稼ぎの父の土産を濡らす雪

原 排ガスを吸わされた雪たるま 喜 子
添 排ガスを吸わされている雪たるま

原 露天風呂初雪湯気にとけてゆく アヤ子
添 初雪が湯気にとけてゆく露天風呂

原 暖冬に雪まで作りスキーする こすえ
添 暖冬に雪乞いをするスキー場

原 白うさぎ撃たれ血を染め雪の中 たん吉
添 残酷さを説明しすぎのきらいがありま

添 雪を血で染めた兎に手を合わす
【少し工夫すれば佳くなる句】

暖冬へボブも瘦せてる雪まつり はじむ
お目当ては露天風呂です雪祭り 幸

頬破りして雪の舞う露天風呂 淳 司
雪たるまやはり都会は汚れてる 弘 之

空見ればごみの舞うことばたん雪 節 子
初冠雪大山様は牙え渡る 信 翁

見慣れた庭雪を背負って衣替え 益 子
雪原と見紛う雲の上を飛ぶ のり子

雪に泣き雪に喜ぶ雪の国 激
リフレイン（同じ言葉の表現を繰り返す

こと）は強調などの効果がある反面、くど

い、無駄などの欠点もあり、使い方が難し

そばせる雪なかず雪 ユタカ」が既にあり

ます。
雪たるま孫の知らない雪が降る 信 子

この場合の雪のリフレインは無駄気味で

す。上五は、南国に、暖冬にとか孫の知ら

ない雪が降る理由を詠むか、どうしても孫

に似てくる雪たるま的の方が良いのでは

粉雪が舞って屋台の客となる 准 一
遠慮勝ち車道を歩く雪の朝 孝 明

缶ビール雪に埋めて場所忘れ 忠 子
大雪を帰れぬ夜の言いわけに 清

一日の予定を変える雪の朝 宏 子
雪女郎可愛い嘘をついており 初 恵

下五のついでおりが説明過剰で弱い。た

とえば、聞いてやりとか、騙されるとかに

して、作者を存在さすと佳句になります。

【佳句】
連山の雪を脊に特急車 春 代
雪見酒どこか遠くへ行きたいな 志津子
約束が果たせなくなる吹雪く道 政 子
初雪へ母の下駄借り庭めぐる 利 子
北国の友のメールは雪だるま つよし
ぜいたくに備長炭でだるまの目 満 子
雪だからチェーン持参で来いと言う 武
アメリカへ寄れば寄るほど下駄の雪 賢 治
木枯らしに乗って雪つ子ダンスする 栄 呼

雪厚しその日わが娘は不合格 九 好
太陽も手伝っている雪おろし 芳 江
色白が自慢雪国育ちです いさお

北国の父ちゃん雪が大きらい 栄 子
先生の足跡たどる雪の道 時 雄

初雪の窓に目のゆく授業中 好
しんしんと降る雪の音聞いている 英 旺

雪が舞う終着駅が好きでした 和 友
ひとり旅ゆつくり探す雪女郎 和 友

なごり雪聴けば青春蘇る 寒 千代
とけぬまま遠いあの日の雪だるま 円 女

親から子へ子から孫へと雪こんこ 秋 星
【今月の推せん句】

思ひ出を打ち消すように雪が降る 伏見雅明
作者の思いを雪の特性になぞらえて流麗

によまれていきます。「ように」という技法

を否定する説もありますが、一概には言え

ないと思います。要はその使い方次第では

寄り添えば歩幅も同じ雪の道 三宅満子
寄り添うという愛と絆が、雪道という障

害のある道も、同じ歩幅で助けあつて行け

るといふ。単に雪道ではなく人生の道もし

【私の句】

帰らない娘案じる雪催い
百年後の雪も真つ白いだろわか

秀句鑑賞

平成十二年の九月号で秀句鑑賞をさせていたとき、その後の三年間で私の川柳をつくる力も川柳を鑑する力もたいした進歩はありません。一つだけ変わったとすれば、川柳は楽しくつくり、楽しく読むものであると思えるようになったことぐらいです。

十二月七日の鹿野みか月の川柳大会で、齋藤大雄さんが、川柳の大衆化をとりあげ、平易、共通、楽しさの三点を強調されておられました。

また、最近テレビで淀川キリスト病院の名譽ホスピス科長の柏木哲夫先生から、ご自身も川柳をつくり、末期の癌患者や死を間近にした人に、川柳をつくることをすすめられておられるお話を聞きました。

川柳をつくる楽しさ、川柳のユーモアが死を間近かにした人にとって、生き甲斐になるというお話はとても印象に残りました。

同人の川柳は毎月かかさず読んでいますが、今回は心をこめて、鑑賞させていただきます。とても勉強になりました。

同人吟前 たもつ

—1月号から

命にはかかわりのない医者巡り

亀岡 哲子

百均へ風呂敷持って気晴らしに

江口 度

明るくてユーモアの句を並べました。

恐ろしい医療ミスは避け、待合室の社交も

兼ねて、医院の梯子もまた楽し。一方、気晴

らしに百均屋へ風呂敷を持って行く発想には

参りました。ご両人に拍手。

愚痴ごと感謝もみんな川柳に

本間 満津子

車椅子ルンルン買物膝に抱く

山門 タミ

杖ついてグラビヤを見にコンビニへ

伊藤 武

満津子さんの元気な呼名を十二月の本社句

会で聞かせていただきました。感謝まで川柳

にされているところ学びました。車椅子でル

ンルン買物のタミさん、杖ついて、グラビヤ

を見に行く武さんの前向きの生き方に、川柳

家としての姿勢を教えられました。

靈感があるのでお化け寄ってくる

森川 あらた

靈感は魂や仏を呼ぶのでなかったのだ。お化けまで寄せられる靈感はすばらしい。願わくばお化けをいっぱい寄せて、この世の悪を追っ払ってほしいものです。

歳とるもよし漱石を読み返す

堀江 光子

歳とるもよしと言われていますが、これは謙遜で余裕の川柳です。おろおろと生活に追

い回されず、『坊っちゃん』でも読み返した

ものです。

どろぼうに気づかれぬように二重鍵

宮崎 シマ子

二重鍵は泥棒に気づかれぬようにするもの

だったんですね。一つ賢くなりました。下五

の二重鍵の止めで句が引き締まりました。

土に生き土に学んだ老いの背な

吉岡 きみえ

私も休耕田を借りて長年野菜づくりをしま

した。連作のこと、種を蒔く時期、肥や水の

やり方等々、土から学びました。しかし、生

業として土に生き、生計を立てることは並大

抵のことはありません。土に生きるために

は体力も頭もいります。

下五の老いの背なに自信がうかがえます。

天地無用わたしは箱でひと休み

山本 義子

スローライフ小鳥の声も聞き分ける

古久保 和子

「天地無用」の貼り紙をして、箱の中でひと休みするという発想のできる人は大物です。

次の句もこれに通じるものがあります。

スローライフで小鳥の声を聞き分けると言い切っています。凡人にはできそうにもありません。

先に読む新聞折り目崩さずに

岸 桂子

後から読む夫や家族への心遣いが伺えて大変いい川柳です。このような心遣いは新聞だけでなく、きつと全てに渡っていると思います。ご家庭の雰囲気伝わってきます。

病人にがんばれなんて酷ですよ

奥田 保子

病気によって頑張れの励ましはかえって負担になると聞きました。この句から病人に対する接し方を教えていただきました。

日本人だからカタカナ語は読める

中塚 礎石

ともすれば見逃してしまいう句です。日本人だからカタカナ語は読めるけれども、意味はわからないと解し、風刺の利いた川柳です。

野良犬も続いて渡る青信号

清川 玲子

人間よりも犬の方が交通事故によく遭うと聞く。野良犬は人間の後に続いて渡れば安全であることを知っているのでしょうか。この句から野良に対するやさしさを感じました。

本物が怖い眼鏡を拭き直し

安平次 弘道

本物を見事とか美しいとか言わず、本物が怖いと言って、そして眼鏡を拭き直しと続けたあたり、上手いという他はない。

今私は、何十年前に京都で「ミロのヴィーナス」をみた印象を重ねて味わっている。

真筆の賀状思わずはつとする

清原 悦子

ワープロばかりの賀状の中で、手書きに合うと確かにほっとします。ワープロにも手書きの添え書きぐらいはほしいものです。

賀状には真筆の表現は適切であろう。

古稀なんかボンと蹴飛ばしダンシング

南原 正和

先に女性のゆとりの句をいくつか上げましたので、今度は男性の句を紹介します。

古稀をボンと蹴飛ばせば十歳は若がるにちがいない。今ごろは、リズムよい川柳のよいうにワルツを踊っていることでしょう。

山芋の粘りころを糰にする

岡本 花匠

「山芋の粘り」から山芋というのは自然薯のことでしょう。自然薯を下ろすとそのまま団子になる。その粘りころを糰にすると言ったところは心憎い。

猿の子は親をとことん信じている

松本 よしえ

人間にそろそろ神も飽きて来た

蔵本 悦子

猿だけでなく動物はきつと親をとことん信じていると思う。この句は人間に対する揶揄であり痛烈な批判である。人間よサルを見たまえと言いたいのでしょうか。

昨今の親殺し子殺しの世相を見ると、人間は神に飽きられてもいたしかたはない。

万物の霊長の人間として、親として考えさせられる二句です。

お湯割りのお湯だけ妻に入れさせる

緒方 美津子

言うまでもなく焼酎のお湯割りはコップに焼酎を三分の一か半分程入れ、後でお湯を注ぐ。夫は登場していないが、焼酎は自分で入れ、お湯だけは妻に入れさせ。酒呑みの心理が見事に描かれた川柳です。

今夜も妻はお湯を注いでいることでしょう。

秀句鑑賞

—1月号から

鈴木公弘

影若くサイクリングのベダル踏む

岩崎 實

憂うことのない日の道に映し出された我が影を「若い」と感じる気持ち頼もしい。

結局は夫婦ふたりつきりになり

大坪 天涯

元服した男子は他家に仕官し、女子は請われて嫁いで行った。静寂を取り戻した城のそこかしこにあの日の日が浮かび現れて、一抹の哀しみをそそる。

国老いて年金いじめられている

井本 清山

活気に満ちていた頃は考えてもみななかった。来年度予算から年金支給額は通減され、いよいよ使い捨ての風潮が加速される。

終章を先に読むから興が冷め

若松 雅枝

人生は明日が読めぬから面白いという発想もできる。結末が解つていれば夢を抱くこと

はないし努力する価値もない。

お互いの葉見せ合う旅の宿

寺井 弘子

長い道すがらである。加齢とともに修理を要する部品が多くなる。これもまた偽りのない人生であろう。

抜こうかと思つ朝また花が咲く

三宅 満子

意気地なしに見せたい情景である。要するに早合点するな、諦めるなということである。

謝辞みごとさすが故人の子と言われ

長島 亜希子

会葬の御礼を述べるにも親の存在を気にしなくてはならないとは辛い。しかし、厳しいようだが、親の肩書きや財布にぶら下がっていたのだから我慢の範囲だと申し上げておく。

片隅のオンリーワンでよしとする

江波 正純

明るい所がよければ窓際に、暗い所がよければ倉庫の奥に机を得て、唯我独尊の人間物語を書くも楽しからう。

完璧な妻を望まれ疲れ果て

俣野 登志子

熟年離婚の理由第一位である。良妻賢母をめざした女性ほど虚しさを覚えるのかもしれない

ない。労災制度はないから、大いに手抜きを
してダイヤモンド婚を迎えてほしい。

描けそうでやはり描けない抽象画

奥 時雄

現実を生きているが故であろう。頭に花が咲くようにならないと抽象画をものにすることはできないような気がする。

行列があると並んで見たくなる

坂口 英雄

野次馬根性丸出しの例である。同じ並ぶにしても冬のトイレ前には屈辱感があるが、先の見えない行列には行き着いてみたいスリルがある。

目をそらすたびに流れてしまう虹

やまぐち 珠美

ときめきを与えながら実体のない虹。飽きていないのに静かに、一方向的に消えていく。突然訪れるふたりの破局のように。

以下、気にしながら鑑賞できなかった句を記しておく。

少子化に頭の痛い地藏さん

命日という結び目がある絆

ほんやりとして溜息をついている

風を読みすぎて自信が揺らぎだす

無料という殺し文句が足をとめ

言い訳はもう通じない温暖化

松葉君江

稲葉 洋

辻内次根

両川無限

赤木妙子

森下一知

言靈考

山本蛙城

この国では古来、万葉集にも「言靈のたすくる国ぞ」とあるように、言葉には霊的な威力、靈威があると信じられてきた。

人智の及ばない領域の事象が殆どだった太古は、不明な森羅万象すべてが神で、ヤオヨロズノカミであった。

人々は幸い考える生物として研究を重ね、近代では生命の本質まで究明し、新しい生命を生み出すことさえも可能となった。神の領域は大きく縮減されたわけであるが、まだまだ未知の事象が多く残っている。

我々が言葉や文字を使い身ぶりを加え意思の疎通をしているのも、未解明のふしぎなことの一つである。

われわれの脳は、事故などで傷めた人の治療と平行して行なわれた実証的研究から、驚くほど緻密な働きをする化学工場であることが確認されてきた。

目や耳などの感覚器官がそれぞれの感覚を感知すると、神経細胞から脳細胞に刺激として伝達される。

脳ではシナプス、ニューロン、軸索と呼ばれる細胞が、電子的スピードで互いに特殊な化学物質を授受して刺激しあい、記憶野や知覚野などの専門領域と化学反応して新たな物質が各々の分担区域に蓄積される。この言語以前の状態こそがまた未開発の集積で、まさに言霊というにふさわしい状態であり、哲学者のいう形而上学の内在にあたるのであろう。その蓄積の化学物質が運動神経を刺激して筋肉を動かし、個人間で意思疎通可能な言葉や身ぶりとなって表出されるのである。これらの化学反応の経過がわれわれ自体の意識しない中で自動制御的に進行するのだからまさに驚きで神業というしかない。

同じ五・七・五の短詩型、俳句界では自然現象を畏怖していたのを今も引き摺って、例えば新年のめでたい時の季語に忌み詞を案出したりしている。例えば涙を流すことを「米こぼす」、鼠のことを「嫁が君」などと言換えたりするのである。

さらに奇異なことに、病氣のことを「歎業」と差し替えて句作するのである。こんな状況は博物館の文化維持の体質と言えよう。そして、これはそれなりに伝統文化的な意義があ

る。

他方、一部の先進的な俳人は脳内の内在を外界の事象にいかにか合致させて表現できる言葉として吐くことができるか考察して「真実感合」とか「内観造型」とかの俳論を発表したのであった。

川柳では、内在を吐露するという立場の、「詩性論」がこのようなことにやや近いかも知れない。

本来、われわれ各個人の脳は経験や環境にに応じて能力に差異があり、生活環境や信条など個体の違いもあるから作風も多様の筈だが、永い間には月並み、同想病が蔓延する傾向である。言葉は、永く使っていると極端な場合、看板や標識のように意味が固定化するのである。尤もその必要性ある場合もある。例えば法令用語では、だから「用語の定義」の項目で解釈に固定枠をはめておく。

文芸は創作である。過去に使い古された用語や文体は価値がない。定型でしかも短詩の場合は、その創作性の苦勞は散文の比ではない。従って記号体のラングから離れる必要がある。蟻は働く者、鳩は平和などと固定化したら発展がない。蟻も道草して怠け、鳩も喧嘩する。解釈を柔軟にしなければ川柳も生きの道がない。それが言霊の望みでもあろう。

本社 一月句会

一月十日(土) 午後一時
アウイーナ大阪

晴天に恵まれ、12名の多数で本社句会が開催された。まずは天笑主幹から、今年は川柳塔八十周年の節目の年であり、多くの参加者を得て有り難く思うとの挨拶。

お話は薫風名譽主幹。前句付けから群風柳多留、狂句から剣花坊らの改革へとその歴史を説き、明治生れの六大家による文芸的レペルアップへと話が進む。川柳とは人間陶冶そのもので、自己の真実を詠み、見たものの灰汁を絞り、爽やかな川柳にしたいと述べた。紹介のあった六大家の句を各一句掲載する。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ
路 郎
花活けて己れ一人の座を悟る
周 魚
よく稼ぐ夫婦にもある一休み
紋 太
身の底の底に灯がつく冬の酒
三太郎
今にして思えば母の手内職
水 府
もの食べて黙っているのは大衆の力である
雀 郎
川柳を支えているのは大衆の力であると結ぶ。
初出席は大久保伸子・坂上淳司・中村トミ
ノ・米田志津子・柿花和夫の5氏。

月間賞は安藤寿美子さん(豊中市)に輝く。
(司会)玄也 (記名)恵子・真理子
(受付)寿美子・茜 (清記)尚士

席題「神」 内海 幸生選

元旦の富士は気高く神々し
頼られているとは知らぬ絵馬が揺れ
なんでだろ貧乏神に好かれてる
神様に文句言いたいことばかり
神さまの目線が僕に届かない
平穩で神拝んだり忘れたり
孫からの年玉まずは神棚へ
コランと聖書仲よく並んでる
嫁かぬ娘に出雲の神も匙を投げ
神さんの都合も聞かずたのみ事
神様のせいにはしない不台格
欲ばりの私に神は横を向き
散る時は神に任せて今日を咲く
わが夫婦どうやら神のミスマッチ
オベ終る神はたしかにいらつしやる
願ひ事その賽銭でいくつする
神さまの死角で爪を研いでいる
えべっさん景気良くとも悪くとも
火花散る信じる神の違う国
住吉さん稲荷戎と欲深
神前に自信のうすい誓詞よむ
神があるならと折った手術室
九回裏女神が動き出すドラマ
神さんは保証せなんだ永久の愛

甚一 重人 玄也 楓 鹿 能 能 隆 倫 菜 能 悦 昭 み 扶 托 はず 始め 寿海 萬的 理恵 耕治 理恵 洋 恵

神様は憲法曲げて読みません
抗議など何処吹く風と神詣で
神様は頑張った子の絵馬探す
お賽銭少し弾んだ下心
身の程を知らぬ願ひに困る神
千年を生き神木と崇められ
土壇場で神様拝むのを忘れ
神様も呆れ顔する絵馬のエゴ

神棚の雑煮の湯気にある平和
神様へ何を祈るか小さい手で
神様も耳が遠くて叩かれる
神様が苦笑いする絵馬の誤字
神もびっくり偽札のお賽銭

女神だと思つた人が山の神
人 皺の手にみどりごを抱く神を抱く
天 折つたら薬一本をくださつた
軸 罰当てることも大事な神の役

兼題「目指す」 志田 千代選
関東に川柳塔の旗揚げける
百歳を目指せと老母を元氣つけ
これからは可愛いばあちゃん目指してる
百歳を目指すつもりはありませぬ
お賽銭箱を目指して肩車

一歩 甚一 尚士 扶美代 正坊 五子 正坊 東吉 紫香 英子 正坊 かすみ 賢子 真理子 民

着順はどつあれ目指せ福袋

寝袋で一番目指す開通日

お手本にする美しく老いた人

総理とは違う私の目指す国

手を汚しなさい政治家を目指すなら

目指すのは平和といつて弾を撃つ

スタートはしたがゴールは目指さない

人形も箱から出たい夢がある

頂点を目指した頃は燃えていた

血迷つてプロを目指した頃がある

画家目指す訳ではないが絵筆持つ

シテラレント目指していますこそりと

目指す人は少し背丈が低いだけ

フィアンセを連れふるさどを目指すバス

目指すのはただただ君のハートだけ

やどかりもいつかは目指すマイホーム

百名山歩く足腰さたえとこ

ボケぬようちよくちよく動くことにする

夫の居る浄土を目指す地図がない

身の丈に合うもの目指す淡々と

入口出口目指して地下街浮遊する

目の前のビルになかなか近づけぬ

頂点を目指せば目指すほど孤独

今日も寝る大事な明日を目指すため

終章をなお熟演の一代記

あやかろう無事は名馬ハルウララ

目指すことあきらめてから調子良い

遠巻きに目指す花子の芸の虫

睦子

正雄

隆盛

利昭

直樹

正坊

メ女

ひさ乃

扶美代

三喜夫

(五)月

シマ子

耕治

光久

きらり

月子

たず子

能子

茜

昌紀

楓楽

小雪

直樹

和夫

舞夢

冬葉

腹一杯食べさすことを目指してた

華の人生目指して許すことばかり

目指すもの故郷にありUターン

始める時はいつでも虹が見える位置

目標も右往左往の去年今年

紙飛行だつて大空目指します

目指すものあつて草履を温める

初恋を大切にする真人間

初恋を聞かれ百歳頬を染め

類染めて初恋の頃語る老母

初恋のように今度も血が騒ぐ

セピア色の写真が語るそんな頃

陽炎のように初恋浮びくる

初恋もライバルが居た幼稚園

ハーモニカ吹けば初恋よみがえる

初恋のモーション気付かぬ僕でした

フォークダンス握る手と手がテレている

父ちゃんの初恋耳にタコが出来

初恋つてどれがどれやら夢ばかり

初恋の女も梅干僕もまた

初恋は過剰包装してしまふ

気の多い男で初恋たんとある

スクールの初恋海をどびこえる

哲男

弥生

章子

弘一

昭

潤子

扶美代

保州

直樹

修

美代子

いわゑ

伽羅

美明

東吉

賢子

月子

孝一

淳司

楓楽

幸生

久峰

初恋の七つボタンの墓碑に立つ

初恋をちよくちよく味る歳になり

初恋の一番近い父の膝

初恋の人の名前を子に貰い

初恋の女に探る亡母の影

詩集から初恋ばらり舞い落ちる

かくれんぼ鬼に見つけて欲しかった

平和なら初恋もあるイラク人

満五つもう初恋を口にする

千代紙あげたあれが初恋だつたのか

披露宴初恋同士ということだ

初恋の記憶辿れば木の校舎

ラブレター机の中で冬を越し

初恋は一〇〇パーセント美しい

好きだから蛙を入れたランドセル

少年のまつげが深くなる恋よ

自分史へ初恋倍にふくらます

初恋は九州弁で始まった

心づらしただけ僕の初デート

指切りで別れたままの疎開の子

地が震え初恋の跡消えました

初恋はウルトラマンでありました

初恋の自画像いつも弾けてる

初恋を冷凍保存するハート

初恋を冷凍保存するハート

初恋を冷凍保存するハート

初恋を冷凍保存するハート

はじめ

天笑

瑠美子

深雪

愛論

正雄

シマ子

舞夢

雅文

みつ子

和夫

たもつ

春蘭

公誠

朋月

真理子

セツ子

光久

玄也

朋月

弘風

千代

弥生

遠野

遠野

遠野

遠野

初恋かお手てにチューと影法師

兼題「白」

西口いわゑ選

公約を白紙に戻されては困る
鐘撞けば二〇〇四年が白み出す
真つ白な脳で言い訳考える
真つ白いエプロンそこに亡母が居る
消しゴムで消しても白に還らない
今日もまた妻の機嫌へ白い旗
キャンパスの白に無限の可能性
白い皿少女は夢をてんこ盛り
白い絵具足して恋の火やわらげる
淋しくて白いプランコ漕いでいる
白雪姫は白い化石になりました
日記書く真白き雪を染めたき夜
身の丈で暮し続けた共白髪
喪中欠礼白い時間の三が日
傘寿きて白紙に戻すあんなこと
瞳を閉じて白い天使と会話する
木蓮の白さが胸に灯をともす
砂糖と塩置き場所変えたのは誰や
白寿なお義理の裳裾をととのえる
白い画布余白残しているのだよ
おいそれと誘いに乗らぬ白いバラ
本読んで音楽聞いて白い飯
白を白と頑固に通しながら生き
雪化粧神よあなたは美しい
真つ白いハートに戻れないくらし
わだかまり捨てると白い風となる

五月 倫子 潤子 一風 弘風 睦子 ひさ乃 理恵 朋月 美代子 春蘭 和香 恵子 とし子 寿子 九好 利昭 扶美代 弘一 美籠 一步 ルイ子 弘一 月子 能子

白日に晒す私の古い殻
白いまま嫁いだはずの歳月よ
どの色も無垢な白にはかなわない
真つ白になるまで晒したいころ
許し許され白い心でたそがれる
ハンカチは純白負ける日のために
佳
白混せてごらんやさしい色になる (矢)五月
真つ白い頁を開く呱呱の声
白少し汚れて仲間たんと寄る
人間の白さを風が染めに來る
日記帳白いページにある炎
人
白い画布この子の明日をどう描く
地
人間に戻る白旗振る勇氣
天
少し汚れた白がいちばん身に馴染む
軸
共白髪勲章よりもありがたし

美籠 能子 倅子 美代子 ひさ乃 正坊 五月 富美子 昭子 雅文 セツ子 光久 弥生 楓 楽

兼題「酒」

前 たもつ選

風邪引いて母のやさしい玉子酒
白寿なお杯を片手に句を捻る
先ず亡夫に雑煮新酒でごあいさつ
酒の名のつくものみんな好きなんだ
雪月花酒は私を離さない
閻魔さんにそろそろ酒を贈らねば
久し振り祖父とゆつくりさし向かい

深雪 直樹 トミノ 月子 悦子 いわゑ 賢子

酒酌いでも思いは亡夫のこと
許された五勺大事に呑んでいる
十八年物のワインで虎祝う
慰めの言葉も言えず酒をつく
酒たばこやめて淋しい年男
熱燗をつかまひよスルメ焼きまひよ
この孫もやはりお酒が好きらしい
ひれ酒を百八煩惱聞きながら
酒ありて少し生き方変えられる
一日のたかぶり癒す赤ワイン
言い勝ったあとをさみしい独り酒
奥さんも飲めて話がはずむ家
夫からの業務連絡飲みに行く
断酒会のピラ母さんが貰てきた
以心伝心同じレベルの発泡酒
シンプルなお父の酒には嘘がない
許す時酒も素直に妥協する
無重力に私もなれる酒二合
終業ベル叱つた部下に誘う酒
飲めぬのを公認されて楽になり
酒とろりプラス思考にしてくれる
賑やかな酒にさみしき見え隠れ
酔ってなどいません誰のことですか
下戸がきて仕事のように注いでくれ
晩酌を止せば女房が不安がる
佳
神様でさえもお神酒を召されます
人生のどこどこに酒の恩
酔うほどに人間らしくなってくる

英子 正坊 九好 美籠 冬葉 義子 かりん 菜月 睦子 倫子 はじめ 紫香 シマ子 ダン吉 柳弘 千里 正雄 三喜夫 みつ子 千恵子 ダン吉 耕治 和夫 弘風 楓 楽 能子

初夢は弁天様と酌み交わす
養老の滝に散骨して欲しい

さらり
弘一

イラク行くどんな気持で初春の酒

一步

深酒は飲むと父が酌いでくれ

メ女

酒飲めば天井回るすこいなあ

志津子

去年の息全部吐き出し屠蘇を酌む

軸

兼題「おもしろい」

河内 天笑選

おもしろいお方と体を躲される

保州

おもしろいことしてる日は早よ暮れる

寿海

ほんわかといとしこいしの顔楽し

たす子

ハルウララっておもしろいよね偉いよね

義子

ヒットしたギャグで十年食いつなぐ

弘一

おもしろい話を追加する

紫香

下手だからとつても面白い芝居

真理子

笑わせる特技があつて持っている

ひさ乃

おもしろいほどオレオレ詐欺に引っかけり

たもつ

ひまつぶしインターネットがおもしろい

ふりこ

話ましてはらへんが笑いそう
チャップリン靴にベアソンス詰めていた
失敗談ならば面白がつて聞き
口コミでおもしろいほど客が来る
他人から見ればおもしろい夫婦です

更紗
玄也
正雄
伽羅
愛論
ふりこ

相鎧のずれる男がおもしろい

扶美代

おもしろいお人やけれど脆い人

九好

面白い人と言われて取れぬ面

トミノ

深刻をおもしろく書く寂聴さん

富美子

逆転があつて人生おもしろい

理恵

おもしろいはずや浪速のおばちゃんや

志津子

身勝手な一人の今がおもしろい

美明

しょうもない話やけれどおもしろい

泰子

たのしかったおもしろかったで終りたい

瑠美子

おもしろい顔していてもアイルブユー

則彦

おもしろい妻と居るので安らげる

朱夏

面白いようにはずれている神籤

倫子

お金持ちよりおもしろい人が好き

正坊

おもしろい方ねと肩を叩かれる

孝一

おもしろいタレント鬱で寝込んでる

佳

おもしろいお方ですネと断わられ

哲男

おもしろい答えで結び目がとけた

弥生

おもしろい人だお金を遣わない

一步

地獄見てからの世間がおもしろい
辛酸を舐めた話がおもしろい

茜
扶美代

人

遠野

おもしろい人で終った恋でした

地

おもしろいおっちゃんやけどさびしそう

天

おもしろい顔やと覚えててくれた

軸

ゆつくりと雲を見るのもおもしろい

安藤寿美子

第13回播磨文芸祭川柳大会

とき 3月14日(日) 午前11時開場

ところ 姫路文学館講堂

電話0792-93-8228

課題 各題2句・締切午後1時

「誤解」(大阪)池 森子選

「逃げる」(京都)筒井 祥文選

「展開」(神戸)平山 繁夫選

「焼く」(加古川)泉 比呂史選

欠席投句拝辞 席題なし

お話し 時の川柳社主幹 小松原爽介氏

会費 千円(ジュニア無料・発表誌呈)

○大会当日、事前投句(締切済)の入選句発表・

表彰

○食堂がないので昼食を済ませてお越し下さい。

主催 姫路文学館

老心ゆめ

毎月24日締切・30句以内厳守 編集部

岸和田川柳会 長谷川呂万報

週刊の子供ニュースで補充する
 おぞましいニュースばかりでテレビ切る
 ヘルベス禍メニュースに消えた鯉甘煮
 開票のニュースで泣いたり笑ったり
 米兵が死ねばニュースになっている
 抜打ちに彼を尋ねて困らせる
 抜打ちに握手をされた選挙戦
 抜き打ちの調査もこわくない赤字
 抜き打ちにアイラブユーと言ってみる
 抜き打ちに広島焼いたキノコ雲
 抜き打ちに花を攫った旋風
 勝ちたいんや狙ってました日本一
 捨て駒で敵の狙いに探り入れ
 子が狙う遺産どこにもない平和
 狙い付けますネクタイを誉めてみる
 オレオレで孫を装い祖母狙う
 キュービッドわたし狙ってくれますか
 大穴を狙った財布虫の息
 株高を裏から狙う仕事の計

ゆり子 一 條 東 吉 穰 一 丹 吉 香 代 東 雲 ゆ い 珠 子 笑 司 仁 緑 み つ 江 洋 さ よ 子 力 子 英 雄 み よ 子 守 蛙 城

コマーシャルのように狙えぬジャンボくし
 うちなんか盗られるものが無い呑気
 呑気そうな顔して母の気働き
 一役を終えて呑気な風呂上り
 へそくりで歯切れの悪い呂上り
 歯切れよくラジオが叫ぶ123
 歯切れよい返事にまわり明るくし
 新ネタに女三人羨しい

川柳ふうもん吟社 杉本 孝男報

酒のないあの世だ急ぐことはない
 散り急ぐ花には花にある苦勞
 満点でない妻だから気が楽だ
 仏壇のレンタル今に出てきそう
 レンタルで背伸びしている淋しがり
 孫たちが扇の要縮めに来る
 チャイルドシートたらい回しの優れもの
 レンタルのモップ掃除の主役と
 もう二度と来れぬこの世だ急ぐまい
 レンタルじゃ嫌だとボチの目がうるむ
 旅ひとり予約はツイ取つてある
 なに急ぐ冥土が近くになるだけじゃ
 旅ひとり気ままに歩き日が暮れる
 旅ひとり酒を飲んで酔えません
 人間の顔した鬼と住むこの世
 大臣も急所つかれて口ごもる
 遺伝子の表示とうふが増えだした
 レンタルのパソコン俺を馬鹿にする
 旅ひとり拳動不審で留置され

洋々 忠 良 節 子 金 祥 一 瑤 春 名 夢 路 朋 恵 一 京 昌 鼓 雅 女 志 げ 緒 京 子 善 夫 義 徳 茂 登 子 益 子 重 忠 良 雄

ふる里の味覚を運ぶ宅急便
 旅ひとり相槌打つはカメラだけ
 行く先の決らぬままに旅ひとり
 いくつもの仮面レンタルして生きる
 急接近してぐる裏のレタごころ
 しがみを捨てて気ままな旅ひとり
 レンタルの女口説くか秋の酒
 傷心の笛をバッグに旅ひとり
 脳天を川柳が占め旅ひとり
 愛憎の果て飛行機の旅ひとり
 愚痴の山積んで崩して笑い合い

ローズ川柳会 山崎 君子報

心待ちにしながら帰れと言わぬ父
 右向け右昔に戻る世が恐い
 子の歩み待ったあの頃若かった
 御近所も我が家の花を待っている
 後戻り出来ぬ旅路はゆつくりと
 夫待ち子を待ちそして何を待
 待でのサイン見逃し愛は幻に
 霜月の陽は暮れやすし大根干す
 待たせたり待つたり恋の花時計
 これから先神に委せて時を待
 思いつきの嘘をさらりと紙コップ
 三姉妹好みのちがう五色豆
 待つ人のある幸せよ終電車

孝 男 螢 のり代 無 限 はるみ 諏訪男 毅 宗 明 行 男 はつ江 一 條 孝 一 美 籠 いわゑ 武庫坊 年 代 義 子 君 子 黒 兎 報 女

珍客としみじみ語る秋夜長
 ほたる川柳同好会(前月分) 水野 黒兎報

亡き友を偲びしみじみ秋を酌む
枯れてなお威厳を保つ冬の菊
飛行帽の息子に会いに行く知覧
中折帽亡父によく似た人がゆき
母からの便り押し花はらり落ち
特売品しみじみ眺めあきらめる
人生の花の時かと思う日日
遠い人を五百羅漢にさがして
帽子変え散歩の足も軽くなる
クラス会幼なじみがしみじみと
母性愛くすぐる少しドジな彼
くすぐりもおどしも効かず山の神
寒さよけ日差しよけにも着る帽子
何色に咲けばと迷う恋の花
百本の薔薇の魔法が効いてくる
花形も老いて政治家蟬しぐれ
日だまりに未枯れた小菊故郷の色
ベレー帽かぶる持ちたくなる絵筆
わが家には一輪挿しの鬼剣
しみじみと味わえる茶と今日を生き

川柳塔おつぱこ吟社

木村あきら報

祥風 黒兎 蛭柳 禮子 昭子 見清 桂子 敏子 雪子 信男 正三郎 よしろう 柳童 久子 セツ子 長一 春代 緑骨 契子 勝

初恵 吟笑 ひかり あきら 治延 賢 かわり

陰日向なくて真底惚れ直す
地場産業名前ばかりの空洞化
文化財巡り昔に触れてくる
生き抜いてうれしや孫の七五三
夢と言う一字に生涯まどわされ
久し振りローカル線で聞く訛り
初春の山に樹氷の花が咲く
立春を過ぎて足元霜柱
幾度の宿命に耐え春が来る
春の陽が荒んだ心包み込む
考えるポーズで夢見るロタン像

東大阪市川柳同好会

森下

怖い目に遭うから押さぬ保証印
罪と罰やっばり怖い地獄絵図
兵の墓水一杯をかかさな
差し水を老母が時々ささしてくれ
水を得た魚になつた一周忌
幸せな妻で制限なく肥える
内の嫁食べて肥つてよく喋る
辞書を繰りまたまだ私肥やしたい
紙コップ空つぱ秋の音を吸う
天高くピストル響く綱引きだ
味噌汁の熱さ喉こすとき秋に
慈悲深い女はいつも厚化粧
七転び他人の慈悲で起き上がる
悪い噂だけ古里へすぐ届き
柱時計は祖父の噂で刻を打つ
ずる賢い花は蕾のままである

輝夫 八重子 いさむ 放任 寿々女 貞月 正雪 文仙 よしみ 坊太郎 愛論報 猪太郎 朝子 三重子 千里 賢子 湖風 愛論 美弥子 萬的 ばっは シマ子 和代 章久 元紀 定男

ずる休み受話器へ咳をたんと入れ
どちらへも傾くずるい秋ごろ

川柳ねがわ

平松かずみ報

近く日まで愛のシナリオ抱いている
古都歩むシナリオどおり鐘が鳴る
逆縁も神のシナリオなんですわ
人生のシナリオ私こんな役
大空へ明日のシナリオ描こうよ
シナリオのない人生が面白い
逃げ出せぬ地球へ投資樹を植える
道草も投資だつたと今思ふ
お賽銭 閻魔の機嫌とる投資
配当は孫の笑顔という投資
思い切つて私に投資しませんか

とみを 弥生 セツ子 美子 高栄 敬子 一炊 朝子 たもつ いわゑ とし子 弘風 大輪

佳句地十選

池内 かわり

赤ちゃんが来たので今日はお祭りだ
なつとくの話にビールつぎ足して
三世代盛る大皿が轟しい
一筆を入れて貰つて絵が活きる
笑つてる声を聞くのもいい薬
逃げ道を書えているコップ酒
私の辞書から老いの字を削除
触れた手が急にあなたを近くする
独り居の誰はばからぬどっこいしょ
波立てぬ処に捨てるグチ一つ

瑠美子 冬虹 和枝 ふりこ 叮紅 吐来 和子 靖子 楓菜 勝

ワンカップあれば天国覗けます
愛一途いま天国のど真ん中

裏表天国地獄蜘蛛の糸

ほんとうに天国やるからーい店

天国と信じ渡った飢餓の国

天国は退屈すきます閻魔さま

手を挙げぬ子へも先生気を配り

同窓会また先生が小さく見え

教え子の間で仇名生きつづけ

一冊の本をわが師に秋灯下

弁舌に錯覚をずる浮動票

君の力で空を飛べると信じてた

生きてきた今が錯覚かも知れぬ

電照菊いつ寝たかなとひとり言

月並みの暮らしあきあきして家出

月並みな祝辞へスパイスを効かす

月並みな事が出来ないアイウエオ

月並みと云うては月に相済まぬ

月並みの暮しへまつたけが届く

柳柳塔打吹

大森 李惠報

鍋墨を顔中塗られはしゃいでる
子も孫も鍋を食べる暇ない鍋奉行
おだてられ食べる暇ない鍋奉行
空腹の顔を食ってる鍋の底
寄せ鍋に孫がワイワイ寄ってくる
ストーブの鍋ぐつぐつとハモってる
なだめても後には引かぬ反抗期
なだめたりどついたりして屠殺場

弘一 かすみ てまり 仁清 泰子 利昭 亜成 西 典子 みつ子 扶美代 一風 ルイ子 庸佑 恵子 鈍甲 度

生きていいことあるとなだめられ
酒飲みの愚痴をなだめる下戸の知恵
まあまあとなだめる時もやはり酒
かさかさになつてきました倦怠期
かさかさ懐が鳴く空財布
かさかさ長屋で語るねずみたち
かさかさ枯葉になつてゆくいのち
かさかさ妻より長く生きたいこと
慣例といわれ真実目をつぶる
真実は神が知るからおつかない
真実を求めて泳ぐ海の底
土の中真実知っている大根
妻よ聞け真実のべる愛してる
真実を知りたい時は墓にこい
雪の美女狸のお化けだったとさ
両手を広げなだめてくれる空と海
ほらあれがおまえだローソクの炎
真実味なくて犬まで寄りつかぬ
ぼちぼちと真実語る米泥棒
ゆり起こし亡母に聞きたい真実を

和子 清 公恵 美美子 博文 幸子 螢 かつみ 富恵 玲子 重忠 勝見 京子 紀美恵 友楽 和枝 三津子 石花菜 節子 禎元 孝恵

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

前向きに今日という日を渡り終え
どたん場の私にこり九い月
寒月に語る人なく汽車走る
渡りきるまで佇ちつくす親心
果てぬ旅いくつ渡るか丸木橋

恵美子 好栄 民子 ちよえ はるみ

腹ごしらえしてから乗ろう渡し舟
どたん場で本音を吐いて一呼吸
手をとれば丸木橋でも渡ります
世渡りの節目心に沁む米寿
おとし穴数々越えし腰痛む

竹原川柳会

時広 一路報

善を積み過ぎて困ることはない
石鎚山善人だけの遍路道
まつすぐに生き善し悪しは風に問う
ゆずる席無視され共に立つたまま
善いことひとつ今日のわたしに二重丸
悪もせず善にもなれず南無阿弥陀
浄土よいとこ善男善女もどらない
陽が昇る性善説を信じよう
善人の空に太陽二つ画く
みどり児の握った夢よ無限大
亡夫の夢みた日の朝のよい目覚め
道ならぬ夢を見たのでお酌する
老いてなお女は里に夢を見る
少年の夢山が呼ぶ海が呼ぶ
夢ひとつ追うて私の虹を織る
私は私風どころに群を出る
球根とおしゃべり春を約束す
また一つ母に習って強くなる
一サイズ小さな服を買う決意
産卵の海亀まもるいい話
ジェット機で養殖の亀旅に出る
亀の意地ラストスパートかけてみる

かつ子 聖子 博利 清泉 白汀 蘭幸 孝枝 栄恵 笹舟 千代美 万年 静風 淑子 笑子 敬子 房子 輝恵 慶子 半覚 厚朽 汎美 千枝 史宏 節夫 力

洗濯機今日も沢山ありがとう

明日があるあしがあるどと鉄洗う

米を研ぐおいしく炊けよと力入れ

全自动なれたら楽と思われず

許してはいない食器を洗う音

錆びついた命を洗う一人旅

自画像に洗うても消えぬ炎がもえる

上品に食べると味が判らない

アルバイト胸に明日の夢を抱く

ラーメンの温みも知ったアルバイト

川柳塔唐津

久保 正則報

薄い酒知的な方と飲んでいる

なるようになるさ心配ご無用ぞ

お歳暮がお隣まではやってくる

門前町の土産は何時も岩オコシ

つじつまを無理に合わせて共白髪

神の名は知らず賽銭鈴を振る

窓際の椅子で青春巻き戻す

何食えば百まで生きておられるか

てのひらを眺めて明日の目次書く

掴めない郷愁がある水鏡

三幸川柳教室

古久保和子報

風向きで針の筵に座る羽目

手術中秒針だけの待合所

磨りへった針の筵が心地よい

無意識に心の針を持つ怖さ

均等法針も使えるお父さん

富子 多美子 開子 かほる つや子 富美 哲男 君代 可住 兵八郎 輝夫 高明 勝視 水笑 晴翠 虹汀 四郎 正剣

献血の針から貰う人の愛

定年の腕時計には針がない

堪刃袋縫う度針が拗ねている

気まぐれに一目飛び越すミシン針

収穫を終えてやすらぐ力餅

無気力のシャボン玉には彩がない

肩の力ぬけば素直に生きられる

力量の不足を埋める口達者

勝ち組へなびく力は責められず

保育器の力の限り泣く命

続編へ生きる力を小出しする

失敗の都度ついできた底力

腕力を金の力がねじ伏せる

長生きの秘訣を盗むお陰様

盗まれる物は無いけど錠をする

肩越しに盗み読みする週刊誌

言わないでごと盗まれた壁の耳

花盗人よ菊は元気にしてますか

盗聴の心の闇をふと思う

どしゃぶりの雨に魂盗まれる

都会からギャルの新語を盗みだす

ガキ大将がみな盗まれた塾通い

ほいほいと午後は私の翔ぶ時間

ほいほいとするから柔な子に育つ

モットーは今日も元気にホイサッサ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

背もたれない椅子に三年辛抱し

乱世に弱者の出来るのは辛抱

さち子 和子 章子 登美代 信子 三千子 イセ 清史 桂香 純子 朱夏 千秀 准一 幸根 次根 嘉平 当代 みね 靖子 智三 豊太郎 鉄治 美子 碧州 香住 喜美子

辛抱と我慢に耐えた戦中派

辛抱は小さい時から慣れている

辛抱が出来ない老いたなあと思う

犯人に脱帽してる脳回路

あれやこれ老花防止を試しても

ボケ防止まだ間に合うか微妙なり

時々の夫婦喧嘩もボケ防止

京都塔の会

都倉 求芽報

二階に上がりさて何用に来たのかな

会うときの靴はピンクで大きめで

秋桜に微笑み返す地藏さま

大銀杏はらはら過去を振り払う

坂一つ越えると変わる国訛り

買物好きもへこむ交通不案内

丈山の作庭何を見て来たか

枳殻邸せせらぎ耳に舌つづみ

大地の恵み石の割れ目に咲く命

朱の色も鮮やか柿右衛門の皿

自画像に朱の彩を足すまた女

若い日の朱にまじわるのも肥やし

平成のロマン響える朱雀門

時々朱に交わりつて夜なきでみる

襟を立てて口で箸割る夜なきそば

仲割れ元はボタンの掛け違い

足して2で割るのも丸く生きる知恵

永遠の別れ耳に茶碗の音消えぬ

割り切れぬ思いイラクのニュース聴く

弘直 シマ子 慶子 あずき 加津子 欣史子 能子 武庫坊 年代 ふりこ 達子 風云児 あやめ 典子 静枝 メ女 萬的 百合子 求芽 欣之 泰雄 庸佑 楓楽 美籠 満弘 子

票割れても市民生活大差なし
 割れ鍋にとじぶたほどのよい夫婦
 ラーメンの本場あつちにもこつちにも
 本場から友の便りと吟醸酒
 名園をめぐる本場の湯豆腐を
 あこがれの本場バリコレ身に合わず
 外庄に揺らぐ本場の大相撲
 本場ではかえって分からね品選び
 立ち寄ると本場に秘めた味がある
 そこここの夕日の本場日本海

柳柳塔なら

坊農 柳弘報

宏子 高栄 正坊 益子 寿美子 英旺 克治 輝美 葉子 啓子
 蘭香 柳昌 芳香 博一 冬葉 春泉 春雄 孝子 理恵 富子 真理子 絹子 弘風 茂雄 春蘭

土に這い流した汗が本になる
 選挙には運動すると動く金
 地を這うた日は忘れない立志伝
 生きざまを問うには空が青すぎる
 少しずつ這える介護の日々温い
 どん底を這うひたすらへ弥陀も笑む
 秋の空夢どんと高く翔ぶ
 運動量の割には妻はよく食べる
 羊水でモコモコいのち元気です
 干し大根ほめてジョキョングほめられる
 棚田這う軍手の先に父の自負
 勝利者のスタイル雨の御堂筋
 天高く許した罪の二三つ

サークル檸檬

西出 楓葉報

ダン吉 章久 美千子 秋雄 弥生 國治 一風 まつお 朝子 惠美子 道子 俊彦 隆盛
 たもつ みつ子 房子 あずき 哲夫 光久 保子 千代 美龍 楓楽 いわね

多情多恨 煩惱までも格みつく
 五欲どころか限らない煩惱よ
 こつそりと兜を脱いだあとがある
 煩惱があつてこの世が捨てられず
 煩惱に睨まれ理性眠るふり
 煩惱は水琴窟の音に消える
 煮て茹いてまだ煩惱が捌けない
 百八つ撞いても煩惱まといつく
 凡人でよし煩張れる子であれば
 同じ傷持つているから親しめる
 花の前煩惱しばしやすませる

城北川柳会

神夏磯典子報

典子 静枝 久留美 トヨ子 柳一 喜美子 政子 千歩 達子 昭子 高栄 あい子 正 順三 修 春蘭 志華子 重人 ひさ乃 求芽 一枝 史風 倫子 柳弘 千里 公一

無理承知四十八滝バス旅行
 神夏磯典子報
 美代子

かわはら川柳会

上田 俊路報

やんちゃな子この手のひらにうまくのせてのひらにむかご集めて句の味
てのひらの運命線に寄りかかる
てのひらの愛のムチなときかぬ世だ

悦子
かず恵
道子
雅子
好道
余史子
泰良
俊路

手のひらで希望と勇氣握りしめ
手のひらに忍ぶと書いてにぎりしめ
てのひらに祈りをこめた朝の風
輝いた親を越えたいし越えがたし
ときめいて輝いた日が懐かしい
夕映えが輝く明日の夢を抱く
切々の弔辞が過去を輝かす

高知川柳社

川竹 松風報

特賞の予告が少し早過ぎて
予告なく昼飯どきに来るお客
いいところはばかりで騙す予告編
ときめきもドラマの中の一場面
人生のドラマを綴る裏通り
朝ドラを二度見て試す呆け具合
乾杯のドラマ青春の絵の中に
また逢った握手の温い敬老日

幸二
圭二
快風
佐紀子
功

風呂敷をを広げて生きた母思う
にっぽんのサンタ風呂敷提げて来る
息を詰め風呂敷開ける指の先
風呂敷を広げ私をさらけ出し
風呂敷で出たふるさとへ秘書を連れ
風呂敷の結び目硬く果たす義理

孝雄
愛宏
竹萌
京子
哲史
まさ子
和江
圭風
悦子

風呂敷に入り切れない里の幸
風呂敷に愛を包んで母がくる
風呂敷に丸くおさまる握り飯

川柳みちのく

小寺

花峯報

その先を言えば傷つく握手する
消し壺にまだ燃える火を溜めて置く
シナリオにない台詞から駒が出る
握り飯手のぬくもりも味のうち
戦争の火種なかなか消えませぬ
ぶらぶらの岩木登山もする湯治
背なの子が眠つたらしい足の揺れ
神様のシナリオだから旅続く
シナリオのない人生に花も咲き
戦争のシナリオ書いて何残る
またひとり名簿を消したクラス会
消しきれぬ罪が人差し指にある
背を向ける友も一度は握手する
握力の強い婦警に逮捕され
木枯しが冬のシナリオ書いていく
おでん屋の梯子が続く法善寺

典雄
美々
てるみ
あすなろ
きよし
ヒサ子
てる
隼人
順風
慕情
銀波
花匠
雅城
愁女
黙人
花峯
一花
一花

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

花時計定刻に客明け鳥
葉ポタンを一鉢植える年の暮れ
主義主張越えて友情温め合い
慣習を越えたふたりが鳴らす鐘
山や河越えて確かな今がある
忌中ハガキ予期せぬ人のありて悲し

東園
勝巳
純
和子
幸子
正子

女性史に女の誇りあみあげる
老残のわが影やつぱり前屈み
十二月の風はするどく人を刺す
とび石に喜怒哀楽の苔がむす
鴉が鳴く時代の悲鳴聞くように
紅色に染まれば和む冬の花
柿を剥くおんなの首の細きこと
まだ生きるつもりで三年日記買う
バンドエイドはがせは青い静電気

年代
しつ子
武庫坊
寛之
半蔵門
久子
光穂
芳子

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

定年へ強がり言わず道ゆずる
強がり言うて実力ともなわず
強がり言うても舞った桐一葉
強がりと思っていたに頭さげ
少年の思い出多い語り草
少年の絵皿に虹の色溶かす
カラフルな夢一杯の少年期
強がり弱気へ老いの弥次郎兵衛
少年の行く道母の灯が照らす
強がりみつもまない風笑う
少年へバズル未完のまま渡す
少年の日にかえりたい祭笛

千代美
鈴枝
公美枝
弘子
信翁
智恵子
和代
豊枝
久子
正光
雄々
静江

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

いそいそと命洗いに医者通い
いそいそとアメリカを追う日本丸
パソコンがいそいそしてる初メール
スキップからかけ足になる初デート

かつみ
耕策
六点

不器用で竹に噛まれた太い指
密輸入犬が細工を喰ひ分ける
アリバイを細工するほどボロが出る
不細工な男演じた空財布
細工する手先は意外無骨な手
小細工はしない正攻法の父
スーパード細工材料さがす日々
陶工の細工妥協は許さない
ちよつとした細工で丸い嫁姑
ぬくもりがまだある亡母のお針箱
貝細工振れば海辺の音がする
ほころびを縫い合ひながら夫婦旅
針供養五人育てた恩がある
心の傷縫いたい針は売ってない
ほころびた堪忍袋を縫っている
傷口を縫ったひとこと抱いている
千人針もう縫うことがないように
幸せが逃げないように縫うておく
口きかぬ二人に孫のメッセンジャー
里の駅伝看板のある温さ
留守電に今日も点滅ありません
丁重なメッセージには裏があり
河川浄化せよと鯉からメッセージ
九条が平和の使いメッセージ
胎動が母に届けるメッセージ

むらくも川柳会 毛利

りつえ 一知 真一 遠野 章司 庸佑 敦子 たけし ヨシ枝 泰子 フジ 昭平 重人 志洋 吐来 ダン吉 みつこ 美代子 喜久子 久仁雄 専平 一壺 いさお 久仁子 悦子 幸報 彰 定子

大晦日泣いて笑って年を越し
大晦日鐘が鳴る鳴る夢を持つ
トソセット出して晦日の仕事終え
年末の買物そわそわする寒さ
言い過ぎた言葉が一つづをまく
年老いて秋の夜長を持て余す
雲海のかなたへ消えた遺影見る
菊花展想い出たどる在りし日を
タイガース感動もらい秋深む
不景気に追い打ちかける米不作

川柳大阪 高木 信酔

幸 安男 信夫 明朗 惠美子 ます美 ふさえ 寿 昭子 美喜子 楽子 笑風 朝子 民子 本蔭棒 春蘭 東吉 利昭 兵庫 章久 ひろゑ 一風 元紀 ダン吉 喜楽 鉄心 功

国のため出兵でした二等兵
金メダル取り約束の投げキッス
道徳も投げ捨ててある不法ゴミ
井戸端で意見まとめる丸い街
動かない雲に欠伸の青い空
秋晴れにカーテンゆれて気が弾む
意見する親の気持ち子をはしらず
新聞を丸めてポイと捨てる人
古時計家の歴史が動いている
中坊流けじめきっぱり惜しい人
足して二で割ればまるくなる意見
失恋の反動アタマン五ツ食べ
平和かも妻のイビキもリズミカル

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

豊太 さち子 緑良 明子 寿子 優子 順子 よしこ 泰子 正博 克子 大輪 保州 スミ 信醉 まつお 柳弘 かよこ 青道 照月 和子 美花 司 重人 一歩 三十四

考えよう今地球へのプレゼント
 使う度想い出くれるプレゼント
 包帯の中で忠告笑つてる
 包帯がとれたとメル跳ねている
 先が頼もしい泥んこの包帯
 かあさんのまじない効いた包帯だ
 痛いかと包帯に聞く見舞い客
 プレゼントの効き目なかった通知票
 恋の傷包帯流す歳の暮れ
 包帯をはずしたとたんホームラン
 クレームのついたしあしが温かい
 しかしまだ振る賽はある人生譜
 完結にしかしが過ぎる胸のうち
 しかし何も主役は君のほかにはない
 釘を刺ししかし気になる風の彩
 好きだけどしかし別れる方がいい

川柳塔きやらほく

福代

天雀報

紀久子 美子 裕美 英子 かほろ 三男 和重 鉄治 佐一 稚代 富美子 和香 輝子 和子 三喜夫

あの友もこの友も逝き秋深む
 思い出を語ると通夜が更けていく
 初冠雪の和菓子に茶席きりりとす
 戦はしないそんなはずではなかったか
 豊作だ雀お先につまみ食い
 寒い朝でもふんわりと落葉踏む
 想い想いに秋を彩る萬もみじ
 生涯の家みつけたり白い萩
 当てにされ頼られることの有りがたさ
 エンピツが走る枯葉のおちる午後

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

紫泉 天雀 ふみ 蘭 すみえ 田鶴 玲子 やえ 初枝 てい子 庸佑 萬的 見清 則彦 巴子 高栄 蛙 春 千津子 求芽 都代子 タミ 重人 郁子 寿美子 玲子 緑骨

誕生日迎えたくない傘寿です
 温かい助言に勇氣わいてくる
 イラク派遣 特攻隊と同じじやが
 柔ちゃんグラスきらきらおめでどう
 年毎にふれあう仲間増えてくる
 信じない星占いをいつも見る
 雨つづきすこし湿った手紙かく
 NIPPONというブランドが閉ちていく
 お知らせがこたまで返る過疎の村
 子煩悩 満点パパの路郎の句
 誇るものないが健康ありがたい
 小泉よキミがイラクへ行けばよい

堺川柳会

河内

月子報

知香子 満寿巳 久太郎 慶子 和子 英子 つえ子 啓生 尚士 石舟 正坊 玄也 泰子 楓 千代 伽羅 舞夢 篤子 日の出 八千代 朋月 鐘造 俣子 さくら

しゅうとめさん今から行くと言つたはる川ひとつ向こうの町はよその国感激は今乾杯の渦の中

二人寄りやボケとツッコミすぐ出来る疎開先どうしようを捕つたあの小川反骨のビールふわりと泡が立つ

来年は保証できない虎ファン今すぐに問題ないと言う汚染

チャンピオンフラッグを背に吠える虎商いを妻にまかせてヒーヤーマー

定年の余白はタイガースで埋めるうす味も情にあつい食い倒れホラごらん静かに待てば残り福猫にまで六甲風教えこみ

翠洋会

穴吹

尚士報

二の膳に肝吸いついて目出度い日仏壇へ好きなホルモン匂いだけ

肝胆を照らし過ぎたナ空財布ダイヤならへそくりで買う肝つ玉

母さんのへそくり皆が当てにする女房のへそくり犬に探させる

孫はもうへそくりぐらいで間に合わずしつかりとへそくり貯めて遊きましたこつそりと一豊の妻目ざして

へそくりがたんまり喧嘩などしない歯が浮いてそれから鬱が治らない

浮きさしずみあるからいいと澄まし顔

冬虹 時雄

忠敬 龍三

公誠 像山

天笑 つづや

扶美代 りつえ

深雪 月子

惠勇 尚士

千梢 千歩

尚士 春羅

さと美 舞夢 富子 真理子 みつ子 蛙

怖いから夫に浮気きまき出せず無事退院思わず足が宙に浮く人生はドラマ生涯浮き沈み

戦争を知らぬ議員が恐ろしい松の剪定あやこやで丸坊主

停年後引つ込み線の私小説風邪の床五日も無為の年の暮れ反省は首相を辞めてからします

風呂上り娘の部屋をのぞく父一枚の賀状に遠い恋がある

身の丈に合う幸でよし影法師いつまでもこれが最後と子の無心

穴蔵で札束しか抱いていたスタイルを諦めてからよく食べる舞い終えて母は幽かに笑み給う

砂時計逆さまにして十二月砂刻に來るのはきつと回送車

川柳塔まつえ吟社 津川 紫晃報

つまみ食いお皿の盛りがくずれ出す皿盛りにボツンと残る菊の花

ふぐ刺しは王者の顔で皿かざる皿盛りのカマボコ僕を待っている輸入品が皿盛りの中威張ってる皿盛りの中で胸張るあこ野焼き

久峰 照子

孝一 良一

正雄 絹子

石舟 東雲

志華子 美籠

恭昌 さと美

日の出 理恵

正義 正坊

政子 芳山 玲子 茂美

注湖 浜丘 長吉 久枝 幸子

ふるさとの母の笑顔へ足が向く幸せな家からもれる笑い声

思いきり幕を下ろして雑魚でいるばれそうでおひらきにするこの噂

幕おろす時は気前良しとするいつ幕が下りてくるやもわが命

後戻り出来ない幕が今おりの幕引きの最後はちゃんとするつもり

目立とうと蛙二段跳びをする地平線目立つ男は的になる

国連の平和に目立つ小ぜりあい目立たない人が目立つたポランテ

目立ちたい狼が山から降りてくる目立ちたい男やたらと光らせる

無記名の相談軽くあしらわれ苦情相談弱者狙つたおとし穴

ひとりだけ相談する人決めているミスのない男を信じて知恵を借り

相談に乗って一役買って出る相談が進み双方眼鏡拭く

知恵子 昭二 喜美子 義良

邦代 畔 桂子 秀子

繭 螢 小生 たけし

治代 叮紅 日出子

房子 多美え 多賀子

静恵 紫晃

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

加津子 幸生 庸佑 菜月

宏至 巳代一 春蘭

ご無沙汰を詫びて余白のない賀状

ようもまあ僕のカルテにない余白

ゆつたりと取つた余白で絵が生きる

埋められぬ余白素直にありがとう

以下余白その後の事は妻任せ

世界一いい顔だよと言う鏡

古本が無い郊外の古本屋

困った時はよるずの神が来てくれる
追いかけて追いかけて走馬灯
芥になるために生れたわけでない
弾む毬たつぷり嘘がつめてある
髪染めてひとり弾んでいる孤独
青空で弾む気持のポランテア
愛情の手で存分に弾む毬
弾みつけて車椅子押す小さな手
赤トボンツン弾む秋弾む
ふくらんだ奮バスルが解けてゆく
我が母を尊敬しますちらし寿司
頑固爺も墓に入れば親父殿
師の背中みつめひたすら歩を運ぶ
花いちもんめ女の絆増えてゆく
増えてるわ体重計に目をつぶる
レパートリー増えてマイクが放せない
寂しさを増す僕に似る木守柿
知らぬ間に増えた白髪に赤い紅
万札をくずすと増える体脂肪

南大阪川柳会

吉川

寿美報

冬 葉
弘 直
美代子
ますみ
ひさ乃
芳 香
欣 之
幸 美
東 雲
柳 伸
きよみ
さらり
とみを
シマ子
悦 子
まつお
洋 子
欣 子
弥 生

ダン吉

草の芽に時節を待てと励まされ
寒冷から花芽を守る綿帽子
歴史にももしもがあつたら世が変る
気に入らぬ若い芽を剪る世の仕組み
発芽するかたちを秘めてる柿の種
子供達夢という芽を持っている
心ない言葉が伸びる芽を摘む
玉葱の芽吹きへ妻の忌がめぐる
出遅れた芽へあたたかい雨が降る
この壁を越えようとして軋む骨
政治家に欲を捨てろは無理ですか
言い勝った無理へつめたい夜の道
ナイーブな老母の無理きく窓の月
どん底の無理を倍にして返す
生き残るため無理に鬼とも握手する
無理しなやしなやと何もしてくれず
新芽出る間引く手先も震えてる

倉吉川柳会

竹信

照彦報

頂留子
三 男
洞 庵
時 弘
直 子
觀 子
寿 美
雅 文
度
珠 美
志 華子
萬 的
千 里
憲太郎
東 雲
重 人
弘 泰
和 子
日出子
萩 江
京 子
玲 坊
賀 寿恵
勝 誉
螢
ゆり子
石花菜

石花菜

松茸を尻もちついても掴んでた
来年は猿がきりきり舞いをする
百獸の王唸つても檻の中
米泥棒月が証言台に立つ
マナイタの上で六十年経った
年末のボーナス袋他人のこと
深追いはよそう遠くて寺の鐘
動物のボスになつてて人がいる
総入れ歯して人間は生きのびる
順番が来ると貰える感謝状
乳の出る間に子供産みなさい
人間に産まれてよかつたなと思う
利子が利子産んだ時代の物語
門前の銀杏裸で仁王立ち
わたくしも動物角は二本ある
産みなされ育てなさいと太鼓打つ
猫の手を借りたい時は猫居らず
産むだけの鶏舎作つたのは人科
疑えば駱駝もスパイバグダッド
不況だと兵隊ごっこしたくなり

岩美川柳会

石谷美恵子報

重 忠
康 子
よしえ
和 枝
完 司
瑞 子
季 芳
悠 修
芳 光
陸 子
かつみ
幸 子
幸 子
節 子
きみ子
節 子
酔美蓉
登美枝
次 男
照 彦

よしえ

お巡りさんが目に入らぬか此の手帳
見せたくないが見られている手帳
○△×で手帳は事足りる
トイレから手帳ながめて次の策
手帳にはわたしの深い森がある
母と子の絆を残す母子手帳
○と×手帳に残る戦さ跡

起爆刺僕の手帳が置いてある

人生の刻みこまれている手帳

偶然に拾った恋が捨てられぬ

若く見られた偶然の義理一つ

電話から偶然もれた秘密ごと

ライバルに偶然触れた手が温い

札束の効きめは怖い避けている

まふし過ぎる君をこの頃避けている

甘いもの避けきれなくて医者通い

素通りしたらお地蔵さんに睨まれた

女も酒も避けて今では古時計

雪おこし避けてとびこむ縄のれん

募金箱避けて通れぬ場所にある

避けてきた問題傷が深くなる

野辺おくり忠犬ボチがしんがりに

渡り鳥しんがりがいつも母だろう

しんがりで難をのがれる時もある

遠足の保母しんがりが眼が光る

しんがりの補欠でベンチ温める

しんがりを警護出世の太閤記

しんがりを忍者が一人機を狙う

同窓の十人十色の老いが見え

古傷を防ぐ扉の鍵がない

急ぎもせず急かされもせず老いの坂

御隠居もばたばたしてる年の暮れ

老い一つ重ねて越える除夜の鐘

静生

公子

圭一郎

蝨

菖子

裕子

睦子

一京

和枝

蟹郎

きみ子

重忠

公乃

たぬ

完司

忠良

節子

稔

かつみ

孝男

美恵子

正一

芳野

淳司

たけし

良男

老い飾る舞台衣裳に花吹雪

老兵の年年増える喪中状

老いの身に熱いときめき感じる日

ばたばたと風邪を残して孫帰る

老い防く話に乗って来る河童

ばたばたとジングルベルに躍らされ

顔見世の足音ひびく年の暮れ

防災のグッズ揃えて除夜の鐘

鍵一杯かけて心が冷えてゆく

死ぬ時はばたばたしない揚羽蝶

私の辞書から老いの字を削除

始まったばたばた掃除妻の乱

ばたばたと働く亡父の背が恋し

わらべ唄惚けを防いでくれますか

ストレスへ笑い袋をふくらます

年金が減るよりこわい老いの影

残照もあつて余生もまた楽し

毒まんじゅう食わせてくれる人もなく

富柳会

池

森子報

キミエ

花梢

たつお

美千子

静

輝子

ひろし

敬二

史

和代

マサ

もこ

靖子

一慧

英美

和子

けい子

三和子

潤子

富美子

幸雄

正子

直樹

森子報

キミエ

花梢

たつお

美千子

静

鐘造

敏子

年金だけで嘘のない生活

灼熱の汗天職を吹くガラス

思慮深く次を考えている顔だ

風も秋女の笑いをじっと待つ

ももう一度遍路の旅は風遊び

山と川次に消されるのはヒト科

挫かれず貫徹を期しもう一度

夢殿へ残りの夢を結びたい

もう一度峠の母に手を振ろう

残高がゼロになるまで生きてやる

つき通す嘘を本気で聞いてやる

まだ余熱持つ年輪のひとつ

大きいかいや程々と答えてとく

父は背に子の目に残るものを溜め

トラの秋銀杏並木に熱い風

大の字に寝たのは二十歳の昼下がり

鬼となつた石も一度戻そうか

迷つたらまずは大いの方をとる

むらさきのひとつの嘘を差し上げる

二幕目はきつと花野の真ん中に

岬川柳会

八十田洞庵報

内緒ごと知らぬふりしてよい夫婦

根気よく竿に託した今日の漁

繰り返す幼児相手に根気負け

強打者を歩かせてから守備乱れ

としを

欣之

初太郎

鬼焼

洋子

作一郎

ダン吉

翠公

英一

湖風

克己

智彦

花城

一甲

一登

典呼

晴美

定男

洋介

アキ

森子

年子

令子

和香

里子

桜琴

答案紙余白ばかりが輝いて
出来るなら私の頭デジタルに
根気よく探してみよう青い鳥
じいちゃんの内緒話がよく聞こえ
定年の暮にとどかぬアンコール
齒には齒の気なら仇打ち不滅なり
十二月練習曲はシングルベル
コタツして句に知恵しほる寒い雨
情熱に根気を足して花開く

川柳さんだ

北野 哲男報

何事も許す心になれる旅
久し振り妻との旅は暮参り
ちびちびと飲んで幸せかみしめる
久しぶり古里たずね幸もらう
公然と手を握られて片思い
回らない寿司を食べたら目が回る
クリスマス明るい兆し皮算用
吸い殻を数えられたくない夫
金勘定下手で表彰状溜まる
勘定を払う時はいない人
コンピュータ井勘定知つてない
お経聞くつもりで妻の小言聞く

いずも川柳会

佐藤 治代報

球根が目覚め春待つ息づかい
誉めちぎるたつぷり嘘を混ぜながら
養つて両手を離す非常口
追いつこうと息を切らしている私

茂平 富美子 洞庵 とみ 重人 蛙城 悦子 幸 俣子
婦美子 正和 朋月 開子 忠 五月 雅司 歳子 房江 章子 順子 哲男

たつぷりと水がおいしい神の里
ややこしい話は次にのぼしとく
飯の世でフリーに生きる娑婆の風
休養日いい雨が降るいいリズム
フリーター技をいくつも持っている
たつぷりと妻の望みを聞いてやる
たつぷりの風がわたしの背中押す
イントロをたつぷり聞いて出遅れる
指間からぼろぼろ落ちてゆく自由
養うと誰も言つては下さらぬ
次男坊の利発元氣なランドセル
ふる里がたつぷり入る袋買う
ひと息でわたしの坂をかけ登る
ため息は他人の耳に聞こえない
ブランコが揺れても息が合わぬ仲
息抜きのはずだったのについ弾み
何処へでも出雲の神様フリーパス
洋装店ため息一つ吐いて出る
フリーになれぬチリメンジャコの群れ
たつぷりとあれは見えないものもある
母子家庭うるおしている養育費

ふうつと大息ついた寺の坂
不死鳥の声が聞こえる灰の中
鳩尾に反骨の虫三匹
ほとぼりを冷し卒寿の息を継ぐ
息がもれてるにつぼんの肋骨

治代 篤子 多輝子 圭誌朗 玲子 蘭水 歌子 昌枝 多喜 房美 久子 桂子 紫晃 叮紅 芙佐子 満江 文子 ちかし まこと きみえ すみ美 ずみこ 多賀子 章峰 菜美

くらぼ川柳会

前坂なお美報

夢はるかそれでも梯子かけてみる
帯巻いて背筋が伸びてしゃんとする
弁当の中でダシ巻き大いばり
一票入れ票取りゲーム幕となり
引き際を飾るゲーム間に合わぬ
油断して猫に魚を唾えられ
ご優待あなたにだけと油断させ
気持ちはよい朝はスキップしたくなる
国連は戦争ごっこが乗らぬ
夢にむかう充電中のバッテリー
包帯巻くと怪我をした人になる
歯車を合わせるゲームにも慣れる
いつどこで果てるか人にあるゲーム
油断して干した洗濯濡らす雨
油断して心に隙間風が吹く
無気力で流れてないかいわし雲
朝昼晩あなたのが気にかかる
順調に油断するなど影法師
毛穴から気が抜けてゆく雨の午後

帆雀 常子 久代 涼子 美智子 (伊)富子 幸子 あらた 小生 みち子 はお子 悦子 静生 ふみ子 和代 小鹿 なお美 (5)富子 公弘 孝男報 洋々 美恵子 節子 裕花 朋恵 美雪 春名

いじらしい孫の笑顔に癒される
 広げ過ぎた大風呂敷が結べない
 一つの世も悪い奴らが闊歩する
 ひたすらに旧家守った座りだこ
 ガン検診医者も笑顔の太鼓判
 胃検診今年もセーフやれやれだ
 子の机今では婆の辞書がある
 悩んだりあきらめたりの年ごろで
 人生はアウトセーフのいばら道
 虫のよい話に乗るなトゲがある
 いじらしい花が過疎にも咲いていた
 いじらしい仕草に胸が熱くなる
 虐待に耐える幼児がいじらしい
 哀しみの仮面虫干して生きる
 間に合った親の遺言しかと聞く
 面の皮厚いか虫も寄りつかぬ
 受付けの時間にセーフ息切れる
 我慢の虫押え押えて食太る
 生真面目な夫の嘘がいじらしい
 一票をくらしセーフにつなげたい
 虫けらも天下とりたい意地がある

ふくべむら川柳

村上

信子報

静子
 信子
 操子
 はじめ

孫三人風邪一まわり半で止む
 跡取りも出来た将来明るいぞ
 おはようさんおやすみなさいみまえがお
 嫁が来た家中パツと花が咲く
 おぼろ月愛のサインが揺れている

川柳藤井寺

高田美代子報

寛子
 和甫
 昭恵
 春恵
 悦子
 井竿
 瑠美子
 みつこ
 扶美代
 志洋
 六点
 耕策
 史郎
 シマ子
 桂子
 美代子
 喜代子
 アキ
 庸佑
 栄一
 武義
 昭子
 龍一
 敦子

せかされて食べたごはんは味が無い
 気が急ぐが体の方が動かない
 せっかちで集合場所へい一番
 せっかちを机の角に咎められ
 珍客を待つうれしさに落ちつかず
 遮断機の前で地団駄踏んでいる
 せっかちな風が粉雪連れてくる
 せっかちなナメクジ近道を捜す
 墓も立て戒名もつけ遺書も書き
 都合よくせっかちになる妻である

川柳塔おとり

原みさを報

アヤ子
 登志子
 雅枝
 かつみ
 春蘭
 鐘造
 絹歌
 一筒
 いさお
 ヨシ枝
 真一
 幸次郎
 雄々
 和子
 風花
 義弘
 せつ子
 紀子
 仁子
 黙光
 道子
 ヒロ子
 彩子
 宏章

万全へ準備の手から水は漏り
行く先の心の準備だけはした
紅白に合わせおせち出来上がり
春まきの種あれこれと準備する
ままならぬ準備追われる除夜の鐘
年の瀬の準備一切嫁任せ
討入りの晒六尺買ひそえる

川柳エスボ

山本 二郎報

老いてなおいそいそ句会大めどす
いそいそとアツシユに媚びてシッポ振る
妻の待つ家のあかりにいそいそと
いそいそと同窓会に行く仕度
朝早くいそいそ仕度ゴルフの日
いそいそと坂道はしる若い時
いそいそがいやいやになる倦怠期
お茶だけの誘いいそいそ薄化粧
いそいそと出掛けて見たら金無心
いそいそとボジョレーヌーボの解禁日
いそいそと出かける妻は何買いに
ブルへといそいそ夫が出掛ける日
七回忌すませいそいそ旅に出る
いそいそと泣きに行きます文楽座
錦秋にいそいそ友と古都歩く
いそいそと初めてデートしたあの日
いそいそと初孫産衣おばあちゃん
いそいそと出かけた妻の置手紙
いそいそと妻が出迎えボーナス日
恙なき師走の空は私いろ

以和万津

一弘

孝子

富貴子

清子

美佳

みさを

団地

鈍甲

ゆき子

高栄

文子

星花

一炊

一幸

昭一朗

さとし

政雄

さち子

はつよ

とし子

ルイ子

任有

三峰

れい子

三郎

みさと

第4回春はくろぼこ川柳大会

とき 4月4日(日)午前10時30分開場

ところ いなば温泉郷 浜村温泉

「浜村ビューホテル」(JR浜村駅)

電話 0857-82-0531

兼題と選者

当日出句 (正午締切・欠席出句拝辞)

「熱」 天根 夢草選

「誘う」 河内 月子選

「針」 草地 豊子選

「トップ」 新家 完司選

「指」 山本 玲子選

「赤い」 石谷美恵子選

事前出句 「犬」 石井 富子選

宛先〒680-0801鳥取市松並町2-260-16

石井富子宛

3月29日締切 必ず「はがき」使用

各題2句まで、当日出句作品は欠席の

場合無効となります

参加費 三〇〇〇円(昼食・大会誌呈)

賞 最優秀作品賞・優秀作品賞・秀吟賞

懇親宴 二〇〇〇円(当日受付)

問い合わせ

電話0857-84-2886・公弘

主催 くらぼこ川柳会 公家の会

‘04ふあうすと

75周年記念川柳大会

日時 4月18日(日)午前11時開場

場所 兵庫県民会館 9Fホール

TEL 078-321-2131

神戸市中央区下山手通4-16-3

(JR元町・阪神元町駅より北へ徒歩7分)

地下鉄原町前駅東1・2出口よりすぐ

講演 「平家物語と川柳」

武庫川女子大学助教授 野村貴郎先生

宿題 「深い」 天根 夢草選

「愛」 濱野 奇童選

「動く」 河内 天笑選

「砂」 小松原爽介選

「トップ」 大野 風柳選

「仲問」 今川 乱魚選

「傘」 磯野いさむ選

「まんじゅう」 泉 比呂中選

席題 なし・欠席投句拝辞

出句締切 12時(各題2句)

会費 2000円(記念品・発表誌呈)

(昼食は各自でお済ませ下さい)

懇親宴 大会終了後、同会場(9F)にて

当日受付 5000円

柳界展望

○第1回鳥根県民文化祭鳥根文芸は635名の参加で8月末締切られ、受賞者は次のとおり決定。

〈鳥根県知事賞〉

未完の絵びと色足して
るところ 伊藤 玲子

〈金賞〉

わたくしの思い上がりが
野ざらしに 銭山 昌枝

○出雲総合芸術文化祭は11月23日出雲市民会館で104名の参加で開催された。

〈出雲市長賞〉

甘え癖低温火傷してしま
う 園山多賀子

○第13回太平記の里全国川柳大会は、11月30日太田市福祉会館で開催された。本社同人特選句は次のとおり

始末書で叱る社長の思い
やり 大橋 政良

叱られてだれかが詫びる
子沢山 森田 文

○第23回川柳塔みか月川柳大会は、鹿野町営国民宿舎山紫苑で12月7日に開催された。事前投句240名。当日参加者152名。当日の本社同人の受賞者は次のとおり。

〈鹿野町議会議長賞〉

とても明るい顔でまさか
を語るべし 小島 蘭幸

〈鹿野町教育長賞〉

日の丸の白いところは民
の声 原 章峰

〈鹿野郵便局長賞〉

同じ根で風の乱などおこ
さない 政岡日枝子

〈ジゲ起こし推奨知事訪問記念賞〉

ふと我にかえる男の駅が
ある 原 章峰

〈天位〉

年輪を重ねこの世が面白
い 植田 一京

欲張ってみても一日分の
塩 政岡日枝子

お月さま娘が彼を連れて
くる 前 たもつ

○阪神タイガース優勝記念
川柳大会は、12月13日道頓堀くいだおれで開催された。

当日の天位は次のとおり
今が匂いも私に言い聞
かす 岸本 宏章

よこれ無き川が校歌に生
きている 石堂 潤子

船遊び淀川の葦喋りだす
河内 月子

チャンピオンいまは金貸し
しています 河内 月子

新同人紹介

田^た 岡^{おか} 九^{きゅう} 好^{こう}
— 薫風・みつ子・たもつ推薦

ビルで開催された。参加者は174名。当日の本社同人天位は次のとおり
男でしよ胸の心棒折るな
かれ 倉益 一瑤
大胆になるには酒がまだ
足りぬ 澤 裕子
世界一大きなほとけ様に
なる 鈴木 公弘
スポンサーはでっかい海
だ鯛を釣る 新家 完司
○第10回藁(ひこばえ)句
碑を竹原川柳会所属の2氏
が獲得、岡山県笠岡句碑公
園に建立される。

○京都塔の会は平成15年度
の成績を次の通り決定した。
〈最優秀賞〉 山田葉子
〈得点賞〉 ①大野百合子
②高島啓子 ③阿萬萬的
④山田葉子・都倉求芽 ⑤
西村益子

○平成15年いずも賞が決定。
1月17日の新年句会で表彰
された。
〈ユーモア賞〉
傷口に笑いの種を蒔いて
おく 銭山 昌枝

○第22回鳥取県没句供養川
柳大会は、12月14日全労済
りつめ 源田八千代
褒められて叱られて虎登
りつめ 岩本 笑子
大樹一本あの天辺の的に
する 正畑 半覚

○第22回鳥取県没句供養川
柳大会は、12月14日全労済
りつめ 源田八千代
褒められて叱られて虎登
りつめ 岩本 笑子
大樹一本あの天辺の的に
する 正畑 半覚

○第22回鳥取県没句供養川
柳大会は、12月14日全労済
りつめ 源田八千代
褒められて叱られて虎登
りつめ 岩本 笑子
大樹一本あの天辺の的に
する 正畑 半覚

役の句が掲載された。

熱引いた朝のお粥がまた
旨い ほか九句

【NHK学園発行「川柳春
秋」72号の巻頭随想に前た
もつ副理事長が「七十二歳
申としを迎え」と題して執
筆。また、同号の「ペンの
おもむくまに」に小林由
多香相談役が「川柳が私の
元気の源」と題して執筆。

【三省堂「現代川柳鑑賞」
事典・田口麦彦編著 流派
世代をこえた250名の句を掲
載。各11句のうち1句につ
いての解説と経歴の紹介が
ある。川柳塔同人のうち、
奥田みつ子・河内月子・河
内天笑・橋高薫風・木本朱
夏・小島蘭幸・小林由多香
新家完司・高瀬霜石・永田
俊子・西出楓楽・八木千代
の各氏が収録されている。

A6判(文庫判)528頁 価格
1800円 連絡先03—
3230—9412 三省堂

▼訂 正▲

12月号P12下段12行目、
Dア→Dア

1月号P167下段9行目、
10月↓11月

常任理事会P1月10日(出
席者17名 ①80周年大会・
第10回まつりチラシ準備に
ついて。題と選者決定 ②
合同句集PRについて(チ
ラシ・ハガキ使用) ③新
同人推薦1名 ④その他

次回常任理事会P2月6日
(金)9時からアウイナ207号
▼原稿募集(同人)▲
エッセー
本文20字×70行
ひとこと
本文15字×20行
共に題材は自由。題を別
につけて下さい。
締切り日なし。原稿の採否、
添削、掲載の時期について
は編集部に一任して下さい。

那覇川柳の会発足十周年記念 誌上大会作品募集

選選選選選
わみわみ
子美子美
柳風柳風
雄大雄大
選選選選選
龍城草映
吉岡塩見

組1句8計2題と選者(各題2句計8句1組)
(一) 般)「平和」「和風」「台子」「ハ」
(ジュニア)「平和」「和風」「台子」「ハ」
3月15日 消印有効
5月26日 発表誌送付
1組1000円(ジュニアは無料)
出句用紙共(小為替で
那覇市長賞ほか多数
千901-0145 那覇市高良1-2-43
伊是名文字子 TEL098-857-5955
(社)日川協・沖繩川柳協会

なにわ柳壇平成15年十秀(12月27日付朝日新聞)

橋高薫風選(太字は本社同人)

最優秀秀句

日の丸の赤が歪にならぬよう

秀句

一人旅弥勒の指に会いに行く
ご放念下さいませと齒が抜けた

島国の生れで小さい穀を付け

身の丈に合うたチャンスは物足らぬ

おばあさん入学式でハイという

大好きな母にいっぱい叱られる

ネクタイを直してくれたのがチャンス

のちゃんの花嫁姿見たいポチ

満ちたりた日にはテレビを消してある

田中新一選

最優秀秀句

川柳に凝って人間好きになる

秀句

競うのを止めたら沈みそうな海

未知数を如何に生きよう花の彩

子を産んで親の思いが解けてくる

大物に本音が走る夜明け前

横丁の音は復活抱いている

西からも太陽が出るトンチの絵

誰彼なく勝たたいんやと言いつけ

人間に翼を与えぬ神の思慮

心から笑える時にあこがれる

吉田あずき

品川 俊郎

柿花 和夫

堀 ひとし

児玉 節子

樋野 正子

羽森千恵子

岡本 久峰

石森 利昭

志田 千代

前田 ゆい

伊藤 礎由

久保みやこ

高岡 健太

勝山のぼる

柴本 太郎

池部 龍一

伊藤 篤

吉松隆太郎

増田 光男

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 藤井寺	15日(日)午後1時から 自転車・おでん	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 消える・不満・増・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半から 表情・悪人・成功・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 商品・マイナス・すらしり 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0826 豊中市烏江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)正午から 蹴る・順番・税・雰囲気 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
城北 川柳会	21日(土)午後1時から 縮む・ペア・裏・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸和田 川柳会	21日(日)午後1時半から 不安・平均・放言・前置き	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東徒歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
はびきの 市民会 川柳会	22日(日)午後1時から 家・ころり・ロマンス・「笛」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)午後1時から 恨・パズル・人並み	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	23日(月)午後1時から 豆・背く・化粧	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から 餅・雪・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	25日(水)午後6時から 秘・己・利・初	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から 策・緩む・家族・越える	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から 釣る・真似・ガラス・点	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

2月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な ら	5日(木)午後1時から 賭う・昼・下駄	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	6日(金)午後1時から 似る・突然・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	7日(土)午後1時から 原点・包む・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	7日(土)午後1時から 橋・惚け(ほけ)・可愛い	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	8日(日)午後1時から 目・休む・理念・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から カメラ・黒板・浸す 「など(助詞)」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 映画・たおやか・和む・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
川柳塔 唐 津	9日(月)午後1時半から 空間・看護・強引	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から コーヒー・叫ぶ・図太い	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼崎 尾浜 川柳会	10日(火)午後1時半から 予約・温もり・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	12日(木)午後1時から 梅(共選)・ノック ひ・ら・め(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打 吹	14日(土)午後1時から 迂闊・ゆうゆう・遊ぶ	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川柳塔 まつえ	14日(日)午後1時半から 雪・秘密・家計・支える	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川柳塔 みちのく	14日(土)午後4時から 首・悔しい・そっくり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵

編集後記

☆11月・12月号に募集した特集「心に残る一冊」は、19名の方の応募をいただき有難うございました。

☆「書き手」の発掘は、編集者の重要な役割と聞く。

15年8月号の特集「戦争と私」に続き、筆の立つ同人の方を何人も見つけることができ、その意味でも大変有意義な特集であったと、自画自賛している。

☆予想していた通り、最近のベストセラー「バカの壁」は2人の方からエッセーをいただいた。けれど、以前編集後記に書いたように、時間がとれないため読むことができない私は、あせりが一そう強くなった。

☆慕情氏の書いておられる新田次郎作品は、若い頃山歩き(と言っても近郊の低

い山専門)が好きだったので、全作品を読破した。この作家の60歳そこそこの死

は、今も残念に思っている。☆蘭水氏の読まれた「孔子」は、恥ずかしながら途中で投げ出してしまった。考え

てみると読む態度が悪かった。布団へ持ち込むような作品でなく、ちゃんと机で読むべきであった。暇ができたから再挑戦してみよう。

☆肇氏の『万葉集』は七、八年前まで犬養孝先生の講座へ通っていた。ところが、午後一時半から始まるので「犬養節聞きつつ贅沢な昼寝(拙句)という有様。勿体ないことをしたものだ。

☆皆さんのエッセーを読んでいたら案の定、身中の本の虫が暴れ出した。そこで、篠田節子の短篇集「天窓のある家」と、丸谷才一のエッセー「絵具屋の女房」を買って有めた次第。(ふ)

ひとこと

「声」は喜び、励み

句・文集『熱い汗』を発売して二か月。「ダン吉さんに流れる強さと優しさ、この背景を知ることができ大きな感動：考え方、生き方すべてが筋肉の塊といった感じ」など思いもかけぬ「声」もいただきました。

川柳らしきことを始めて18年余、しみじみ喜びを感じています。勝

(岩佐タン吉)

○当たり前の話だが、また一つ歳をとった。近頃と

に家事、料理の手抜きが多くなってきた。つとは王朝文学に憚りある言葉なれど許されたい。得にお料理は手抜きできる社会現象になってきた。デバ地下、ホ

テイチと言わなくても街にはお総菜屋、好みの食材を目の前で揚げる店また多種多彩な冷凍食品などなどにこれ幸いと乗っかっている。

○さて、手許にある句集を繰ってお料理に関係した川

柳句をさがしてみた。

一本の箸へ里辛煮えてくる
良妻賢母ときどき魚の首を切る
はざまみずき
松茸の一万円に腹を立て

若生 茂
カッパ雑話し相手が欲しくなる
津田 暹
おふくろの味をグルメが消してゆく
佐藤良子

主として『平成柳多留』から抜粋させていただいた。私には時代を推移していると感じてならぬ。そし

て今の私、お料理は勿論家事口ポットの発売を待っている。

○本年は、川柳塔創刊八十年記念「合同句集」発行および川柳大会並びに第十回川柳塔まつり開催。加えて、私が席をおく西宮北口川柳会も三十周年記念大会開催。こ来場を。

○皆々さま、寒さの折からお風邪召されませぬようご留意くださいませ。

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（4月号）地名

市 県
姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。





作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑 選
 水煙抄 (8句) 板尾岳人 選
 愛染帖 (3句) 波多野五楽庵 選
 茴香の花 (3句) 藤田泰子 選
 課題吟 (3句) 「空」「間」 河合茂雄 選
 「強」「看」「引」「護」 楠昭子 選
 木村富美子 選
 初歩教室 「椅子」(3句) 三宅保州 担当

4月号発表 (2月15日締切)

本社2月句会

とき 2月6日(金) 午後1時・2時半締切
 ー開催時間にご注意下さい。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛東
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし
 兼題 「鳴る」「ラーメン」 川端一歩 選
 「痛み」「雪」 玉置重人 選
 「這う」 奥田みつ子 選
 河内天笑 選
 席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
 会費 1000円 投句料 500円

5月号

課題吟 「因果」「楽隊」「いらだつ」
 初歩教室 「庭」

本社3月句会 8日(月)午後1時から

兼題 「センス」「奇麗」「抱く」「根」「掘る」

第22年度 夜市川柳募集

第9回「読む」 前川千津子 選
 ハガキに3句 2月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇四年(平成十六年)二月一日発行

編集兼 発行人 河内 權治

印刷所 美研アクト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三町二丁目一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1436
 振替 〇〇九八〇一五 一三三五六八番

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
（日本橋川村ビル4F）
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178